No.11

皇海

1982~1985

群馬大学工学部ワンダーフォーゲル部

巻　頭　言

昭和60年度部長　藤　井　修　一

部誌「皇海」11号をここに発行する。内容は昭和57～60年度の4年間にかけての工学部ワンゲルの活動記録である。昭和58年における部室焼失により、過去の貴重な山行資料を失った我々にとって「記録の蓄積」が大きな課題となった。今回の皇海はそのことを踏まえて、精力的に allaround 山行を重ね、過去の記録を集め公文書とした。これらは4年間のワンゲルの活動状況を知る上での手懸りにもなるし、ガイドブックとして後輩に利用してもらったら幸いである。

4年間のワンゲルを振替えると、気質・運営においてクラブに属する限り、ワンゲル部員として責任と自覚を持たなければならないのに、無関心な者が多いのは残念なことである。助言者となるべき上級生は、山及びクラブにおいて下級生を指導出来るだけの知識を与えよう。先輩から受けた新鮮な感動・ショックetcを伝えておこう。

次に方向性でありますが、前年度の活動方針に捕われることなく、多際なワンデリングを心がけたい。本来ワンゲルのワンデリングに「限定」という言葉は含まれてないと思う。そういう意味で、ワンゲルは限定した活動しか行わないクラグではない。ワンデリングには山も含めた、もっと大きな意味を持っているのではないだろうか？。多際なワンデリングを通して、各自の追求するものの発見、またその各自の追求するものの関連性を見い出すことにより、ワンゲルの追求するものが明確になっていくと思う。

時が経つにつれ、古顔達がどんどん卒業してしまい、ワンゲルの雰囲気が、変化していく今日このごろ、「ワンゲルって、いったい何なんだ？」という問に、一口に言い切れない所に、山及びクラブに対するワンゲルの持つ奥行きの深さを感じぜざる得ないし、またそこにワンゲルのこれからの可能性があるのではないかと思っている。

ワンデリングは不思議な魅力がある。
大いなる想像にかきたてられる
空気はどんなニオイだろうか？
空や岩はどんな色だろうか……？
先入観にのみこまれたら終りである。
映像や書物では絶対得られないホンモノを確かめてみたい
だから渡り鳥は飛びたつのだ!!

工学部ワンダーフォーゲル部・部則

1. 山行届け

(a) 提　　出 …… 部員は定められた山行届出用紙を、原則として、出発日の１週間前に山行届けを提出しなければならない。ただし１泊以下の山行の場合、山行内容により、出発日の数日前でよい。
長期休業の場合は休業以前に届出をすること。

(b) 許可の基準 …… 部長、副部長は、提出内容を詳細に理解し、安全であると認めた場合にはそれを許可する。
ただし、雪山，岩，沢，その他（氷瀑など）については、経験者を含めた話し合いにより、山行が安全であると認めた場合のみ許可する。
なお、無届けの山行は、絶対許されない。

2. 下山届け …… 下山した翌日までに下山届けを提出する。

3. 山行記録 …… 山行後は、２週間以内に、部誌「皇海」編集部員に提出すること。

以上をもって、群大工学部ワンダーフォーゲル部の部則とする。

雪山，沢，岩，その他の規定

オールラウンドな山行を全学部単位に山行を行っている現在のクラブにおいて、以前の規定では現状にあわなくなってきていると同時に、安全性の確保について、部則の改訂の必要性が認識され、検討の結果、以下のものとなる。

雪山規定

１） 適用時期及び山域

- 積雪期の上越以北，アルプス，八ケ岳，奥秩父，３０００ｍ以上の山
- 積雪期は単独禁止

２） 承　　認

- 上記の適用山域は、各学部の執行部及び経験者の許可を得る。
- 日帰りの山行は属する学部の執行部及び経験者の許可を得る。

以上、上記の山行を計画しようとする者は、パーティーの実力を十分考慮し、安全山行を心がけるようにすること。

沢登り規定

沢登りは総合的登山知識，技術が必要なため、慎重な計画，実行が大切である。

１） 計　画 …… • パーティーの実力に合う沢を選定すべきである。的確な状況判断ができる経験を持つ者によりパーティーの実力は決ってくる。
• パーティーの中で最も力の無いと思われる者に合せた計画をすること。
• 広範囲な情報集収に努めること。

２） 溯　行 …… • 未知の沢については読図などでの精神的疲労が大きいことを忘れてはならない。
• 悪場（滝など）は各自（又はパーティー）の実力に応じて、通過手段を考えること。
• 単独は禁止する。
• 沢中での宿泊は、増水に対する注意を欠かしてはならない。

以上、沢登りを行なおうとする者は、上記条件を満たせる場合に、その山行計画は、部長，副部長および経験者によって承認される。

岩登り規定

岩登り等、特殊技術を必要とする様な山域に入る場合には、ゲレンデにおいての確実な技術を収得し、また地域研究など総合的な知識の修得にも努めること。

1） 危険区域について

- 登山届の提出が義務づけられているような危険区域については、原則として禁止する。ただし安全であると認めた場合にのみ（救援体制，保険加入など）、部長，副部長，経験者が許可する場合もありうる。この場合、各学部執行部へ山行届を提出する。
- 部外者を同行する山行は禁止する。

2） ゲレンデについて

一般山行と同様に届け出を必要とする。

遭難対策

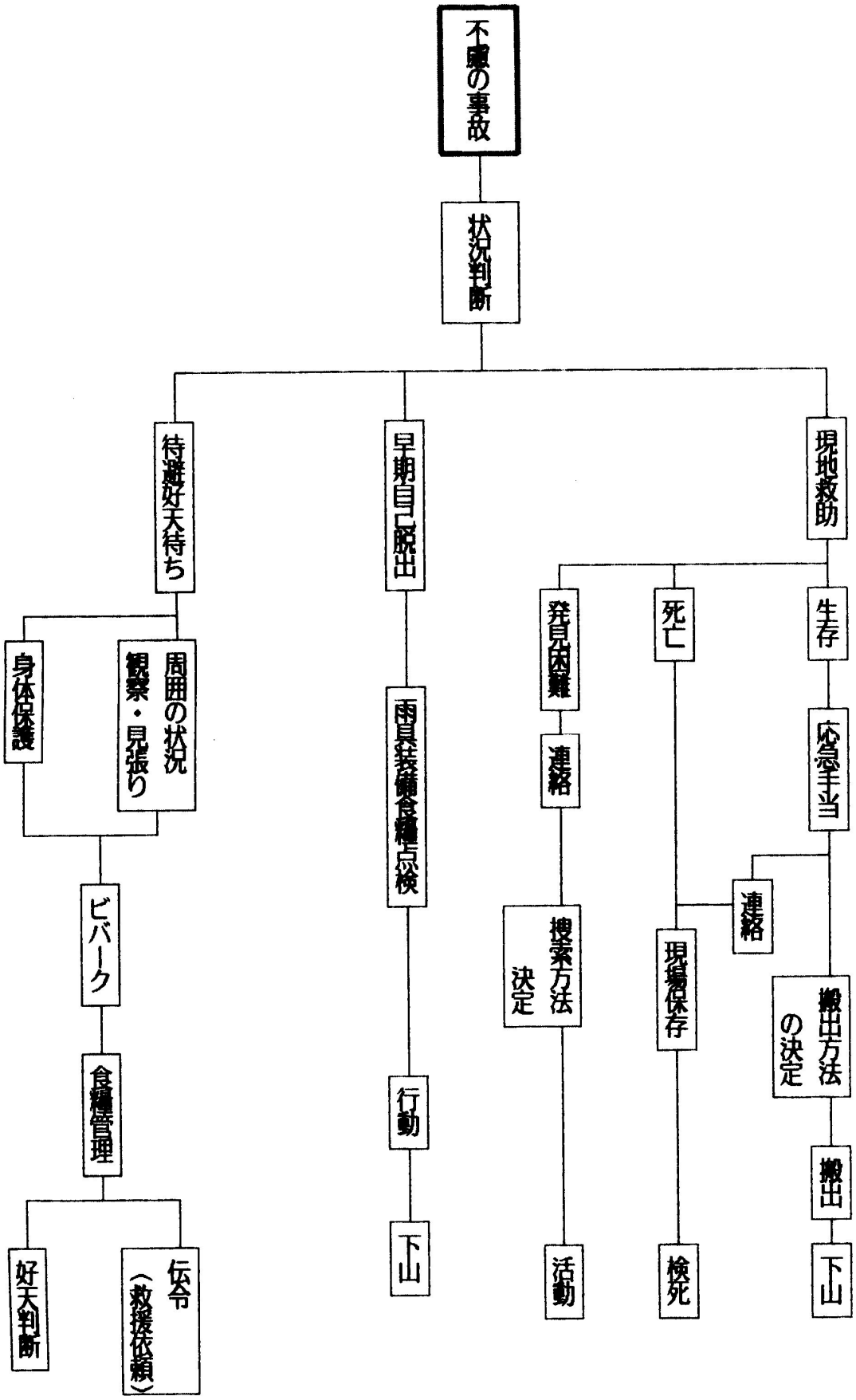
遭難は絶対に起こしてはならない。しかしその対策は打っておくべきである。

対　策 …… • 救助訓練を行う。
• 現役部員の連絡網，対策本部を作っておく。
• ＯＢ関係，団体への協力要請をできるようにしておく。
• 災害時のための積立をしておく。
• 遭難を起こしてしまった時の対処法をよく理解しておくこと。

事故発生の連絡の方法

事故発生直後の行動が終ったら（現場での救援活動が不可能な場合）すみやかに管轄の警察と所属するクラブに連絡する。伝令はできる限り２名をあて、連絡事項は必ず文書にする。

以下緊急時にとるべき行動を図式化すると下記の様になるので知っておくこと。


不慮の事故
状況判断
待避好天待ち
早期自己脱出
現地救助
身体保護
周囲の状況観察・見張り
雨具装備食糧点検
発見困難
死亡
生存
連絡
応急手当
ビバーク
連絡
捜索方法決定
現場保存
搬出方法の決定
食糧管理
行動
搬出
好天判断
伝令（救援依頼）
下山
活動
検死
下山

目　　次

巻頭言　昭和６０年度部長　藤井　修一 … 1
工学部ワンダーフォーゲル部部則 …… 2
目　次 …… 6
昭和５７年度合宿記録　夏合宿　神室山～栗駒山 …… 8
秋合宿　朝日連峰 …… 12
〃　中央アルプス …… 14
昭和５８年度新人強化合宿　表日光 …… 15
夏合宿　朝日連峰 …… 16
南アルプス北部　沢パーティー …… 22
練習山行　荷上げ山行　本山行
昭和５９年度新人強化合宿　庚申山～皇海山 …… 25
〃　袈裟丸山～皇海山 …… 26
夏合宿　青森～秋田県境　十和田湖，八甲田連峰 …… 28
荷上げ山行　本山行
秋合宿　中央アルプス北部 …… 32
〃　飯豊連峰 …… 33
春スキー合宿　尾瀬 …… 36
昭和６０年度新人強化合宿　日光連山 …… 38
〃　庚申山～皇海山 …… 39
夏合宿　会越国境　荷上げ山行 …… 39
本山行 …… 41
秋合宿　南アルプス …… 45
春スキー合宿　尾瀬 …… 47
昭和５７年度個人山行記録
６　月　巻機山 …… 49
飯豊連峰 …… 50
１０月　白毛門～谷川 …… 51
朝日連峰 …… 51
会津駒ケ岳，裏燧 …… 52
１２月　冬山　南アルプス　悪沢岳，赤石岳 …… 53
３　月　春山　三国峠～谷川岳 …… 55
上州武尊 …… 58
昭和５８年度個人山行記録
４　月　西黒沢　山スキー …… 60
５　月　芝倉沢　山スキー …… 60
日光白根 …… 61
６　月　立山～剣　山スキー …… 61
１０月　飯豊連峰 …… 63
１２月　冬山　平標～日白山～仙ノ倉山荘 …… 64
３　月　春山　上州武尊 …… 66
尾瀬沼 …… 68
昭和５９年度個人山行記録
５　月　白馬岳　山スキー …… 68
６　月　月山，鳥海山　山スキー …… 69
８　月　ダイコンオロシ沢 …… 71
大菩薩　丹波川，小室川谷 …… 71
ダイコンオロシ沢，西ゼン …… 72
登川米子沢 …… 72
１２月　冬山　甲斐駒～仙丈 …… 73
１　月　白毛門 …… 76

松木川黒沢　アイスクライミング …… 76
裏妙義　入山川ホトケ沢　アイスクライミング …… 77
松木川ウメコバ沢　アイスクライミング …… 77
吾妻渓谷　栃洞ノ滝　アイスクライミング …… 77
南八ケ岳 …… 78
2　月　春山　馬蹄 …… 78
上州武尊 …… 81
3　月　乗鞍高原 …… 82
平ケ岳　山スキー …… 83
昭和６０年度個人山行記録
4　月　巻機山　山スキー …… 84
西黒沢　山スキー …… 85
神楽峰～雁ケ峰　山スキー …… 85
守門岳，浅草岳　山スキー …… 85
至仏山　山スキー …… 86
5　月　燧，芝倉沢　山スキー …… 87
白毛門～谷川 …… 87
巻機山　山スキー …… 88
北穂高岳，奥穂高岳 …… 89
裏妙義　入山川ホトケ沢 …… 90
双子山　中央リッジルート …… 91
西上州　鹿岳 …… 91
6　月　針ノ木雪渓，白馬大雪渓　スキー …… 92
上州武尊荒山沢 …… 93
上州武尊西俣沢 …… 93
7　月　大源太川北沢 …… 94
一ノ倉沢　烏帽子沢変形チムニールート …… 95
8　月　仙ノ倉谷　東・西ゼン …… 95
湯檜曾川本谷 …… 96
マチガ沢　東南稜 …… 96
一ノ倉沢　烏帽子沢中央稜 …… 97
一ノ倉沢　烏帽子沢奥壁凹状岩壁ルート …… 97
9　月　谷川ヒツゴー沢 …… 98
１０月　登川米子沢 …… 99
一ノ倉沢　南稜 …… 100
１２月　冬山　南八ケ岳 …… 100
1　月　南八ケ岳阿弥陀岳北稜 …… 101
3　月　巻機山　山スキー …… 102
春山　鳳凰三山 …… 103
4　月　八方尾根　山スキー …… 104
昭和６１年度個人山行記録
8　月　仙ノ倉谷東ゼン …… 105
魚野川万太郎本谷・仙ノ倉谷西ゼン …… 106
１０月　登川米子沢・北岳バットレス（ｄガリー～第４尾根主稜）（９月） …… 107
１１月　さらば，我愛しの"皇海" …… 108
沢登りの為に（主に利根川源流について） …… 109
夏合宿概念図 …… 111
岩・沢のルート図 …… 115
ＯＢ住所録 …… 122
部員住所録 …… 134
編集後記 …… 137

昭和５７年度夏合宿　（神室～栗駒）

日　　程：７月18日～７月30日

予 備 日：前２日、後２日

メンバー：C.L.・小潟（３年）　S.L.・水上（３年）　気象・清水（２年）、越沼（２年）　医療・木津（３年）、田村（２年）　会計・豊島（２年）　食料・山中（２年）、新井（２年）　装備・坂本（２年）、飯塚（２年）

第一部　山行記録

出発～β_1　７月18、19日　曇　（夜行）

荷分けも済んでこれでいよいよ夏合宿に行くのだという実感がわいてきた。翌日、小山駅から夜行列車で新庄へと向かうが、このとき山中が列車に乗りそこねるというハプニングもあったが、なんとか無事出発することができた。新庄駅につき、そこから神室山登山口への手前までタクシーで乗りつけた。ここで差し入れてもらったたくさんのスイカのうち数個をたべた後、重い荷を背負い歩き始めた。午前中は皆夜行のつかれと、多少の練習不足のせいかよく汗をかき疲労もあるようだったが、稜線に出て少し行った所の雪渓で冷たい水を飲み生き返った様である。

○この日の行動

神室山登山口手前９：15発→稜線へ14：15着→テン場15：30着（神室山山頂より西へ５分程下り、山小屋の西側へテントを張る。）

水場→テン場より南か、やや南南東へ下り２～３分の所

７月20日　晴れ　β_1～β_2

今日は朝もやは多少あるものの晴れそうである。いったん神室山に戻り南東へ続く尾根を下る。少し行くと二俣に尾根が分れるが、見晴らしもよく、迷わず左の尾根に乗って行く。あと今日行程は、稜線づたいに歩いていき、その稜線もはっきりしているので差程問題もなくテン場に到着。ここまでのヤブはそれ程濃くはない。

○この日の行動

β_1発４：40→テン場着12：50（神室山と軍沢岳の程中間の1115.6のピークを少し過ぎた所）水場→テン場より南かやや南々西へ下り７～８分の所。

７月21日　晴れ　β_2～β_3

昨晩、坂本が体調をくずし熱を出したため今朝様子を見るために出発を遅らせ、７：00にテン場を出た。坂本もなんとか大丈夫の様である。稜線を南々東に進み、そこから大き

く、東北東へと進路をかえる。ここは稜線から右よりに歩くと、ササヤブで背も低く、大変歩きやすい。軍沢岳を昼過ぎに通過し、その下の目的の鞍部にテントを張る。今日はよく晴れてヤブも低いせいか、とても暑い日だった。

○この日の行動

β_2発7：00→軍沢岳着12：15→テン場着13：40（軍沢岳と二俣に分かれる県境との間にある鞍部）　水場→テン場より北北東へ12～15分の所

7月22日　晴れ　β_3～β_4

この日もよく晴れた暑い日だった。テン場から二俣に分かれた県境線までは、ゆるやかに下る。そこから左の尾根に乗るのであるがここは急に落ちこんでいて、どこが尾根なのかよく分からない所である。コンパスを気にしないで歩いていると、右の尾根に乗ってしまうので思い切って尾根をはずすようにして下っていく。コンパスをたよりにして下っていったが、やや右側にずれ、目前が切れ込んでいた。やや左に進路を変え、無事目的の尾根に乗ることができた。この辺は高い木の密生したヤブである。この難所をぬけると尾根はわりとゆるやかな下りが続きヤブもササヤブに変わる。ヤブは薄くたいへん歩きやすい。この日の予定では、鬼首峠までぬけることになっており、山に入ってから初めて車道という人の通る道にでるのである。皆の足どりも軽やかで鬼首峠の手前1.5㎞地点に丸太の橋があり、これを渡ると林業のためと思われる道が続いていた。予定テン場まではもう一息である。テン場はかなり早かったが午後は休み半休養日とする。この日の夕方テン場にてものすごい夕立ちがきた。

○この日の行動

β_3発5：10→テン場着9：25（鬼首峠）

水場→車道を北へ歩いて15～20分の所に沢がある。

7月23日　くもり　β_4～β_5

この日は、再度坂本の体調が悪化し、やむなく下山させる事になり、我々はこの場に沈澱することになった。ヒッチハイクにより車を止め、山中が付きそっていく事になった。

7月24日　雨　β_5～β_6

昨夜から降り始めていた雨が、今朝もまた降りつづけている。昨日一日分沈澱を使ってしまったので、少し無理をしていくことにする。かなりガスが濃く、視界がきかない。テン場をたって、再び尾根にとりつく、東北へ進み、そこから孤を描きながら進路を東南東に取り、小さなピークを踏んだ後、北へ落ちこむ様に下っていくのであるが、この東南東へ続くはずの尾根が尾根らしくなくはっきりしない。一時間程右往左往して、とにかくコンパスをたよりに、東南東に進路をとる。尾根上の地形が難しく、尾根らしいものが平行して二本から三本も走っているような所である。これを右へ左へと渡りながら、どうにか

予定の小さなピークに着き北に向かって下っていった。視界がきいていればこんなには苦労しなかったとは思うが、それでも分かりにくい所である事は確かである。六日目の予定テン場では、水取りが危ぶまれるので途中で水を取り、先を急いだ。その後テン場までの道のりにおいては迷う事なく無事到着。体が雨にぬれてつめたい。

○この日の行動

β_5発5：00→テン場着1：20（1097手前の比較的平らな尾根上） 水場→1085手前の鞍部から南西に下り5分の所。

7月25日　雨　β_6～β_7

雨は5日目から、ずっと降りつづけている。しかし今日頑張れば一応荷上げ地点までいけ、一息できるので雨の中を行くことにする。1298のピークまでは尾根もはっきりしていて順調に進んだ。途中テン場になりそうな所も2ケ所程あった。1298のピークを過ぎたあたりから猛列なヤブで、少し下りに入った。ここで進路が左にずれていることに気づき、右へ回り込み、東南東に下る屋根をさがすがわからない。偵察隊を出したが、尾根がはっきりせず視界もきかないのでなんとかテン場をさがし今日はここにテントを張ることにする。テントを張っている間に再び偵察隊を出し夕刻3年で話し合って検討した結果、山中の見にいった方へ進むことに決める。ぐしょぐしょに濡れ、斜めに張られたテントの中で、寒さと不安のため眠れぬ一夜を過ごす。天候に対して晴れてくれ！という願望と晴れろ！という怒りが込み上げてきた。

○この日の行動

β_6発5：50→1298のピーク着12：10→テン場着15：00（1298ピークから東南東に10分程下った、沢ぞいの小さな草原） 約3時間の偵察も含む。水場→テン場より沢ぞいに下りすぐの所。

7月26日　雨　β_7～β_8

今日もまだ降り続いている。朝方ガスが一段と濃かったので、しばらく様子をみて多少ガスが薄くなった所で出発する。荷上げ地まではもうすぐのはずである。テン場を出て昨日山中の下見にいった方向へ下っていく。1時間程歩いたであろうか、どうやら方向もあっていたようであり平らな尾根を進んでいく。この辺にくると幾分ヤブの背も低くなり多少あたりも見渡せるようになる。突然一つの赤布が現われ、今まで沈んでいてただもくもくと歩いていた皆にも元気が戻ってきた。足どりも速くなり、小休を取ると体が冷えるので3時間以上ぶっ通しで歩き続けた。赤布の数が増えてきた。やっとヤブをぬけて小さな草原についた。間ちがいなくここが荷上げ地である。うれしさのあまり皆でバンザイを賛唱した。この日、稜線をはずして一泊し、天気の様子をうかがう。

○この日の行動

β_7発6：25→荷上げ地着9：35（1191.5のピーク）→テン場着12：00（荷上げ地より水

沢森をぬけ、林道の交差する所）

7月27日　雨　δ_8~δ_9

天気の回復の見込みなく、この日下山大森平へとぬける。

第二部　山行回想

クラブ活動のメインである夏合宿を終えた今、よかった、ほっとした、というよりも、なぜか気がぬけて心の中が空っぽである。疲れていて眠いはずなのだがなんとなく眠れない。頭の中には、合宿中の事がよみがえってくるばかりで、今となって、言葉にしてしまえば無事帰ってこれでよかったの一言につきるが、心には言い尽くせないような何かが残った。5日目、6日目と雨に降られ一時も服が乾かず、夜も寒さのためよく眠れなかった。そして7日目も雨…肉体的にも精神的にもかなりまいっていた。3年であるという自覚が自分をささえていたように思う。皆も立場こそ違え同じ心境だったろう。この日、行動中誰かわからないが歌を歌いはじめた。それは2人、3人と序々に広がっていった。皆互いにはげましあい、自分自身をも元気づけているように聞こえた。今日頑張れば荷上げ地まで行ける…そう思って皆頑張っていたと思う。この日の行程を半ば来た所で平らなピークにでた。まわりはガスっていて視界は30m～50mだった。下り始めてからしばらくして、歩く方向が違うのに気づいた。そしてそこからトラバース…、いくらか歩くと今度は前が切れていた。自分達の現在地がわからない。小潟と山中が2手に分かれて偵察に行く。その間で連絡をとるために一人ポツンと立っている…。なんとも心細い。回りには、シトシトと雨が降っている。2人もやはり心細いのか、それとも自分の位置を確認するためか、「オーイ」と声をかけてくる。それに応えて声をかける。やがて山中から「こっちがあってるぞー」の声、ほっとしたのもつかの間、小潟からも同じ声…。またわからなくなった。自分としてはこの時真剣にビバークを考えた。あたりは高さ3m程の木が密生しており、下からは腰まであるササが地を埋めつくしていた。しかしなんとかテン場を見つけテントを張る。その間もう一度自分と山中で偵察にいく。小潟のいった尾根にいくことにした。しきりにコンパスで方向をたしかめる。行くはずの尾根は、東から東南東へ変わるはずである。しかしずい分下ってみたがコンパスの針は東のままだった。東南東に続く尾根はない。これは違う、そう2人で思い引き返し、前に山中が行った尾根であろうという事になったが、山中自身にも自信がない。尾根は直接東南東に伸びている感じである。今までさほど東に下った感覚はない。沈澱が使えるのは後一日、しかし天気はだんだん悪化していくのが目に見えている。もう余裕がなく、せっぱつまった感じだった。2年には事態を知らせていなかったが、やはりわかるのであろうか、テントの中で続々と歌を歌いはじめた。その歌はつらいのに耐え、そしてそれをかくすかのように妙に明るく聞えてきた。やがて3年のテントでも歌いはじめた。子供の頃読んだ物語で、船が沈み、漂流していた人々が力尽きようとしていた時に、ひとりの女性の歌声にはげまされ、その歌声の輪が広がり、

無事に翌朝、みんな救助された。という話を思いだした…。ＰＭ7：00をまわって寝る仕度を始め、みんな濡れた身で眠れない一夜を過ごす。みんなで寄りそい寒さに耐え朝がくるのを待った。翌朝皆笑顔を見せていたが、やはり疲れと心配そうな様子がうかがえる。皆で歩きながら方向を指示し合う。かなり歩いた頃であろうか、突然一つの赤布を見つけた。みんな妙に元気が出てきた。またひとつ、そしてまたひとつと赤布を見つける度に、道はこれで間違っていないんだと自分に確めた。荷上げ地まであと一息である。前の方から歓声が聞こえた。荷上げ地にでたのか？そう思った。しかし違っていた。また聞えた、今度こそと思い片足をぬかるみにつっこんでしまう程気が焦っていた。しかしまた違っていた。だんだん気がたかぶってくると伴に、もしかしたら道が違っていたのではないか…という不安がまた心の片すみに残っていた。でももう少しいけば必ず着く…。そう自分に言い聞かせて先を急いだ。もう体は歩いていても冷たく、歩き始めて3時間近く経過していた。3度目の歓声が起った。今度こそ間ちがいない。皆先を争うようにヤブに向ってつき進んだ。自分も勢いあまって前をつき倒すかっこうになり倒れこんだ。やっと着いたぞ！そう思ったとき本当にうれしかった。皆もバンザイを賛唱していた。本当に皆も無事にでられてよかった…そう思っていたのだろう。この日、稜線をはずして一泊。天気の回復を望んだがその見込みなく7／27下山。下界ではこの頃長崎において死者百二十数名を出す程の雨による災害にみまわれており、北海道を除き全国的に大なり小なり被害を受けていた。

これまで3年間の山行を通して思うことは、自分の気力、体力はもちろんのことであるが、登山というのは天候との戦いであり、それに打ち勝つためには各自の体力向上への努力及び充分なコースの下調べと、自分の限界を正面から見極めることであると思う。

後　述

二年生が予想以上によく動いてくれ、これからに期待がもてるものと思う。これから入ってくる後輩への指導もしっかりと…。最後にC.L.ごくろうさまでした。S.L.として数々の致らなかった点をお詫びします。又このコースは今まで先輩も含め3度程挑戦してきて果たせなかった所であり、いつの日か後輩に是非実現させてもらいたいと思うものであります。今日の詳しい記録は別に残し、後輩におくります。

57.7.27　水上　筆

昭和57年度秋合宿（朝日連峰）

日　　時：1982年10月2日～6日

メンバー：C.L.・新井、S.L.・飯塚、清水、小潟

10月2日（夜行）・10月3日　晴れ

桐生〜鶴岡＝バス＝大鳥（10：00）——大鳥池（13：20）$\mathfrak{B}_1$

前夜発の夜行で出発する。参加予定の田村君が急拠行けなくなったため、4人パーティーとなった。初日は比較的楽な大鳥池までの道のり。夜行疲れのせいもあって、のんびりと歩く。大鳥池に着き、ひと休みしていると、黒のお揃いのシャツを着たどこかのパーティーが来て、整列し、かけ声をだしながら柔軟体操を始めた。大鳥池は山に囲まれた閑静な所で、テン場には最高であった。

10月4日　雨のち曇

$\mathfrak{B}_1$（7：30）——以東岳（11：05）——狐穴小屋（13：23）——寒江工（14：15）——竜門小屋（15：10）$\mathfrak{B}_2$

朝降っていた雨も、三角峰の手前あたりで上がった。このあたりから視界が広がり、気分が良くなった。以東岳手前を、先の黒シャツパーティーがかけ声を出しながら登って行く。よくよくかけ声の好きなパーティーである。以東岳から狐穴小屋に向かう道はとてもなだらかで、サクサクと歩く。少し遅くなったが、テン場の竜門小屋に着く。朝日連峰は比較的水が豊富に取れる。

10月5日　晴れ

$\mathfrak{B}_2$（6：15）——西朝日岳（8：00）——朝日岳（11：00）——小朝日岳（13：35）——鳥原小屋（14：40）$\mathfrak{B}_3$

途中、西朝日岳のピークをピストンする。大朝日小屋にザックを置き、大朝日岳に登る。頂上は風もなく陽射しがとても暖かくて、最高の気分であった。空には、とんびが飛んでくるくると輪をかいており、秋の1日を大いに満喫した。思わず昼寝をしてしまった。ああ、日本人に生まれてよかった。昼食後、鳥原小屋に向う。小屋付近は登山道を作るため、人がかなり入っていた。このあたりには熊が数百頭ほどいると猟師の人が話をしてくれたが、その人は熊よりもはるかにたくましく思えた。

10月6日　晴れ

$\mathfrak{B}_3$（7：20）——白滝＝左沢〜山形〜桐生

一気に登山道を駆けおりる。毎度の事ながら、林道歩きは非常に疲れる。タクシーを呼ぼうとしたが、道がわからないと断わられ困っていたところに、運よく車が通りかかり、なんと左沢まで乗せてもらった。とても良い気分の山行であった。

昭和５７年度秋合宿（中央アルプス）

日　　時：1982年10月3日（夜行）～10月6日（予備日２日）

メンバー：C.L　越沼　　敦　２K　　木津　和久　３S

　　S.L　坂本　　敦　２C　　水上　　徹　３S

　　豊島　吉彰　２L　　山中　　卓　２M

詳細な記録が手許に無いので、以下は乏しい記憶をもとにした感想である。

10月3日

夜行に乗って松本まで行く。駅の待合室で酒を飲みつつ一夜を過した。

10月4日　松本▬▬伊那═══桂小場――大樽小屋――将棊頭山（西駒山荘⛺1）

早朝松本を発ち飯田線伊那駅下車。ここからタクシーで行けるところまで行ってもらう。前年の雪の影響とかで、発電所手前までしか入ってくれなかったように思う。歩き始めたのが10時くらいであった。天場の西駒山荘には14時から15時の間についた。久々の山歩きを楽しみながら、ワイワイと登ったように思う。寒かったので山荘の中にテントを張って眠った。この日の行動時間は４～５時間、天気晴れ。

10月5日

⛺1――駒ケ岳――宝剣岳――檜尾岳――檜尾山荘⛺2

西駒山荘を出発。氷が張っていたような気もする。１時間半くらいで駒ケ岳到着。寒かったために、少し下りて休んだように思う。宝剣は、我々の技量であれば、ということでそのまま稜線を通過した。が、やはり怖かった。一歩誤まれば滑落して助かるというところではない。通過に30、40分を要したと思う。今日の行程の約半分を終えた残りがきつかった。天場である檜尾避難小屋に着いた時にはかなり遅く日も暮れていた。

この日の夕方には雪が降り始め、またC.Lがカゼで発熱した。

10月６日

⛺2――檜尾根――中御所═══駒ケ根▬▬桐生

朝起きて小屋から出てみると、あたり一面真っ白の雪景色となっていた。予定では空木岳を越えて越百山までとなっていたが、空木岳付近は岩稜帯であり、我々の装備では不安であることと、前夜からのC.Lのカゼにより途中下山を決定した。ひたすら檜尾根を下ること３時間くらいで中御所に下りる。ここからは車道歩きとなった。途中でバスに乗り駒ケ根駅まで行く。あとは汽車に乗って桐生に帰った。

10月の初めでもこのクラスの稜線上では寒気団の勢力次第では降雪、結氷に見舞われる

こともある。天候には充分に注意したい。最後に、雪の中で跳ねていたＴ君が印象的だったことを記してペンを置きます。　（文責Ｋ沼）

昭和５８年度新人強化合宿（表日光）

日　　程：４月29日～５月１日　記録：山中
メンバー：C.L・清水浩彰（建３）　S.L・山中卓（機２）　食糧・田村博之（機３）
医療・坂本敦（応化）　気象・高橋好幸（建２）　会計、装備・小池寛喜（化工２）

４月29日（金）　晴れ
桐生――東武日光――唐沢小屋

桐生を5:29に出発の予定がＳ氏（愛称たぬき）の遅刻により桐生を6:25 で出発する。余談ではあるが、Ｓ氏を迎えに行った者の話によると、Ｓ氏は昨夜の下宿の新歓で飲みすぎ、ヘドの中で寝ていたとのこと。

桐生を6:25 で出発。足利でＦＯＣＵＳ（雑誌）を買って延々一時間も待っていてくれた田村氏と合流。東武日光へ。

東武日光から街中を抜け、二荒山神社を10:00に出発

途中案内板に稚児ケ墓付近に水場があると書いてあったが、1250ｍ付近に小さな水場があった。この間水場らしきものなし。1250ｍ付近に道標がある。ここを過ぎて樹林帯に入ってしばらく行くと“水呑”という場所があり、ここはなかなか良い水場だそうである。

皆、運動不足と、宿酔（Ｓ氏、Ｔ氏）のため、ペースは極めてのんびり。1250ｍ付近の道標で。12:50まで30分も休憩してしまった。

12:30に黒岩手前の1840ｍ付近に着き、2040ｍ付近に3:45着。天気図を取り出発。二荒山神社からの登りは、ずっとカンカン照りですごい暑さだったが、この頃から寒くなってきた。黒岩には６テンが４、５張り張れる。

唐沢小屋が見えてから、かなり歩いて、5:15小屋着。水場は、北西に道に沿って下って10分の所にすばらしい水場あり。

唐沢小屋には、文教大のパーティー５人がいた。非常に疲れた一日であった。夕食にホルモンを食べたが、酸っぱかった。どうやら腐っていたようである。日中の暑さの為か。

５月30日（土）　曇り
唐沢小屋――女峰――富士見峠――大・小真名子山――志津小屋

昨夜、皆残さず腐ったホルモン焼を食べたのに一人も不調な人間は居らず、皆快調その

もの。7:00に唐沢小屋発、7:50女峰着。30分休み、帝釈へ向かう。帝釈山8:45着。帝釈からの下りは、雪があり大変歩きやすかった。9:30富士見峠着。富士見峠は、ビールのケースや空きカンが捨ててあり汚かった。こういうことになるから、山の開発は、あまりやってほしくない。

小真名子着10:50。大真名子1:10着。大真名子山頂に何かの像有り。大真名子山から志津小屋は、最初稜線の少し左側を下り、地図上で曲がっている所から、材木の伐採跡を抜け、少しガレた所を下り、林道に出る。大真名子からの眺望はなかなか良かった。志津小屋は、マタギの為の小屋という感じで戸はついてないし、汚いし、嫌な小屋である。志津小屋の前に、テント2張（もっと張れる所はあるが）程、張れる。

水場は、男体山の方の登山道を登っていき、一合目の道標のある所を右に入った砂防堤の上にあり。ただし、朝は水が流れていない。大真名子からの下り、方向が南西に変り、ガレ場を過ぎてからの道がわかりにくい。志津小屋着3:15。

5月1日（日）　曇り

志津小屋――男体山――中宮祠

7:15志津小屋発。男体山頂萬10:35ガスの為、中禅寺湖も何も見えない。山頂付近の小屋で昼飯。あとはひたすら下るだけ。五合目11:10、中宮祠12:08着。飛び石とはいえ連休で、下界に降りたとたん、人、車の波に襲われ、山行の想い出も、街のジャズにかき消されてしまった。

ポピュラーなコースだと思っていたが、意外に人は少なく、しかも、女峰から富士見峠には、春、人の入山した形跡はなかった。志津小屋は、小屋というよりほったて小屋という感じ。小屋のすぐ側に水があるが、日誌を読んだところ、皆煮沸して飲んでいるようだ。ワカンは、念の為一つ持っていった方が良いが二つも三つもいらないと思う。

昭和５８年度夏合宿（朝日連峰）

日　　時：1983年7月17日～7月30日（予備日4日）

メンバー：C.L　田村　博之　3M　　食料　橋本　英一　2C
　　S.L　越沼　　敦　3K　　会計　伊藤　信吉　2M
　　装備　清水　浩彰　3A　　気象　高橋　好幸　2A
　　医療　飯塚　宣男　3J

7月17日

両毛線最終で桐生を出発した。見送りはどうだったのか。今は定かではない。

7月18日

桐生 羽前沼沢(8:30)——(11:55) 635mの手前(12:28)——(18:20)天神堂山 $\triangle_1$

小雨のパラつく中を羽前沼沢駅に降りる。朝食を取り、水を入れカッパを早くも着用して駅を出る。車道から登山口に入る所で道がよくわからず時間を喰う。登り始めると、殆んど道がついている。P 635mは地図とは異なり右側を巻く道がついている。その後は非常に快適に進んだ。P 894を越えるのに、地図では尾根上に道が有るが実際は無くて、右側に巻く様な道がある。試しに行ってみるが登りの気配が無いので尾根上を進むことにする。ここからヤブこぎとなるが、低木とつる、笹のヤブで全然進めず、894を越えた鞍部迄に1時間30分もかかり、さらにここからは親指くらいのササヤブが斜面に下向きに倒れる様に生えている。35m登るのに30分もかかり、ここで天気図を取った。初日からのヤブにめげながらも天場になる場所も無く天神堂山まで登る。日も暮れるし、多少斜めでも木々を払って天場とする。地図と現場が合っていない。とにかく食べて寝る。消燈21時。

7月19日

$\triangle_1$ (9:00)——(10:45) P 938を越えた鞍部(10:57)——(11:50) P 923を越えた鞍部 $\triangle_2$

6:20起床。天気は不順で風が強くガスっている。昨日の疲れか、テント徹収後ゴミを燃やしてのんびりしながら9時出発。天神堂山の三角点を踏み下りにかかる。始めのうちは上手に下れたが、尾根の右側(進行方向)に入るとヤブがきつくなり、左側が薄いと言うので左を進む。P 938の下りでガスったためにルートファインデングが難しくなり時間を取られた。鞍部で小休後すぐに踏み跡を見つけ、ここから一気に浜風峰目指して登りP 923を越えて天場とする。昨日、今日とで濡れた装備を思いきり広げて乾かしながらくつろいだ。その間に田村、清水が水取りに行く。水は天場からすぐ左に下り3分、上り5分の所である。この日は昼近くから陽射しを浴びて身体を休め明日に備えた。夜は昨晩に引き続き街の明りが見られた。

7月20日

$\triangle_2$ (4:30)——(6:45) P 943、5 (7:04)——(9:36)県境手前のP 1085付近(10:27)——(12:45) 湿地手前の鞍部 $\triangle_3$

2時に起床。4時前には徹収し明るくなるのを待って4時30分に出発する。踏み跡がついており割合に早く行けるのでは…と思われたがすぐにヤブこぎになってしまった。小ピークを越えて右に曲がりもう1つ越えて1P目終る。2P目からは再び踏み跡をトレースするが、その後は踏み跡が出たり消えたりの連続となりペースが一定しない。この辺りは一般に右側のヤブが濃いようである。また時折ナタ目が入っているのだが、どうも古いようだ。3、4P目も踏み跡、ナタ目が現われたり消えたりするが、これらはかなり古いものと思われる。県境手前のP 1085付近の登りからは踏み跡も消えてまったくのヤブこぎとなる。12時に6P目に入るが、すぐに雨がパラつき始めた。カッパを着る者、また小雨を

我慢して歩く者と、とにかく進むがかなりペースは悪い。地図上の湿地の直前でテントを張るには充分な広さの絶好の天場が有り、この先どこに張れるかわからないので、ここを天場と決める。全員カッパを着て雨の中テントを張った。テントを張り終えると田村、伊藤の２人が水取りに出かけた。往復１時間をかけての水取りで、稜線をもう少し進み左側に降りた所から取ってきた。この先も相変わらずのヤブでテントはこの先では張れそうにないと言う。今日も13時前に行動中止となり予定がズレてしまっている。天気図を見ながら、この雨が抜ければ梅雨空けになるだろうと思った。次第に濡れがひどくなるテントの中での生活は気持ちが晴れない。街の明りもまったく見えなくなった。

７月21日

β_3（8:35）――（11:27）三体山（11:50）――（14:45）三体山を下った1225ｍ付近の傾斜地β_4

３時15分起床。バシャバシャという感じのかなりの降雨のために様子を見てもう一眠りする。6時05分再び起床し、朝食を食べて７時30分徹収を始め８時35分に出発した。この時点で全員がカッパを着用し雨中の行動となる。１Ｐ目を少し行くと地図でいう湿地らしきものが確認できたが、これは２重稜線の間に水が溜っているという感じのものであった。Ｐ1183を越えて30ｍくらい登った所で一息をつく。全然ペースが上がらない。２Ｐ目で三体山のピークの三角点を踏む。これで本山行中のこれ迄の三角点は全てを踏んだことになる。三体山からの下りは地図とコンパスを終始確認しながらのヤブこぎである。この日は一日中ガスにまかれたこととヤブが背丈以上のものであるため殆んど視界がきかず、僅かに10数ｍくらい先迄しかわからない。少し下ってはもう一度登り直し確認を取り、というリングワンデリングの様なものを数回繰り返し、最後はC.Lの「これで合っている。」の一言で進んだ。約45ｍ下るのに１時間20分を要した。４Ｐ目はさらに視界が悪くなり何も見えないという状態でコンパスだけに頼りながらの下りとなったが、たったの10ｍ足らずしか下らずにこれに１時間余りを費やした。時間も15時に近く、これ以上進む自信、確信も無いようなので比較的平坦地にテントを張った。多少は傾いてはいるがこれ以上の場所は探せそうにないだろう。風が強くテントがバタバタとしている。天気図では、ほぼ真上に梅雨前線が横たわっているらしい。天候が不順な上に、引くに引けない所まで進んできており予備日も使ってしまっている。今日は水取りさえも行かなかった。全員がかなり疲れてきたという感じ。

７月22日

沈澱β_5

３時起床。朝食を作る。昨日より風が幾分弱くなったようだが天気は不明。今日は沈澱と決定され、朝食を食べて再び睡眠。９時の気象通報で天気図を取った。梅雨前線がとても近い位置にある。11時に食料計画の検討とこれからのコースについて話し合う。食料は

残り4日分を5日分に割り振り直した。コースは未だに不明。12時45分、田村、飯塚、越沼の3人で水取りに出かけた。この時には風はあったが雨はほぼ止んでおり視界がきいた。天場から稜線を右に外して20m程下ると平坦地に池塘があり、そこから右側の沢筋に降りて水取りをした(下り12～13分、上り15分)。

池塘のところで3人でゆっくりする。左手には柴倉山へと続く稜線が連なるが、かなり濃いヤブの様子である。ここから東北東に降りて行く尾根が、少し取り付きが難しそうなもののなんとか使えそうだと思われる。天場の位置は、昨日ガスの中で確認した位置で合っていたようだ。なかなか梅雨空けしないし、みんなの動きが鈍くなってきている。ここから下山することに決定した。

7月23日

⛺5 (5:45)——(9:40) P 992 (10:25 ?)——(10:33) 790m付近の平坦地(10:45)——(14:45) 合地沢沿いの林道 (14:55)　(15:45) 合地沢東側の550m付近の林道⛺6

3時に起床。カッパをつけて徹収し、時折雨の降る中を5時45分に出発した。例の池塘に下りるのに10分、そこから昨日下見をした尾根に乗ったが高い木々のヤブ、またガスのために視界がきかずに時間を取られる。1050m付近で尾根が東に曲がるのだが、その手前の1100m付近から東に向きを変えてしまい別の派生した尾根に乗り、これをトラバースで抜けたために1時間のロスをした。その後本来のコースに戻りP 992で昼食をとる。ここ迄、220mを降りるのに4時間もかかった。P 992からはコンパスを頼りに東北東に下るが、この辺りからは踏み跡が入っていた。790m付近の平坦地で一息をつく。ここから合地沢に下ろうと北に向きを変えて降り出す。ヤブは比較的薄くとても歩き易くなった。高度差90m程を1時間かかって降りると、その下は40mザイル一本では全然足りない様な絶壁が現われ、慌てて登り直すことになる。かなりの急傾斜をヒヤヒヤで登り、元の790m付近に12時28分に辿り着いた。ここから地図を見て、東に伸びる最も判り易い尾根上を降りることにする。この辺からかなりはっきりとした踏み跡が入るようになりかなりのペースで尾根を下る。植林用の道がついには現われて、あと一息で合地沢というところ(600m付近)で一服し合地沢西側の林道に14時45分に到着、人心地をつける。

合地沢を渡り、車の通る林道を1時間程歩いて標高600m付近の、林道のわきの平地を天場とする。全員が装備を干したり、身体を洗ったりして久々にゆっくりとした。夜には飯塚、清水、越沼の3人が差し入れの花火をして童心に帰っていた。水は林道沿の水を使った。

7月24日

⛺6 (5:27)——(6:07) 木地山ダム (6:17)——(8:15) 野川 (8:31)——(10:38) 稜線に出た所 (11:27)——(11:45) P 1097を越えてすぐの鞍部⛺7

3時に起床、5時27分出発。雨も上がり久々に合羽をつけずに歩く。1～3・P目までは、

車も入るような林道を快調に歩く。やはり歩き易い。１Ｐ目は木地山ダムまで、２Ｐ目は祝瓶山荘への分岐点（520ｍ付近）。３Ｐ目は祝瓶山荘を越えて野川を渡った所である。時折の陽射しが梅雨空けを思わせた。

野川を渡り４Ｐ目からは一般登山道となる。桑住平はうっそうとした感じのずって日陰の続く、全ったく登りがきつくない様な所である。途中、橋本氏が沢の渡渉に失敗し一人濡れていた。660ｍ付近で一息入れる。また久し振りの我々以外の人間の顔を見た。ここから400ｍの登りを一気に１Ｐ、１時間で消化し稜線に辿り着く。高橋氏がかなり疲れた様子だった。ここで昼食を取る。休みを取って30分もするとガスが上ってきて小雨がパラつき始めた。大丈夫と思いながらも肌寒くなってきて歩き始める。すぐさま雨はきつくなり、歩き始めて僅か15分で天場を決める。全員合羽を着用しかなりの雨の中でテントを張る。先ずフライを出し、その下で全員でテントを広げ濡れないように注意するのだが土砂降りの中ですぐにグショグショになった。天場は登山道の左側に３分程下った所で、水はさらにそこから下り７分、上り12分の所で取った。今日こそは合羽を着まい、と思っていたが無理だった。激しい豪雨。

7月25日

B_7（5:09）――（6:28）大玉山を越えてすぐの鞍部（6:38）――（8:37）平岩山200ｍ手前（8:52）――（10:24）大朝日小屋（11:00）――（12:10）西朝日岳（12:31）――（13:20）竜門小屋B_8

２時30分起床。予備食に手をつけ、弁当も作らねばならないので時間がかかる。さらに２年生の動きが目立って鈍くなってきている。５時９分出発。昨夜の雨か霧なのか、草木が濡れているので下だけ合羽をつけた。２Ｐかけて大玉山を越える。高度が余りないせいか、道に草木がかかっていて少し歩きずらい（ヤブよりずっと良いが）。高度1400m付近からは低木となり歩き易くなるが道は昨日の雨でグチャグチャである。角在子小屋への分岐手前からはハイマツが道にはりついていて、とても歩き易い。平岩山は３年生がピークを、２年生は下をまいて通過した。そこから1時間30分余りをかけて大朝日へ登る。途中、ジェット機がすぐ頭上をかなりの排気音と伴に飛んでいった。この登りは久々の青空の下、冷たい風の中を元気に影踏もしたりしながらで気持ちが良かった。大朝日小屋で昼食を食べる。

次の１Ｐで西朝日岳ピーク、もう１Ｐで竜門山へ到着する。今日の天場を竜門小屋か、狐穴小屋まで行くかで迷ったが竜門止まりとする。水取りは竜門小屋の前に橋本君が一人で行ってくれた。気象通報で、天気が崩れるというので、夕食後、テントの周りに溝を堀って雨に備えた。

今日は一日中天気が良かった。大朝日からはずっと月山を見ながら歩いたが実に遠くに見えた。夕食前にC.Lの田村が明日下山することを告げた、竜門から下山する。

7月26日

$\mathcal{B}_8$ (7:45)——(8:41) 清太岩山通過——(10:43)日暮沢小屋 (10:50)——(12:30) 見附 (13:　)——(14:45) 大井沢原から大井沢川沿いに800 m遡行した所$\mathcal{B}_9$

3時起床、小雨にものすごい風が吹いている。テントの入口側は既に浸水が始まっていたが他はまだ乾いていた。朝食後テントの中で時間を費す。暴風のために張網、フライ等が飛んでバタバタするが、初めの2、3回は外に出て直したもののその後はそれも投げ出した。

7時45分、合羽をつけて出発。先づ竜門へ登りそこから山形県側へ下る。道に迷うことは殆んど無いと思うが、雨風のために条件が悪く歩きずらい。にも拘らず3P、3時間で日暮沢小屋に到着。高度を下げるにつれて天気は多少とも穏やかにはなるがそれでも降ったり止んだりである。

日暮沢小屋からは3Pをかけて林道を、どうでもいいや、といった感じで歩き1時間30分で見附到着。ここで昼食を取り大休止、医短からの差し入れの本数の足りない飴をジャンケンで争って手に入れる。負けた奴は泣いていました。見附からはアスファルトの道を1時間で歩いて大井沢原に到着。食料が無いので橋本君は買い出し、他は荷物を持って原から西へ伸びを林道を歩く。約800 m位歩いた大井沢川沿いの平地に天場を決定した。ザックを置いてテントを立てて乾かし、また荷物も広げて干した。大井沢川に入ってくるのも居た。夕方、雷雨になるのでは、と思われたが小雨ですんだ。

無事下山を祝いビールで乾杯、伊藤氏が一人酔っ払ってしまった。

7月27日

$\mathcal{B}_9$ (5:10)——(6:20) 出合吹沢の渡渉地点 (6:40)——(8:31) P 1349 の稜線上 (9:18)——(10:40) 砂防堤 (11:10)——(12:05) 天場

3時4分起床、昨日買い出ししておいたインスタントラーメンをすすって5時10分に出発。大井沢川沿いに林道を1時間10分歩いて一息入れる。ここから登山道となるが、ザックは空であるから負担が少なくペースも速いものとなる。1050m付近で小休止する。もう1PでP 1349の荷上げ地に到着した。荷上げ品の中のビールを飲み干し何んでもかんでも食べたいものを食べてゆっくりとここで休んだ。天狗角力取山から続く稜線上は道が整備されているが、このP 1349から北へ伸びる稜線上はヤブとなってしまう。それでもP 1320くらいまでは踏み跡程度に入っているのが視認できた。

ザックに荷上げ品を詰め込み下山を始める。1P、1時間余りで一気に林道の始まる砂防堤まで降りてしまった。ここで再びゆっくり休んだ(砂防堤の上に寝ころんで空を見ていた)。さらに1Pでテントに到着。ここで荷物をまとめていよいよ引き上げた。

この後の記録は残っていないので詳細は不明であるが、大体次の順序で帰った。

バスで寒河江に出て、そこで風呂に入ってアカを落した。あとは汽車に乗り山形、仙台に出て、夜行の東北線で早朝小山着。そして桐生に帰った。

昭和５８年度夏合宿南アルプス北部沢パーティー練習山行

奥多摩・日原川小雲取谷

日　　時：昭和58年5月22日

林道下降点――小雲取谷――小雲取山――雲取山――（富田新道）――唐松谷出合

桐生を前日出発し、秩父市の坂本宅にて、食事に加えお風呂まで世話してもらい、大感激。お礼の言葉もままならぬ早朝、秩父を出発。

今シーズン発の沢に喜びながら遡行はじめる。水量の多かった大雲取谷を約１時間で分け、小雲取谷へと入ってゆく。この沢は、特に悪場はないために安心して楽しめよう。高い木々の中を流れている沢の岩などは、コケむしており静かな感じいっぱいでよい。最後のツメはコンパスで方向を定めてゆくと富田新道へととび出す。雲取山を踏んでから下山となるが、唐松谷出合へ降りた時点でまだ時間が早く、もう一本登っていこうかという話しも出るが、中止。はやめに桐生へもどることにする。

赤城山・粕川丁須のガラン

日　　時：1983.6.19

赤城温泉＝＝＝不動の滝――丁須のガラン――赤城温泉

コンパあけのダルさの残る体で沢へ向う。車を不動の滝降り口へ止め出発。不動の滝をしばし眺めてから右岸を高巻く。この先ゴーロが長いが、一時間ほどで次の大きな滝となる。難なく越えてゆくが、次にせまる城塞の様な岩壁の真中の滝を越えることに苦しみ、何度かアタックを試みるが、危険ということで少し引き返したところからの大高巻となる。途中から踏跡をみつけ、たどると、丁須のガランという立カン板があった。

赤谷川・笹穴沢

日　　時：1983年6月29日

メンバー：合宿メンバーに加え、清水、斉藤（医学部）、鈴木、池原、新堀（医短）

川古温泉――笹穴沢出合――120ｍ大ナメ滝上部――平標山ノ家付近――元橋

医学部の清水氏と、工学部の沢トレと合流してどこかへ行こうということになり、笹穴

沢に決定。未明に川古温泉に集合し、ゲートから徒歩となる。

本流の徒歩は、水流が強いがワイヤーロープがはってあるので、それをたどる。女子を3人含みながらも、なかなかのペースで歩くが、ちょっとしたナメを持つ釜へ、1さんがツルリ。あわれ着替えとなってしまった。6月末の上越の沢は、まだ雪渓が大きく残り、だんだん雪渓の高巻きがはじまってきた。2段100m滝は、不安定な雪渓のため大高巻きとなり、約1時間斜面にはいつくばる羽目にあう。体力的に女子は苦しい場合があり、ヒヤリとするが、上級生がピッタリ付いていたため無事通過。次につづく120m大ナメ滝も同様苦労する。このため、左へツメ上ることとし、笹の中を泳ぐ。さまようように笹の中を歩いて、やっと平標の登山道へと出る。運転手のみ車をとりに先に下山開始。元橋から赤谷まで、遠々ご苦労様でした。今回の沢は、メンバーの数もさることながら、天気もいまひとつであり、時期が早すぎたと言えよう。

谷川・ヒツゴー沢

日　　時：1983年7月9日～10日

7月9日

谷川温泉――二俣

今回は、幕営トレーニングもかねて、一日目は二俣まで入る。ツェルト利用。

7月10日

二俣――ヒツゴー沢――中ゴー尾根――二俣――谷川温泉

朝から天気はさえないが出発。間もなく小雨が降りだしてしまい、とまどうが、ほどなく止み、先行する。今回は雪渓もなく快適に行く。滝はほとんどが直登に近く、楽しい。上部でゴーロになってからは、早目に左に入り、中ゴー尾根へつき上げる。下山はすごいスピードで、足が棒になってしまうほどであった。

奥秩父・丹波川小常木谷

日　　時：1983年7月14日

小常木谷出合――小常木谷――岩岳尾根――火打石谷出合――小常木谷出合

道路からすぐ沢に入れるためとても楽である。まずは、本流の渡渉に苦しむ。遡行は、兆子の滝からネジレの滝間がポイントで、楽しい所でもある。ザイルを使用した滝もある。

ツメは、沢を忠実に行くとほどなく尾根へとび出す。下山は、植林された山肌を歩いて、小常木谷下部の火打石谷の出合付近に出る。ここからは、出合までゴーロを混じえた道を下る。この沢は美しさという点からは魅力に欠けるが、登攀的な要素もあり、なかなか楽しかった。

荷上げ山行及び戸台川本谷（中止）

時　　期：1983年7月17日～18日

夜叉神峠――白井沢出合、荒下部――夜叉神峠═══戸台――丹渓山荘――戸台

夏合宿のための山行で、下見も兼ねていた。荒側は、踏跡もうすく、登山道とは言えない様相。これらが済んでから、再び車での移動をし、戸台から歩く。午後になってからの歩行のため、あせり気味。しかも、戸台川は水量が多く、泥水のために恐怖感あり。一度S君が流され、ヒヤリとする。

戸台川本谷の遡行は、夜半からの雨のため見送りとし、昼近くになって雨が止んでから帰ることにした。林道は、中途からバスに乗れ、とても助かる。

夏合宿本山行

日　　程：7月21日～25日
メンバー：坂本、豊島、志村、小池

7月21日
深夜桐生発═══茅野═══戸台═══北沢峠――前白根沢出会　　天気◎

何やかにやともめながら出発。前白根出会まで行き、下降点をさがす。眼下に見える野呂川は連日の雨のため増水。その音もすごく、我々をビクビクさせる。本日は渡渉不可能であろうということから、下降をあきらめ、手ごろな天幕を探す。丁度いいところに、工事用の小屋があり、運よくカギがあいていたためここへ泊めてもらう。

7月22日
前白根沢出会（沈殿）●

昨晩から小雨が降りはじめ沈殿となる。小屋のため快適であるが、ツェルトで過ごしていることを考えると何とありがたいことか。軽量・コンパクト化するためシュラフカバーのみとしたが、かなり寒い。じっと耐える。

7月23日

前白根沢出会――広河原　●→○

また今日も沈殿かと思われたが、何とか雨が上がり、行動を開始するが、沢を登ることは不可能と見られ移動とした。林道は過去の台風でかなり荒れている。やっと出た太陽を喜びながら広河原へ。ここも台風のツメ跡が生々しくロッジは休業である。ロッジの下にツェルトを張る。

7月24日

広河原（沈殿）　●

早朝から準備し、いざ白井沢へ向うが、再び雨が降り出してしまい、広河原へと引き返す。沈殿と移動のみで体がだるく何か面白いものを見つけようとするが、なかなか。昼頃だったか、橋の工事現場から発破をやるので影に隠れてくれとのこと。大きなパワーショベルの下にもぐり込む。しかし、音も小さく思った程のことはなかった。つまらない。

7月25日

広河原――白井沢 出合 7:00 薬師岳 12:00 御座石鉱泉 ═══ 3:00 ═══ 桐生

今日も登れなかったら帰ろうということにまでなっていたので、晴天を期待する心は大きかった。溯行は、スーパー林道の白井沢橋を下りたところからはじまる。

滝は小さいものが多く楽に越えていける。真白な花崗岩の崩壊地はなかなかすごい。まるで稜線まで続いている様に見える。快適に沢をつめていくと、やがてハイマツの中へ入ってゆくが、うっすらと、踏跡がある。上部はザレの斜面を登るところもあり、注意が必要。ポッと稜線へ上がれる。風が吹いて寒いため早めに下山をはじめる。途中地元の中学生の登山パーティがあり、その大所帯ぶりにびっくり、6クラスあった。御座石鉱泉からはマイクロで駅へ向う。

昭和59年度新人強化合宿（庚申山～皇海山）

日　　時：昭和59年4月28日～30日

メンバー：C.L・伊藤（信）　S.L・橋本、田村、長谷川、岩瀬

4月28日

桐生（15:50）═══ 原向（17:20）――（19:45）銀山平 $\mathcal{B}_1$

4月29日

銀山平(5:40)——(6:40)庚申山登山口(7:00)——(10:05)庚申山(10:40)——(14:20)鋸山(14:50)——(17:00)皇海山(17:20)——(19:15)1636手前$\mathfrak{B}_2$

庚申山の登りからもう雪が出てくる。やはり今年は例年になく雪が多いようだ。全員スパッツをつけズボズボと雪道を行く。庚申山頂の展望はすばらしく鋸山、皇海山の雄姿が真近に見える。全員でトップを交代しながら鋸山をめざす。鋸山手前にガレた急斜面があり注意を要する。また、1人1人登降するためけっこう時間がかかる。鋸山山頂では先に来ていると思われた志村パーティの足跡がないため勝ったと喜ぶ。鋸山の下りは雪が多いので楽に下れる。皇海山の登りは逆に雪が多いのできつく、全員で火を吹く。皇海山頂でテントをはろうかとも思ったが時間が早いので国境平に向かう。皇海の下りは残雪がものすごく何人かはズボリと胸までもぐり、もがき苦しむ。C.Lの適確なルートファインディングにより迷わず下ることができたが、やはりこの下りは難しい。真北から大きく北東におれる所は尾根とは言い難く、はっきりした目標がないので下りすぎに注意。すでに周囲は暗く懐電をつけて歩くようになったので国境平まで行くのは断念した。テントは獣の通り道のような所にはる。

4月30日

1636手前(7:30)——(7:45)国境平——(8:30)松木沢出合——松木沢——(16:40)足尾——桐生

朝起きるとテントの回りは熊や鹿の足跡がなまなましい。だいぶ興味をそそったらしい。松木沢への下りは指導標がしっかりしているので間違えることはない。今年の松木沢は水量が多く徒歩するにも足場になる岩が出ていない。ルートを見つけたり靴をぬいだりはいたりで無駄な時間を費す。上流の方では餓死した鹿の死体を何頭も見かけた。豪雪のために飢え、骨と皮だけになったその姿は哀れであった。砂防ダムの高巻きは年々足場が悪くなっているので注意。後はダラダラとした林道が続くのである。

昭和59年度新人強化合宿(袈裟丸山～皇海山)

時　　期：1984年4月28日～4月30日

メンバー：C.L　志村　亨　S.L・小池寛喜、松井一吉、藤井修一

4月28日

桐生駅6:35出発。足尾線で行くはずであったが、乗り遅れてしまい、何と見送りに来ていた長崎さんの車に乗せてもらって、林道の奥まで入ってもらう、感謝。林道分岐点8:00出発。かなりの急勾配な林道を歩き、ひらけた所で登山道の標識有り。ここまで20分。

小休を30分とり、双輪搭着9:35。寝釈迦があるので登ってみる。大きな岩の穴起だ。9:50発。沢づたいの道で右に左に渡りながらである。方向が大きく左に変わるころ沢で水をとる。道に雪が残っている所も多く歩きにくい。11:05賽の河原。やっと稜線上に出て進み昼食12:00。天場を目差し1:00出発。空には薄い雲が少しばかり出てきている。くさった雪は歩きにくく、皆疲れ気味。ピッチも不等でペースをつかみにくい。雪の多い所は何とひざ上20cm!! ミニスカートだっ！てか。袈裟丸山が目前に見える天場1:55着。雪が何と言っても多く、雪上幕営となる。

4月29日

起床3:00松井。余ゆうで食事。竹ペグをもってなかったので木の枝を用いたが、雪を堀る。5:10発。袈裟丸山頂5:50。雪はクラスト気味で歩きやすいが、樹林の中ではどうしてももぐってしまう。松井は特に苦しそう。天気晴れ。6:45次のピーク。雪が多くしかも所々腰までのラッセルとなってしまい、まったく進まない。雪の消えた道も見えるが、ほとんどが獣道である。9:10、1957m手前の小ピーク。雪多く道もほとんど出ていない。ヤブも案外濃く、進むスピードはにぶりがち。10:35昼めしとする。雪は増々多い。しかもベトつくので足がとてもつめたい。先の行程を考えると皆憂うつになってしまうが、何としても六林班峠までは行かないことには話にならない。陽はさしているが、そよ風でも寒く感じるのは足がぬれているせい？　1:20六林班峠。小休のたびにこの先どうしようと話していたが、ここに来て下ることを決める。先に進んだ場合と、天候から下るなら早いほうがよいであろうという意見に、S.Lは『どーせ何も問題ねーよ、下るべえ』と軽い口をきく。法師尾根を下る方法と、庚申川を下る方法との選択となるが、途中見た法師尾根上の雪からそちらはやめ、時間があまりかからないであろう庚申川ぞいの登山道へ下ることと決定。沢づたいになる1400m付近からは雪はもうないであろうと考えたが、何と甘かったことか。1:40稜線から下りはじめる。何と雪の多いことか。足をふみ出してすぐ不安であった。1500m付近の尾根に乗ったときかなり雪も減ってきたことがわかり、これなら先をかせげると思いきや……沢にかかるスノーブリッジ。一度渡渉点を間違え小尾根を乗っ越し渡渉。目前の小尾根をまた乗越すために登る。地図上の道にもどったのだがあるのは鹿の踏跡ばかりで、人の通った気配はほとんどなし。今日はもう疲れたし、この先をあせっても仕方ないということで、小尾根上に幕営4:00。沢の音がうるさい。テントを立ててから、C.LとS.Lで先を下見。再渡渉点まで行ってみるが、でっかい（上越にくらべたら小さいが）スノーブリッジがあり、こりゃだめだと早合点。下山のための手段を考えるが法師尾根がいちばん安全かつ早いであろうということになり、水量も多く雪の残る沢は敬遠する。夜はカレー、辛かった。皆疲れて、酒も飲まずに寝る。

4月30日

起床3:00藤井。本日も余ゆうの5:00出発。メンバーがそろっているとこうも早いのか

と感心。昨日の決定どおり法師尾根のつき上げをはじめる。今回2頭目の鹿を見る。ほとんど鹿の道をうんこ踏み踏み歩く。かなりの急登であったが予定時間の半分で登り切る。6:00稜線。1953mを越えた小ピーク6:55。雪は案の定残っているが早朝のため固まっており快調。びんびん進んでしまう。ササが濃い所もあるがイヤなヤブではない。空は雲がいっぱいで寒い。先の小休からすぐ道をあやまってしまいS.Lの余計な口出しからヤブこぎとなってしまいいらぬ時間を費す。読図が甘い。1425m 8:10。1120mの先9:10。枯れ葉の道がでてきてガシガシとばす。道が確認できるとついうれしくてとばしてしまう。やっぱり工学部の合宿だなあと痛感。10:20人家にでる。途中植林地の複雑な道に出くわすが、あくまでも適当に下る。まき割りをしているおじさんを見ながらパンをかじり昼めし。駅は近かったが、列車がなく、2時間酒を飲んで過ごす。余った食料はやはりジャンケン合戦。うっ頭が痛い。

何とか無事終ってくれた。松井・藤井両名は、かなり勉強になった山行だと言っている。この合宿、皆が火をふいた原因というのもメンバーの力を過大評価した結果かもしれない。しかし、この程度でへこたれるメンバーではなかったことは確かである。

昭和59年度夏合宿（青森～秋田県境，十和田湖，八甲田連峰）荷上げ山行

日　　時：昭和59年7月12日～13日
メンバー：小池　橋本　藤井

7月12日
桐生(5:45)――東北自動車道――(3:30)坂梨峠――(5:00)陣場――(6:15)久吉温泉

早朝の桐生を出発し佐野から東北自動車道を使う。秋田は遠い。高速だけで550km　6時間を費す。車に乗っているのに飽きた頃、坂梨峠に着く。荷上げは峠より西側に少し登った所にする。荷上げ品はビニールでくるんだ物をダンボールに入れ、それをビニールで二重にくるんだ。下見としてしばらく登るが峠の南側はしっかりと道がついていた。東側は登り口を確認する程度にとどめる。陣場駅に回り林道を車ではいってみる。道は地図どおりについていた。久吉温泉で一泊する。ここは無人の温泉で入浴はもちろん無料。関西から来た「男のロマン」を語る人物と知り合う。

7月13日
(7:00)久吉温泉――(9:00)八甲田山登山口――滝ノ沢峠――(1:15)坂梨峠――(11:00)桐生

八甲田山登山口を少しはいった登山道わきに荷上げ品を置く。また、昨日ダンボール1つ荷上げするのを忘れていた事に気がつく。十和田湖を大きく回り滝ノ沢峠へと出る。こ

こには売店がありビールも置いてある。売店のおじさんの話では白地山からの道はしっかりしているとのこと。坂梨峠にもどり忘れていた荷上げ品を荷上げする。その後桐生へと一直線。「荷上げ山行」と言うよりは「荷上げドライブ」と言える程、眠ている以外はほとんど車の中であった。往復1400㎞

本　山　行

日　　時：昭和59年7月18日～27日

メンバー：C.L小池、S.L橋本、山中、飯塚、高橋、伊藤（信）、志村、伊藤（大）、田村、松井、藤井、岩瀬、長谷川

7月18日

桐生（22:21）━━陣場

工学部、教育学部、医学部の盛大な見送りを受け夜の桐生を出発する。

7月19日

（11:20）陣場（12:15）――（13:25）林道終点

陣場駅で出発準備をしながら昼食とする。地元のおじさんがやって来て計画変更を力説ししたが、我々は予定通りに出発。約1時間で林道終点着。水場が確保されているのでここをテン場とする。水は林道にそってチョロチョロ流れているのを使う。

7月20日

（4:30）――（6:35）国境稜線出合（6:55）――（8:45）P 573手前（9:45）――（10:30）炭塚森手前ピーク（11:00）――（11:45）坂梨峠

朝食、徹収が迅速であったのでゴミを燃やしながら明るくなるのを待つ。テン場から国境稜線出合までは地図上では道があるはずだったが急登後の送電線下から国境稜線につながる登山道まで灌木、ササのヤブをこぐ。国境稜線出合からはヤブこぎとなるはずであったがしっかりと道がついていた。この道はほとんど使用されていないらしく、いたる所にクモの巣がはっていた。ヤブこぎを回避したメンバーの意気は上がったが、この頃から太陽がギラギラと照りつけ、P 573手前で全員ブタとなり1時間の大休止をとる。炭塚森手前で昼食。快調に坂梨峠に向かって進むが途中でマムシを発見する。登山道の真中でトグロ巻き、鎌首をもち上げ、シッポをワナワナと震わせ我々の行く手を阻んでいた。坂梨峠11:45着。予定していたヤブこぎもなく、1日中しっかりした道であった。道路わきにテントをはり荷上げ品を回収する。峠より2㎞ほど秋田県側に下った所に自動販売機があり

買い出し部隊を出す。水場は販売機に行く途中に沢が数本、販売機には水道あり。

7月21日

(4:20)——(7:05) P 617 (7:25)——(9:30) P 757 手前 (10:30)——(12:00) 馬糞森山 (12:45)——(13:40) 馬糞森山を越えたアン部

道路北のヤブの急登に取りつく。この急登で松井が足のマメを悪化させる。急登後測量用の道路が少しはいっていたがすぐになくなる。P 617 手前までササにウルシの多量に混じったヤブとなる。以後、高木の下のササヤブとなり快調に進む。P 634 手前から久吉温泉から続いているらしい道となった。P 757 手前で昼食。この調子なら天場まで軽い軽いと話もはずむ。また動物の毛らしいものを多数発見。どうもクマの毛らしいと結論を下し、笛を吹きながら行く。P 757 を越えたあたりで道が下りすぎ、東によりすぎていることに気がつく。しかし、これが馬糞森山を巻いている道であることを知る者はいなかった。少し登り返し馬糞森山に取り付く。このヤブが今回の合宿最大のヤブであった。身長以上のシノダケで一本一本が太く、植物のツルがからまり、しかも雪のためであろうか、すべてが斜面に平行に生えている。全力をふりしぼり悪戦苦闘し、ヤブに怒りをぶつけながら進む。ようやく頂上についた時には全員疲れはてていた。小池はメガネを壊す。大休止の後テン場を捜しながらヤブをこぎ、ヤブの薄くなったアン部手前をテン場とする。水場は青森県側に下り 15 分、登り 30 分。テント設営後雷雨となる。

7月22日

(6:00)——(7:00) P 718 直後のピーク (7:20)——(8:45) P 785 手前 (9:35)——(10:45) P 785 (11:50)——(13:00) P 661 手前

出発直後からシノダケのヤブこぎとなる。また地形がわかりにくく、アン部から真東に折れ、南南東に伸びるP 718 の尾根を見つけるのに戸迷う。しかしP 718 の登りからひょっこりと道が出現する。後にこの道は馬糞森山の巻道であることが判明する。この登山道はP 696 の山腹を通りP 785 へと続いていた。途中P 785 手前で水取りをするが沢の音が近くに聞こえた割にはけっこう遠かった。下り 15 分登り 25 分。沢まではしっかり道がついていた。P 785 の登りから道は消えた。おそらく植林用の道であったらしく、道の消失と同時にヤブとなる。密生したササにトゲのある木が多量に混じりヤブをこぐ毎にチクチクと痛い。この登りは国境稜線上の尾根を直登するより、一旦東側に派生している尾根に乗った方が楽である。P 785 で昼食。P 785 の北側に伸びる尾根からP 661 に向かって大きく北東に折れる所で戸迷う。2年生全員で偵察に向かうが、結局最初にアン部についたのは信吉さんであった。水場は青森県側に下り 5 分。

7月23日

(5:40)——(6:25) P 748 (7:30)——(8:35) 柴森 (9:20)——(10:30) 786 手前 (11:30)

(11:30)——(13:30) 798 手前ピーク (13:50)——(15:45) 798 アン部

朝、水取りをし、柴森に向かって出発。P 748 までは薄いササヤブ。P 748 の休憩で大介が胸元をダニに食いつかれる。ダニを抜き取ろうとしたが頭が残ってしまった。柴森山頂付近で身長以上のシノダケとなり苦労する。山頂に立ってもヤブの中で視界が全くきかない。柴森山頂から786へ東南東に伸びる尾根に乗るのに視界もきかず進行速度も上がらずで1時間を費す。786付近からナタ目が途中2ケ所テン場跡があった。また、このあたりから県境にそって引かれているらしいビニールテープが引いてあった。P 810 手前から道が現れたが両側がササに覆れヤブをこぐ格好となり進行速度は上がらない。ジュースの空缶などのゴミがやたらと目につく。789 手前ピーク付近で道は青森県側の沢すじに下ってしまった。ここはだだっ広い尾根であるためルートファインディングに困難を極める。またシノダケの密生したヤブとなりなかなか渋い。今日中にヤブをぬける予定であったが、時間も遅くなったため789アン部をテン場とする。水場は青森県側下5分。

7月24日

(5:40)——(7:30)登山道出合 (7:55)——(8:55) 白地山分岐 (9:45)——(11:00) 元山峠 (11:45)——(12:55) 滝ノ沢峠 (14:30)——(17:00) 八甲田山登山口

朝、水取りをする。ヤブの状態は昨日と比較すると軽で、しかも傾斜もほとんどなく約2時間であっけなく登山道に出てしまう。もうこれでヤブとはお別れである。後は飛ぶように登山道を歩く。白地湿地帯は緑鮮やかでヤブで疲れた我々の目を十分に楽しませてくれた。吹く風も快く最高の気分。分岐より白地山へは往復1.2㎞のピストン。頂上は360°の展望、P 997 では十和田湖が見下ろせた。元山峠で昼食とし滝ノ沢峠へ。滝ノ沢峠では売店でビールを買い占め、最後にはウイスキーまで飲み始める。八甲田山登山口まで酔払いの集団が列をなす。道路をフラフラしながら大声でわめきちらす者多数。最後尾を歩いていた酔払い3人は国土地理院の車に拾われ最大級の非難を浴びる。荷上げ品を回収し荷分け。水は滝ノ沢峠でいれる。

7月25日

(5:30)——(10:25) P 1162(11:10)——(12:30) 駒ケ岳分岐 (13:55)——(16:30) 猿倉温泉

高橋さん股間の痛みを訴える。登山道はあまり人がはいっていないらしく荒れていた。ほとんどヤブをこぐような形で進む。野イチゴを食べ、時々出て来る湿原に目をやりながら進む。P 1162 で昼食とするがハエがものすごく多い。しかも弁当には目もくれず、我々の身体にばかりたかるのであった。身体の臭いが予想できよう。暑さと悪路のためにコースタイムを大幅に上まわって駒ケ岳分岐に着く。近くを流れる沢で身を清めのどを潤す。希望者多数で駒ケ岳ピストン。頂上には人もいなく静かで周囲に広がる平原の眺めがすばらしい。時間も遅いので今日のテン場を猿倉温泉に変更し、大休止の後出発する。猿倉温

泉への道は途中に雪渓あり。温泉まであと1時間の所で雷雨となり、今合宿、初めて雨のためにカッパを着た。猿倉温泉には立派な休息所があり、テントをはらずここにゴロ寝をすることにした。大介発熱する。トイレ・水道完備。

7月26日

(7:58)═══(8:20) 酸ケ湯──(8:30) 野営場 (8:45)──(10:00) 避難小屋 (10:50) (11:30) 大岳山頂 (12:00)──(2:00) 野営場

毎日の強行軍で全員疲労気味。体調のすぐれない人もいるので今日の予定を変更する。酸ケ湯までバスで行き、そこから大岳をピストン、高橋さんと大介はテントキーパーとする。猿倉温泉のバス停でバスを待っていると無数のハエが我々の回りに群がった。バスに乗り込むと、ハエもいっしょについて来て運転手を苦笑させた。酸ケ湯野営場につくとすぐに荷物をまとめ、大岳に向けて出発する。しっかりした登山道、しかも荷物も少ないので、ほとんどハイキング気分である。大岳山頂手前には大きな雪渓があり、その上を歩くとひんやりして気持ち良い。大岳山頂はガスっていて展望が全くきかない。せっかく青森港が見えると思ったのに非常に残念である。また、雨も降って来たのでカッパを着て出発する。大岳西面の湿原には長い長い木道が敷いてある。雨に濡れた湿原はしっとりとしていいものである。木道歩きがいやになった頃酸ケ湯に着く。ここで合宿の汚れをきれいに落とした。

7月27日═══青森駅

今日は快晴である。昨日が今日ほど天気がよかったらと悔やまれる。バスで青森駅へ。青森駅で荷物を送る。次回の再回を約束し、ある者は北海道へ、ある者はそのへんをブラブラとそれぞれ帰路へ旅立つのであった。　　（記録、橋本）

昭和59年度秋合宿（中央アルプス北部縦走）

時　　期：1984年10月2日～10月5日

メンバー：C.L・岩瀬亮一　S.L・田村健次、小池寛喜、橋本英一

10月2日　①

桐生駅 (5:31)▬▬▬上松駅 (13:50)-タクシー-2合目 (14:25)──3合目敬神の滝(15:00)

桐生駅を朝早く出発。メンバー4人と少々さみしいが元気よく出発した。タクシーで2合目まで行ける。それからは、ダラダラと川原沿いの道をのぼる。3合目の敬神の滝ではテン場は川原にある。大雨の時は要注意。15:00にテントを張ったが、雨が降り出し川原だけあり、グランドシートの下からジメジメ浸水してきたため、小屋にエスケープした。

小屋は二階建てで立派な建物である。トイレは総檜張り。さすがは中央アルプス!!

10月3日 ●

朝から大雨、沈殿とする。昼は寝ていたが、夜は暇になったので小屋の中を見回ってみた。ビックリしたことに一階、二階とも畳が敷いてあり、二階でさえ三つ部屋があった。

10月4日 ①

出発(5:50)——5合目(8:00)——8合目(10:40)——木曾駒(13:30)——テン場(13:45)

今日の行程はほとんど登りだけ。たいへんこの登りは疲れる。特に前半は周囲が見えずただひたすら登りのみ。稜線に上がる直前では多少岩っぽい。駒ケ岳を越えて頂上山荘で今日のテン場とする。さすが山頂は寒い。山荘につららが下がっていた。ここはもう閉っていた。(夏は売店が利用できそうである。)水はある。もしこのコースを計画したならかなり初日は気合を入れないとだめなようである。中央アルプスは意外と山が大きい!!

10月5日 ①

起床(4:00)——出発(6:00)——檜尾岳(10:00)——下山始まり(11:00)——バス停(14:35)

六時に出発。月の前の宝剣岳を目指し出発。C.L岩瀬君ちょっと靴ずれで足が痛そうである。宝剣岳は岩場がつづき、おもしろい。しかし、雨、雪の日は注意が必要である。山頂からの千畳敷カールがとてもきれいである。ロープウエイが動いていて、たくさんの人が見えた。ロープウエイを利用すれば楽に登れるが、やめたほうがよいだろう。檜尾へのびる稜線はとても気分がよい。しかし、檜尾の登りで、C.Lの靴ずれが悪化。それで、いやになったか、檜尾岳から下山することになった。初めての靴は気をつけよう。

中央アルプスに行って来た感想としては、中央アルプスは意外とあなどである。北ほどの派出さはないが、山が大きく、まるで南アルプスのようだ。中央は人もあまりいなくてとてもよい山だろう。秋の千畳敷カールなど最高である。一度は行ってみるべし。

(記録) 田村健次

昭和59年度秋合宿(飯豊連峰)

時　　期:1984年10月2～6日

メンバー:長谷川、松井、高橋、伊藤(信)

10月2日

AM 9:53 小国駅着 ═══AM 10:30　飯豊山荘 (12:10)――(13:05) P 700 (13:25)――(14:10) P.1020――P.1020 を越えた鞍部B_1

天気　快晴。

飯豊山荘は、なかなか立派な造りできれいであった。山荘から歩いて橋を渡ると右手に登山道がある。（標識あり）そこからは、延々急登が続く。コースタイムは1時間であるが、実際2ピッチ。1時間40分かかった。急登と晴天がもたらした結果であった。テン場は1021mのピークを60m下った鞍部。登山道横に2張りはれる程度のせまい所。水場はそこから25m下ったところにあるが秋ぐちには枯れていてしずく程度の水しかない。全体的に道はしっかりしているが、途中1、2カ所倒木あり。

10月3日

起床 3:00　　沈澱

天気　雨。

3:00に起床するが、昨晩からの雨でもう一度寝る。5:00に再び起床。かなり激しい雨で沈澱決定。1日中寝て過ごす。テント内は浸水。大いに困る。PEAK1の使い方も段々把握してきた。もう完全に使いこなせる。このPEAK1は、軽量で尚かつ火力も強いラジウスよりも便利である。いぜんテント内は浸水中、シュラフカバーを持ってくれば良かった。日本海の低気圧、早くどっかへ行ってしまえ！

10月4日

起床 3:40　　B_1 (6:00)――(6:50) 梶川峰手前 (7:05)――(7:15) 五郎清水 (7:25)――(8:15) 梶川峰 (8:30)――(9:20) 門内小屋 (10:00)――(11:00) 梅花皮小屋 (12:20)――(13:10) 烏帽子岳を越えたピーク (13:30)――(14:25) 天狗の庭 (14:40)――(15:20) 御西小屋B_2

天気　くもり。

梶川峰までは、延々とまた急登が続く。途中、五郎清水があったので、水を8ℓ補給する。長いプロローグを抜けやっと梶川峰に。行手には、奇麗に紅葉した稜線が続く。国境稜線まではもう少し。国境稜線に出てから、見事に紅葉した稜線を快適に進む。稜線上は、前線の影響か、風が強い。門内小屋は立派な造りで秋期は無人。鍵は開いていて泊るには快適。門内小屋を出発し、北股岳に向う。北股岳頂上にはなかなか着かず何度もニセピークにだまされる。北股から梅花皮小屋までは一気に5、6分下る。梅花皮小屋も門内小屋に勝るとも劣らないいい小屋である。この小屋で昼食をとる。梅花皮小屋からすぐ150mの登り。このピークを越えると烏帽子岳が見える。ここから御西小屋まで約4.9km。ずばっと紅葉した稜線が御西岳までそう快に見える。左手には飯豊山、右手に大日岳が雄々とそびえ立っている。と、思ったらガスってきた。烏帽子岳を超えてやや広い鞍部に出る。

天狗の庭である。ここから御西小屋まであと1ピッチ。最後の登りだ。烏帽子岳はガスっていて見えない。御西小屋もガスってて見えない。3:20に御西小屋に着く。とにかく疲れた。寒風も疲労を助長して全員グロッキー。御西小屋もしっかりとした造りで秋期は無人らしい。今日は小屋泊りである。

10月5日

起床3:10　δ_2 (9:15)——(10:35) 飯豊山頂上小屋 (11:50)——(14:35) 切合小屋 (13:50)——(14:45) 三国小屋 δ_3

天気　霧。

御西小屋では、夜中寒くて目が覚めるほどであった。朝になると窓枠には、うっすらと雪が積もっていた。風はどうやら止んだらしい。天気を見合わせて結局、出発は9時過ぎとなった。御西岳山頂は全然ピークという感じがしなかった。風は再び強くなり飯豊のピークでは、標柱は“氷柱”と化していた。飯豊山から頂上小屋までは、ほんのちょっとの距離。小屋は開いてないのかと思ったらちゃんと人が居て中に入れた。中でたき火が出来るらしくいろりがあった。ここで昼食をとる。この頃から時たま晴れ間が見え紅葉した景色もしばしば見える。頂上小屋を出発する寸前にガスってきて雪がちらついてきた。切合小屋に着くまでガスの中を迷いだいぶコースタイムより遅れる。なおも相変わらず強い風と雨。切合小屋から三国小屋の間には鎖場が1カ所あった。三国小屋まで来れば何とか下まで下れそう?!と、思ったが時間的に無理なのでここに泊ることにする。

10月6日　起床

起床2:30　δ_3 (5:00)——(5:50) 地蔵岳分岐 (6:10)——(6:25) 横峰 (6:45)——(7:30) 御沢小屋 (7:50)——(8:10) 飯豊鉱泉 (川入)═══山都駅 ▬▬ 桐生

天気　快晴

余裕をみて起床は2:30。昨日のじてんで水が3ℓしかなかったので、朝の紅葉をみんなでありがたく飲んだ。地面にうっすらと雪が積もっていたが空は晴れている様だ。合宿は今日で終わるが今は水もなく、ガソリンももう残り少ない。予備日を使い果しただけに食糧も米だけである。我々の心をいやすろうそくもあと3㎝……?!　三国小屋から岩稜を下ること35分。まだ薄暗く岩にはうっすらと雪が積もっていて慎重に下った。鞍部から15分くらい登ると分岐がある。ここから真西を振り返ると、山の上に三国小屋がちょこんとのっかっているように見える。分岐からは下り一筋である。途中で水を補給しあとはかっ飛んで、降りた。下りには0.5㎞ごとに上十五里、中、下と休憩所があり、下る目安となる。100ｍを1分のペースで降りてついに御沢小屋に着く。あとは林道を歩いて川入に向うのみ。川入は、小さな部落である。あいにく、風呂に入ることはできなかったが、無事秋合宿を終えることができた。　めでたし、めでたし！

昭和５９年度春スキー合宿

期　　間：３月21日～３月26日

メンバー：C.L・小池（２Ｋ）、S.L・松井（２Ｋ）、山中（３Ｍ）、豊島（３Ｅ）、飯塚（３Ｊ）、伊藤（信）（３Ｍ）、高橋（３Ａ）、伊藤（大）（２Ｓ）、橋本（３Ｃ）、志村（３Ｋ）、長谷川（２Ｗ）、藤井（２Ｍ）

今年の春スキー合宿は、パーティを分けるかどうかについてもめるが、結局のところ、ひとつのパーティで行き、下山時に、平へ行く者と別れる予定とした。

１日目

桐生駅═沼田駅══タクシー══大清水──三平峠──長蔵小屋 B

桐生駅を未明に出発。例年どおり（？）に酔っぱらいがおり、出発時からワイワイ。沼田市街で弁当屋さんへよってもらい、大清水のゲートまでタクシーで乗りつける。

他にも、２パーティほどあり、入山者は多そうである。

さっそくスキーをつけるが、雪の降る中出発は遅れがち、しかも、ペースがまちまちのために、前後の差がかなりひらいてしまい、三平峠で一度合流。

三平峠の登りは、シールでの直登は不可能であろう。

下りも、重い荷にくるしみながらとなるが、筋がいい者ばかりで安心できる。

長蔵小屋で荷上げ品をうけ取り、幕営。しっかりしたテント場をつくり、水は冬期小屋からとらしてもらう。

２日目

B(B.C.)──長英新道で燧ケ岳ピストン──B(B.C.)

本日は、檜高山において練習の予定であったが、以前、上州武尊にての練習山行も行っていることから、快晴となったのをのがさず、燧ケ岳へ向うことにした。

雪は割合しまっており、登高はきついが、快適である。

燧山頂下でスキーをはずすことにするが、一部の自信のある者は、そのまま上り、直下の斜面をすべる。雪の状態により注意が必要であろう。

下りは、途中でばらばらになり、かなり沼側へとなってしまう。沼上に、大きな文字を描きながら、テント場へと帰る。この日のテント場は、かなりすごい飲み会となる。

３日目

B──皿伏山──白尾山──富士見峠B

テントをたたみ、長蔵小屋を出発。沼を渡って皿伏山へ向って登る。樹林内の登下降であり、かなり地道なコースではある。この日も天気がよく、ルートファインディングの心

配も全くない。白尾山からの景色が美しい。

ここからの富士見峠は、あまり広くないが、快適なテント場となる。他にもパーティがあり、彼らは、戸倉から直接上ってきたとのことである。

本日の行動は、ルートファインディングが問題点とされていたが、快晴に助けられた。

4日目

富士見峠――アヤメ平――山ノ鼻

今日も快晴。皆、顔がまっくろになってきた。アヤメ平は、地上の楽園を思わせ、ふるえんばかりの気持ちのよさである。

山ノ鼻への下りは、ルートを間違えそうなため、パーティが、バラバラにならない様、注意していたが、まるでばらばら。パーティの統制が全くとれていない。このために、山の鼻着に1時間以上も差が生じてしまった。あとから着いたC.Lらは、その勝手な行動に加え、先に着いた者達が、テント場の整地もしていないことをしったする。

午後は、自由行動ということにするが、平へ向う者達は今日中に至仏をピストンしてきてしまおうと出発。残った者らは、昼寝など思い思いに過ごす。

5日目

(B.C.)――至仏山ピストン

平へ向った者を分け、至仏へ向う。風がかなり吹くが、滑降は快適。

雪質の一定した斜面には、自分の思いどうりのシュプールが描け、最高の気分。テントへもどる時間はかなり早く、帰ろうかという話になるが、もう1日山での生活をすることにした。雪洞を作って入ってねむる。

6日目

山ノ鼻――鳩待峠――戸倉＝沼田＝桐生

夜半より、とうとう雨が降りはじめてしまった。今回の山行はずっと晴天であったため、とても残念。寒い小雨の中、小人数になってしまったパーティで下山となる。

例年どうり、下りはたくさんのパーティとあう。すごい数だ。

林道は、雪が割合少なく、ちょっとすべりにくかった。

3日目、4日目と、縦走形式をとった行動となったが、大パーティや、また、実力がそろわない場合には、充分な時間をとっておくことが大切である。

天候に恵まれない場合にも、無理をしないこともまた大切だ。

昭和６０年度新人強化合宿（日光連山）

日　　時：４月28～29日
メンバー：C.L・藤井修一(3)　S.L・長谷川淳一(3)　野口博司(3)
　　古庄勝己(2)　　市原　敦(2)

４月28日

霧降スキー場（8:45）～（9:20）リフト終点（9:25）～（12:05）2203m（12:15）～（1:05）2295m（1:15）～（3:40）唐沢小屋

見送りがたった２人というさびしさの中、一番列車で桐生を出発、霧降スキー場には雪がなく、リフトが動いていないためスキー場を登る。この間、皆お金探しに夢中になり話し声がとだえるが、収穫なし。スキー場をすぎると、ガスが濃くなってきてまわりの山々が見えなくなってしまった。このころから残雪が現われはじめ、赤薙山にはかなりの雪があった。赤薙山をすぎ数十分後、（赤薙まで20分）という立て看があり、皆目をうたがう。しかし、ほとんどの者は地図と自分を信じ、この立て看がまちがいであると考え進んだ。さらに数十分後、2203mのピークについた、とおもいきや赤薙山の立て看板あり。さすがに皆がっかりするが、よくよく地図を見るとそこは明らかに2203mのピークであり、（地図の誤りか？）全員そうであると信じ歩き始める。このあたりの残雪は50cm程度、雪がくさっていて非常に歩きづらい。女峰の登りで野口が滑落し時計をなくす。女峰から唐沢小屋への下りではグリセードを楽しみながらいっきに下る。小屋には先客が一名眠っていた。さっそく小屋の中にテントを張りビールを飲み始める。外はあいかわらず、すごいガス。

４月29日

(4:40)～（5:40）帝釈山（6:00）～（6:30）富士見峠（6:45）～（7:35）小真名子山（10:00）～（1:00）三本松

３時起床、4:40出発、小屋の中にテントを張ったため用意が早い。きのうとうってかわって快晴。小屋付近の残雪は70～80cmである。きのう下りてきたところを登りかえしていっきに帝釈山まで行く。帝釈山頂の気温は－４℃。とても寒い。そこから鞍部までは、いっきに下り、小真名子山は雪渓を直登する。小真名子山山頂は木が多くて視界がよくなかったが、大真名子山山頂は正面に男体山が大きくそびえ立つ360°パノラマ。ここで昼食をとる。大真名子山を下り始めてすぐ、野口が落石で頭を切り手あてを受ける。そこから１ピッチで林道に出る。ここから三本松までの９kmほどの林道を１時間10分というハイペースで歩き（小走り）帰途につく。

小真名子山、大真名子山という山域はあまり人が入らないためか、かなりあれていて、

ヤブこぎをするところもあった。

昭和６０年度新人強化合宿（庚申山～皇海山）

時　　期：1985年4月27日～4月29日
メンバー：C.L松井一吉　S.L田村健次　伊藤大介　小池寛喜　赤塚靖

4月27日
桐生駅（13:23）━━━原向駅（13:00）――銀山平（17:30）
銀山平で薄暗くなるまで外でドンチャンさわぎをして、明日の厳しい山行に備える。

4月28日
起床（3:00）――出発（5:10）――登山口（6:15）――山荘（7:25）――庚申山頂（9:05）――P 1808の次のピーク（10:45）――鋸山（12:45）――皇海（14:30）――国境平（16:05）テン場
登山道を歩き出して、すぐ赤塚疲れる。道はしっかりしていて、迷うことはないだろう。この時期は雪がまだだいぶ残っている。庚申山頂付近でスパッツをつける。この日の注意をする所としては、鋸山の手前の登りである。道がくずれている。落石に注意。皇海の登りは大変そうに見えるが意外と楽に登れる。一番の問題は皇海の下りである。雪がなく、道が出ていれば、全々問題はないが、雪で道がわからないと慎重に行かなければならない。森林帯に入ってしまうので見通しはきかない。木にマーキングがあるのでそれをたよりに下るとよい。国境平は鹿がいる。

4月29日
起床（3:30）――出発（5:30）――松木沢の支流（6:30）――第1の砂防ダム（9:25）――――足尾本山駅（13:30）
松木沢におりてからは、ひたすら渡渉を繰りかえす。初めは靴を濡らさずに川を渡れるが、結局靴を濡らしてしまうので最初からジャブジャブ川を渡るか、靴を濡らしたくなかったら、地下足袋などを持って行ったほうがよいだろう。砂利道に出たら、トラックに注意。大きいトラックが頻繁に通る。　（記録）　田村健次

昭和６０年度夏合宿（会越国境）荷上げ山行

時　　期：1985年7月13、13日
メンバー：藤井、松井、田村（健）長谷川、古庄、市原

7月12日

AM 2:00 桐生発 ═ №1荷上げ地（大石田林道）═══ №2荷上げ地（蒲生川沿いの林道）β_1

天気晴れ。田村のセリカ号と長谷川サニー号に分乗して、桐生を夜中に発つ。4時間ぐらい17号、252号をとばして、只見に着く。まず最初の荷上げ地に向けて、大石田林道をどんどんさかのぼる。途中、三条という部落があるが、完全にゴースト化している。林道はかなり荒れていて、車の底をガンガンすりながら、尚かつ奥地へと進み、№1荷上げ地に着く。この県境はジャリが敷かれていて、よく整備されてあり、車が数十台駐車できる程の広さだ。貉ケ森山の方向に数メートル行ったところに荷をデポし、さっそく今来た道を戻り№2の荷上げ地へと向う。最初は蒲生川沿いの林道と間違えて塩沢沿いの林道を行ってしまった。その林道を引き返す途中、長谷川サニー号が林道から落ちてしまった。幸い田村が持っていた古く使用不能であるザイルで引っぱり上げた。何とも前途多難である。やっと、蒲生川沿いの林道をさか登ることが出来、目標のP934への取りつき尾根のところで車を止め、工事のために使ったらしい敷地があったのでここをテン場とする。

7月13日　曇りのち雨

起床 2:30 β(5:00) ー (6:00) P 747 直下 (6:10) ー (7:10) 800 m付近 (7:30) ー (8:30) P 943（荷上げ地）(9:55) ー (11:00) P 747 (11:10) ー (12:50) 蒲生川β_1 ═══ 桐生

朝、起きて雲行きがあやしいと思っていたら、やっぱり雨が降り出して来た。川を渡渉したところ、大官袋沢東岸に道を発見、しかし、少し登ったところで砂防ダムを渡り、目標の尾根に取り着いた。P 747に出るまでは急登で岩に腐葉土がはりついていて、すべりやすく登りにくい。砂防ダムから少々登ると踏跡があった。この道は沢沿いに登っている感じなので、道を登って行く。しかし、どこまで行くかわからないので再びヤブの中へとこぎ入った。P 747から尾根上はかなりやせ尾根でヤブも所々濃く、苦戦する。さらにヤブコギを続けていくと、いきなり前方に行けなくなり、P 934に着いた模様だが、まだ安心できず、東西の尾根を偵察し、前方遠くの稜線を地図上で確認し、P 934であることを確認し荷を木影にデポし、貧弱な昼食を取る。下りは慎重に下るが快適に下れた。途中、木の上で一匹のマムシがとぐろを巻いてこちらをにらんでいるのでそそくさと通り過ぎる。P 747から南東に下り、上りの時に使った道を使おうとしたが、かなり南に下ってしまい、かなり蒲生川の下流におりてしまった。川の中をじゃぶじゃぶと登り返す。どしゃ降りの中の荷上げは終わった。あとは本番を待つのみ。

帰りの途中、田村のセリカのマフラーが林道走行中に壊われたため、完全に族車と化してしまった。セリカ、サニー両方とも今回の荷上げでかなりの負傷をおったが、このことがきっと夏合宿でむくわれるであろう。　　（記　松井）

夏合宿　本山行

山　　域：会越国境（本名御神楽～貉ケ森山～五兵衛小屋～田代平）
日　　程：7月16日～26日
メンバー：C.L　藤井（3M）　S.L　松井（3K）
　　食料　田村（3P）　装備・会計　長谷川（3W）
　　食料　市原（2M）　気象　赤塚（2M）
　　会計　古庄（2W）

7月16日　晴れ
桐生（11:39）━━小出━━本名

桐生駅で諸先輩方から心あたたまる差し入れと見送りを受けた。なんと、スイカは1人1個がノルマである。他にもフルーツやビールなど莫大な量があった。電車の中では全員火を吹いて差し入れをたいらげることに専念した。今日は本名駅泊まり。明日は1日中林道を歩いて稜線をつき上げる予定。本格的なヤブコギは明後日以降となりそう。

PS．本名の駅ではミスター御神楽岳といわれる74才のおじいさんに自分の家で造ったどぶろくをもてなされた。本名の河やら、いろいろな話を聞かせてもらった。合宿初日から話題豊富である。ここで、悪戦苦闘していたスイカを1個進呈した。ついでに水ももらった。

7月17日　晴れ
本名（4:20）－（5:20）三条部落（5:40）－（6:20）登山口分岐（7:05）－（7:55）八乙女滝（8:10）－（8:55）稜線への登り600m地点ぐらい（9:25）－（10:05）杉木ケ崎（10:20）－（11:00）小屋β_1

AM3:00起床。昨日のどぶろくの余韻もさめやらぬ中、本名の駅を掃除しいざ出発。大石田林道と登山口への分岐まで2ピッチ1時間40分で来てしまった。予定よりかなり早いので、最後のスイカを沢で冷やし食べることにした。差し入れはまだまだ食べ切れず3ℓのビールも結局もっていくことになった。登山道は結構道がしっかりしているが草が朝露にぬれS.Lはびっちょりである。八乙女滝は小さいが周りの景色はなかなか荘厳である。稜線への登りはかなり急登で、好天とあいまってなかなかきつい。小屋までの稜線の分岐までの登りは所々階段がついていて登り易い。午前中に小屋に着いてしまいゆっくりと休む。水場は標識があり、0.2km歩いて5分ぐらいの所、水量は結構豊富。（登り10分弱）時間があるので本名御神楽岳に登り、今後のコースを偵察する。明日からはヤブまたヤブ。本名御神楽ピストン（登り15分、下り10分）

7月18日　晴れ

δ(5:15)－(6:25) P 1145を越えたところ(6:40)－(7:40) P 1082手前(8:25)－(9:55)最底鞍部手前㊟(11:10)－(12:05) P 954後(12:25)－(13:30)日尊の倉直下1100m地点δ_2

小屋からはいきなりブッシュの嵐。だいぶ苦戦する。P 1145を越えると踏跡が見え始め、いきなり快適なペースとなる。小休止寸前に一頭のカモシカがいた。P1145からは踏跡はついているが、周りのヤブが濃いためだんだんくらい始める。P 1082手前でS.Lのジャージの右足外側がもろにさけて、完全に足が露出してしまい応急処置のため、ピッチをとる。P 1082を南に下る稜線はなかなかわかりずらく全員波状形となって進む。目標の稜線にのる。最底鞍部手前で昼食をとる。ここで市原がフルーツを切る時、自分の指も切る。バカなやろうだff、アンダンテ．ダルセーニョ。最底鞍部からはヤブは濃く、苦戦するがいいピッチで登る。テン場は日尊の倉直下1100m地点にする。水場は新潟県側に5分のところ。4mの滝あり。水はかなり豊富である。

7月19日　曇り

δ_2(5:10)－(5:55)日尊の倉山(6:10)－(8:15)荷上げ地(9:20)－(10:30)貉ケ森手前のピーク㊟(11:15)－(12:25) 1270m地点(12:40)－(13:45)雲河曾根山手前の最底鞍部δ_3

日尊の倉山からはところどころに赤テープがついていて、最初はそれをたよりに降りて行ったが途中から西側の尾根に入りこんでしまい、かなり時間をロスした。荷上げ地で大休止を取り荷分け。ここから貉ケ森までは完全に踏跡がついていて、ヤブもうすい。貉ケ森山頂で1977年のGUTWVのプレートを見つけ全員感激する。ところが貉ケ森を過ぎると猛烈なヤブで、なかなか前に進まない。灌木帯やつる、時たましの竹なども出て来てだいぶ苦戦した。今日のテン場は雲河曾根山手前の最底鞍部とする。水場はかなり下って行かないとなく、北西方向、1115mの沢を少々下ったあたり。水量はかなり少なく、タッパーで水取りをする。

7月20日　晴れのち雷雨

δ_3(5:30)－(6:40)雲河曾根山直下1230m地点(6:55)－(7:50)最底鞍部(8:10)－(9:15) P 1143(9:30)－(10:25) P 1143を越えた鞍部δ_4

雲河曾根に続くピークの直下1250m地点から北面をトラバースする。灌木のヤブでなかなかの急傾斜である。西に伸びる尾根は灌木とつるの猛烈なヤブであった。しかし、1200m地点ぐらいを抜けると、ヤブは低くなかなか快適であった。P 1143までの登りはところどころヤブが濃かったり、薄かったりであった。P1143から下るとき、最初北面の尾根に下ってしまい、少々トラバースする。今日の予定のテン場地点で昼食を取っていたら、いきなり雨と雷を伴ってきたので、一時フライをかぶって様子を見ていたら、雷が近くに落

ちたらしい。ここでC.Lはここをテン場に決定した。水場は南に3分のところに涸沢がでてきて、さらに2分下ると沢の合流点にある。水量は中（雨の影響か？）。帰りに、セリをお土産に持って来た。

7月21日　晴れのち夕方雨

δ_4（5:40）－（6:55）P1138（7:15）－（8:25）P1017を越えた1100m地点（8:45）－（9:50）東岐山手前鞍部（10:15）－（11:25）東岐山直下940m地点（11:35）－（11:55）最底鞍部㊐（13:10）－（13:40）P934m直下δ_5

テン場からP1138までは所々濃いヤブだったが、昨日までよりは楽であった。P1017まで行くのには踏跡らしきものが見えてサクサク進む。P1048の直下には林道がうらめしく通っていた。東岐山の直登は思ったよりくらわなかった。しかし、下りでは早めに下りすぎて稜線をはずしてしまい、登り返して稜線に出た。テン場は荷上げ地P934直下910m地点に以前にテン場としたらしいくぼ地があったのでそことする。荷上げ品を取りに行ったら、いくつか米がくさっていたので、パッキングしなおす。水場は西北西に2分下ると涸沢が出てきて、少々その涸沢を下ると左手に沢の音が聞こえ、ちょっと登ると沢が流れている。（水量は小）

7月22日　晴れ（朝のうちガス）

δ_5（6:00）－（7:25）小金井山の手前950mの地点（7:35）－（8:25）小金井山を越えた鞍部（8:00）－（9:45）P936を越えた小ピーク（10:00）－（10:55）P896を越えた鞍部㊐（11:50）－（12:40）794m（13:00）－（13:30）P922m（14:15）－（15:05）小金花山手前の鞍部（15:15）－（15:55）小金花山を越えた鞍部（16:55）－小金花山の次の小ピークを越えた鞍部δ_6

小金井山までの登りは灌木のヤブ。所々濃かったり、薄かったりであった。今日は荷も増えてみんなくらっていた。全体的にヤブは薄くなってきたが、所々濃い灌木のヤブがあって苦戦する。922の登りは中腹ぐらいまで踏跡がついていて、結構くらいながらもサクサク登る。頂上の景観は絶景である。ここで大休止をとる。ここからはヤブは薄くなってくる。小金花山を越えた鞍部は屋根がやせていてテン場にはならないため最後の力をふりしぼって810m付近にテントを張る。水場は鞍部南に下って15分登り25分のところ。沢の源頭で水量は小。

7月23日　晴れ（朝のうち雨）

δ_6（7:00）－（7:50）P908手前のピーク（8:10）－（9:00）P908を越えた鞍部（9:20）P897を越えた鞍部㊐（11:10）－（12:00）P873を越えた鞍部（12:25）－P942手前の岩場S.Lクラウー（15:50）中の又山手前の登り始め（942を越えた鞍部）δ_7

今日の行程でかなりくらって起床が1時間遅れるが、雨が降っていたので様子を見てい

たがすぐやみ、7:00にテントを出る。前半はヤブは薄くなり、岩稜帯に出くわし、結構進める。（岩稜帯P 881手前の稜線）P 908までの登りは踏跡がついていた。P 942の手前前でS.L（筆者）は暑さで軽い日射病にかかり、くらってしまう。C.LとS.Lだけで大休止を取る。（申し分けない）S.Lの荷をほとんどC.Lが持ち、C.L藤井奮闘する。テン場は中の又山手前の登り始めにちょうど六テン一張り張れるぐらいの絶好の場所があった。更にすぐ横に水がごく少量流れていて、とてもLuckyであった。（この頃天気図上に台風が現われる。）

7月24日　曇りのち晴れ

$\mathfrak{B}_7$（5:50）－（7:00）中の又山（7:25）－（8:15）中の又山の稜線1010m地点（8:45）－（9:45）P 949手前の鞍部（10:15）－（11:05）P 949を越えた910m地点㊟（12:00）－（12:50）919手前のピークの手前の鞍部（13:10）－（13:50）五兵衛小屋を越えた鞍部（14:10）－（15:00）五兵衛小屋を越えたピークを少し下ったところ$\mathfrak{B}_8$

中の又の登りはヤブは薄く結構サクサク登れた。しかし下りは稜線をはずしやすく、2度も尾根を登り返す。P 949からP 919の二つ手前のピークまでは踏跡らしきものがあり、風通しが良くサクサク歩ける。P 919の二つ手前のピークは所々岩場があり、注意を用する。P 919から五兵衛小屋を越えた鞍部までは完全に道がついていた。鞍部からヤブはいきなり濃くなりなかなか前へ進めない。テン場は鞍部の次の一つピークの沢の入ったところ。880m地点。水場は南へ下り5分、上り10分のところ、水量は少。2m滝の上部。

7月25日　晴れ（朝のうちガス）

$\mathfrak{B}_8$（5:40）－（6:45）170mの登りの途中1010m地点（7:05）－（7:55）170mを登り切った鞍部（8:15）－（9:05）P 1066手前1030m地点（9:25）－（10:40）1057手前の鞍部㊟（11:30）－（12:20）1057の直登を終わったところ（12:50）－（14:10）P 1191.3を越えたピーク（14:30）－（15:40）最底鞍部$\mathfrak{B}_9$

このコースは資料もなく未知なので不安であったが、なんとも濃いヤブであった。170mの登りはかなりな急登であるがヤブは薄く登りやすかった。これを越えるとヤブは一層濃くなり苦戦する。ほとんどが灌木であるが、所々ツルがでてきた。1066で猪か熊らしき獣（実は熊であった）がいきなり目の前を横切り、エールをかけたり、歌を歌ったりしてガンガン進む。1057からの登りは稜線上すごいヤブであるが、稜線をはずすと薄くなり稜線上よりも登りやすい。1191.3の三角点をすごいヤブの中で偶然見つける。鞍部への下りはヤブが濃いため稜線をはずしやすい。今日のテン場は最底鞍部とした。水場は南東に行くとすぐ涸沢が出てきて下り3分、上り5分で水が取れる。水量は小。

7月26日　晴れ（朝のうち雨）

$\mathfrak{B}_9$（5:50）－（6:25）P 1135（6:45）－（7:25）林道－（2:00）大白川駅▬▬桐生

昨日抜けるはずだったヤブを今日やっと抜けた。P1135の登りは最初は笹ヤブ、ピーク直下で灌木が現われてくるばそれほど濃くはない。P1135の南への下りはすごい急で木につかまり、すべりながらおりてくる。そして感動の林道に出て、全員で健闘をたたえあった。浅草岳へは連日炎天下でのヤブこぎで全員疲労がピークになっていたため、登るのはあきらめた。結局、林道を歩いて駅に行くことにした。途中、左沢で全員ヤブの汚れと臭いを落とす。大白川駅から桐生までは、ひたすらビールを飲みまくった。

（記　松井）

P.S　浅草岳はパスすることになったが、この永遠と続いたヤブを走破したことで十分今回の合宿の成果があったと思う。シビアなコースであったが、「ヤブの完全縦走!!」を合言葉に全メンバーが団結して、がんばってくれた。とくに3年生は、最後の夏合宿とあって、気合の入れようは相当なものだった。2年生は今回の合宿を通して得たもの（ショック？感動etc）を伝えてほしいものだ。

最後に、この合宿を計画するに当って資料を提供して下さったOBの方々に深く御礼を申しあげます。

（記　藤井）

昭和60年度秋合宿（南アルプス）

時　　期：10月2日～10月5日
メンバー：C.L　古庄（2W）　藤井（3M）　山中（3M）　田村（3P）

今年の秋合宿は前期試験の後遺症を受けて実施自体危ぶまれましたが、秋合宿は必ずやらなければいけないと考えた4人が集まって行くことになりました。なお人数が4人と少数であることと、合宿費を安くしようという、メンバーの意見を取り入れて車で行くことにしました。

10月2、3日
桐生＝甲府＝身延＝奈良田――大門沢小屋

PM7:30桐生を山中さんの車で出発、八王子を経由して翌日のAM2:00に甲府に到着、甲府市内で車をとめるところを探しまわるが、結局駅前に駐車しておくことにして、駅の待合い室で仮眠をとり朝5時20分甲府を出る。身延までは列車で身延から奈良田まではバスだ。途中山中さんがバスに酔ってしまいバスが止まった時に車から降りてゲーゲーはいていた。AM9:25奈良田着、山中さんは気分が悪そうで30分ぐらい休んでから出発。山中さんは昔から乗り物に弱かったそうで、昔は「百メートルの山中」と言って、百メートルも車に乗っていると気分が悪くなるというので、みんなに恐れられていたんだそうです。

話をもどします。発電所の手前を沢に沿って登り初める。だらだらとした登りで沢をつり橋で２度３度と渡って行く。急な登りはなく道もよく整備されていて道標もしっかりしている。ゆっくり登って４ピッチで小屋に到着。天場から富士山がでっかく見える。紅葉も少しずつ小屋のあたりから始まっている。

10月４日

大門沢小屋――農鳥岳――西農鳥岳――農鳥小屋

ＡＭ4:20起床。6:15出発、富士山がすそのの方まで見えてくる。8時2400mを過ぎたころからすごい登りになり足が上がらなくなり２度目の休けい。９時稜線上に出る。鳳凰三山がきれいに見える。農鳥岳を気づかないうちに通過、快調に歩き進める。このあたりから登山者が多くなるが、みんな私達と逆コースの人ばかり（この場合僕等の方が逆コースになるのかな？）西農鳥岳の手前でフライを張って昼食。12時に西農鳥岳着。ここから赤岩岳・富士山・鳳凰三山・間ノ岳がばっちり見える。農鳥小屋まで20分。小屋に着いたがまだ時間は早い、ここで先に進むか否かで、様々な人間模様をおりなすが、結局ここでテントをはることに決定。

10月５日

農鳥小屋――間ノ岳――北岳――大樺沢二俣＝＝甲府＝＝桐生

ＡＭ3:30起床。ブスの調子が悪く火がつくまで15分もかかってしまった。台風が近づいているのに天気はまずまずだ。富士山がよく見える。5:30出発、まず間ノ岳だ。途中でトイレ・タイム。藤井さんがうんこに行くが風が強いためペーパーが天高く舞い上がった。おぞましいながめだ。２ピッチで北岳山荘到着（7:50）コースタイムを大幅短縮。間ノ岳を越えたあたりから雨と風が強くなる、小屋に着いてもやまないので小屋の内で休むことにする、休けい料１人150円、小屋は設備がととのっていて、僕等はストーブのまわりにすわってタバコを吸いながらＮＨＫの朝の連続テレビ小説“澪つくし”の最終回を堪能してしまいました。ついつい長居をしてしまい出発したのは９時半、なんと２時間近く休んでしまったのです。小屋から北岳・広河原の分岐まで30分、北岳山頂まで10分、山頂では風雨とガスでなんにも見えず写真一枚撮ってすぐ下山。あとは広河原まで下るだけだ。広河原までは色々なルートがあるが今回は最短コースを選んだ。しかし道がぬかるんでいたりはしごがぬれていたりで注意しながら下る。広河原まで少しいそいで３ピッチかかった。広河原から申府までバス、またまた山中さんが酔ってしまった。甲府から桐生まではまた山中さんの車だ、山中さんは水を得た魚みたいに快調にドライビング。甲府市内からちょっと出たところで1300円で食いほうだいの店にはいる。ここでみんな食いほうだい合戦がはじまる、しかし田村さんの体調がわるく藤井さんの圧倒的な独走をゆるしてしまう、後は満ぷくの腹をさすりながら桐生へとひた走る。

今回は一般的な北岳→農鳥岳というコースの逆コースということで多少不安がないこと

もなかったのですが、体力的に少しきついぐらいなのと日程的に最終日の北岳がゆっくりできないということ以外は別に逆コースでどうこう言うことはないと思いますが、今度行くときには普通のコースで行きたいと思いました。あと今回の山行はメンバーが４人と少なかったけれど、楽しく得る所の多い山行でした。　（記録．古庄）

昭和６０年度　春スキー合宿

時　　期：1986年3月21～26日

メンバー：C.L　藤井（M３）　S.L　赤塚（M２）　山中（M３）　豊島（E４）　伊藤（信）　小池（K３）　伊藤（大）（S３）　長谷川（W３）　市原（M２）

3月21日　晴

巻機での練習を経てついに合宿の日となった。3回生以上は最後の合宿とあって、かなり気合が入っている。特に31日から社会人となる豊島さんは学生最後なので一層の様だ。今回小池さんが家の都合で途中下山する事になり、そのため行きは車と電車に分かれて戸倉に向った。10:15戸倉発。長い林道をシールをきかせて歩く。天気は晴れ、とても暑い。休憩中に、横の斜面で遊んだりしながら鳩待峠に3:00着

3月22日　晴

今日も良い天気である。しかしこの後、天候がくずれる事が容易に予想できる。そこで練習的な意味で計画していた富士見峠をやめて、悪沢ピストンを1日早めて行うことにする。6:15に鳩待峠をカラ身で出発、樹林帯をぬけるとすぐ目的地だ。ここで8:04、考えていたより大分早い。そこで小至仏へ登ることにする。途中、どこかのパーティーを追い越す。今回は全員が張付けシール＋ジルブレッタ（ワイヤービンディングではない）であり、おまけに9人中4人が兼用靴というハイレベル（？）の装備である。追い越す時、シュッシュッという音を残して少しも逆に滑らず行けた。装備の差は大きい。8:33小至仏着。天気がいいので武尊や皇海、谷川連峰がよく見える。9:00発、小至仏、悪沢に9本のシュプールをくっきりとつける。雪質もよく、眺めもよくゲレンデでは絶対に味わう事のできない満足感、幸福感を得た。自分達のシュプールをふり返る時、僕達はその美しさに狂喜した。樹林帯を難なくすぎるともうすぐ鳩待峠だ。この間55分間の滑降だった。又樹林帯で登ってくる女性の歓声を受けたのも気持ちよかった事のひとつだ。鳩待で昼食をとってから休む。後は山ノ鼻へ行くのみなので気楽である。この時テント外で湯を沸かしたのだが、1時間もかかってしまった。11:30鳩待峠発。1:00山ノ鼻着。天気がいいのでテントの外で酒を飲みつつ日光浴、とってもいい気持だ。この時早稲田のワンゲルが大挙して幕

営していた。彼等は沢山赤旗を持っていて、私達は閉口していたが後にその赤旗に御世話になったのだった。

3月23日　小雪のち大雪

7:50山ノ鼻発。尾瀬ケ原には早大の赤旗が乱立していた。11:35 大白沢着。雪が激しいので景鶴ピストンを中止する。この夜、風、雪が強く一晩に50cmは降ったであろうか。「至仏にも降っているんだ。」と思うと少しは許せる。

3月24日　大雪

まだ雪は激しく降り続いている。予定ではP 1911まで荷を上げ、そこから平ケ岳ピストン、次に日崎乗越を経て、山ノ鼻であるが、雪のため安全策を取りテン場から平ピストン後、来た道にもどる事にする。そこで7:00テン場からほとんどカラのザックをしょって平へ向う。しかし途中ルートを間違いそうになり、雪も更に激しくなったので平を断念。テン場へ向かう。その途中、来た時のトレースがもう消えている所がある。すごい雪だ。テン場に8:15に帰って来る。そして沈澱。ヒマなのでトイレを作ったり、雪洞を掘って遊んだりしていたが、そのうちトイレが次第に深くなっていき、そのうち掘っている本人が見えなくなってしまった。彼は土を見る気だったが3m程掘ってあきらめた。

2月25日　雪

6:45テン場発。まだ雪が同じ勢いで降り続いている。すごいラッセルだ。スキーをはいてさえ膝まである所もある。赤布、赤旗がたくさんあって下降ルートの手懸りになるが地図、コンパスで絶対確認が必要すべし。8:45途中迷いながらも猫又川の右俣、左俣の分岐に到着。天候が気になるので休憩がてら、ツエルトを張りココアを作り天気図をとる。その後少し天気回復。11:00に山ノ鼻着。ここで小池さん下山。沈澱がなければ至仏へ行けたのにと悔しがっている。豊島さんが鳩待まで同行する。トレースは完全に消えていたそうだ。

3月26日　快晴

昨晩は星がよく見えた。カーンと冷えてテントの端に寝た者は眠れなかったという。朝テントを出るとダイヤモンドダストが見えた。とても温度が低い。ビンディングに素手で触れるとピタリと張り付いてしまう。6:45山ノ鼻発、快晴の中激しい自分の息を聞きながら晴天にそびえる至仏をひたすら登る。中腹はクラストしていて、シールが効きにくくつらい。そして岩が出てくるとピークが見えてくる。ここから30分程でピークに着。8:30、ついに頂上。トップとしんがりでは大分差がついた。「至仏山山頂」の立札と共に記念撮映。快晴の下360°の視界、遠くに富士山、近くには燧ケ岳そして今、合宿の目玉の800mの大滑降。ルートは初めは西に向い、左手に見える岩の下あたりの高度から、左にずっとトラバースし、山ノ鼻に向けて滑降することにする。上部はむせるばかりの新雪にまるで

飛ぶように、クラストした中腹では確実なエッジングで鋭くターンをきって滑り降りた。そして最後の樹林帯はHiになった気持を静めてくれた。至仏を滑りおりてテン場に向かう間に500m程ケ原を歩く。この時至仏山を仰ぎ無上の満足感で満たされていた。9:30山ノ鼻着。11:15発。鳩待峠12:15着。下からクロカンをはいてアタックを背負ったパーティーがやってきた。クロカンの方が登りは楽な様だ。12:30発、長くだるい下り。高校の山岳部のリーダー養成合宿とすれちがう。彼らは大半がワカンで歩いている。一部の生徒と先生は山スキーであった。1:50戸倉着。

今回の合宿は例年になく天候に恵まれず苦しんだ。最初フィリピンのあたりにできた弱い停滞前線が次第に発達し、最高で970mbにもなった。正に前線を伴った台風である。又北海道の北東に高気圧が居座ったために2の低気圧がブロッキングされぬけるのが遅くなった様である。私達はこれらに力士の名前をつけ、あいつが弱い、こいつが強いといっていたが最終日で晴れた時、高気圧が勝った時に保志が初優勝したので、この高気圧は本当は保志関だったのだ。

悪沢と至仏しか滑れず平ケ岳へも行けなかった。計画は完璧だった。山は天候に大きく左右されるものだという事を実感した。

（記録　赤塚）

昭和57年度個人山行記録

巻　機　山

時　　期：1982年6月1日～2日

メンバー：越沼敦、豊島吉章

タイム：1日

六日町＝清水部落（5:20）――（8:30）避難小屋（11:40）――断念（15:00）――避難小屋（17:20）

今回は2人で巻機山～丹後を1泊（予備日1日）で縦走しようという計画で入山したのであるが、天候と体調がすぐれないので途中下山した記録である。

朝一番のバスで清水に至り、がんばって登りだすが、5合目の頃よりガスにつつまれるが、以前来たことのある道なのでまったく問題はないのであるが、二日酔いのK沼君のペースが落ちはじめる。又、ニセ巻機山をすぎる頃より、雨が降りはじめる。避難小屋に文字通り、避難したが、天気はますますひどくなるので、今回の予定はまずだめだろうということでラジウスに火をつけ大休止となるが、11時すぎより雪はやみ、回復のきざしが見え始めたため、今日じゅうに下津川山まで行けば明日には丹後よりおりれそうなので、頑張ることにし、出発するが、牛ケ岳を過ぎるあたりより、ますますガスが濃くなるが、ま

っすぐ進むうち、ふみあとがなくなり、跡をみつけるが気弱になり、予備日をつかいたくないという理由により、今回は断念することにし、巻機山へひき返す。避難小屋へ入り火をつけ、この日は早々にねる。

2日

避難小屋(6:20)——(8:00)清水——沢入═══六日町▬▬桐生

今日もガスの中、清水への下山であるが、清水へおりたら六日町へのバスは昼頃までないので、二人でもんくを言いながら歩く。沢入まで1～2時間。酒飲んで電車で桐生へ帰る。

飯豊連峰

日　　程：1982年6月5日～6日

メンバー：田村博之、豊島吉章

6月5日

桐生▬▬山都駅═══御沢小屋(9:50)——地蔵山(12:20)——三国岳(13:20)
切合小屋(14:40)

今回は飯豊の最も一般的とされるルートを選び、球技大会の休みを使って計画した。

桐生を夜行で出発し、山都駅よりタクシーに乗り川入で登山届を出して、御沢小屋へ入る。小屋では遅い朝食をとりいよいよ尾根に取りつく。地蔵山の手前で少し雪をみつける。飯豊本山方面には、まだかなり雪が残っている。三国岳の小屋のところで今回初めて人に会う。小屋は思ったよりリッパである。小屋の所で昼食をとり、切合小屋に向かう。今日は切合小屋泊りである。

6月6日

切合小屋(4:20)——飯豊小屋(5:20)——御西小屋(6:40)——(9:20)梅花皮小屋(11:20)——飯豊山荘═══小国▬▬桐生

今日中に下山しようと早起きして、飯豊本山に向う。少しガスがでている。飯豊小屋では2人パーティに会う。まだ朝食をとっていたようであった。飯豊本山を経て御西小屋へ向う。御西岳までは全く平で、夏でも来ればお花畑が美しいであろうと思われる。御西小屋はりっぱで、まだ新しい様だ。大日岳をピストンしようかとも思ったが、今日じゅうに下山しようというので、ピストンはあきらめる。御西～梅花皮小屋まではかなり雪が多く半分位は雪の上を歩ける。梅花皮小屋で昼食をとり、北股岳をピストン後、石転び沢を下る。石転び沢は上部200m～300mほどがやや急で、ピッケルを使ってグリセードをし、

あとは、スタンディングセードで下る。途中、スキーを持ったパーティとすれちがう。途中雪が2～3ケ所切れたあたりより、左側の山道へ移る。温身平を過ぎ、飯豊山荘よりヒッチハイクで長者原へ。長者原からはバス。

しかし、『私は見た』そう、私は、小国駅へ向うバスの窓より見てしまったのである。それは、赤いヤッケを着てスーパーカブに乗り、荷台にシュラフをつけた教育の先輩、T氏であった。彼は驚くべきことに前橋から山形まで、チョウを追ってカブに乗ってやってきたのである。

その後、本人より、間違いなく、赤いヤッケの人物は、田村一利氏であったことを確認した。

白毛門～谷川

日　　程：1982年10月1日
メンバー：豊島吉章

土合(5:30)――白毛門(7:00)――朝日岳(8:20)――蓬峠(11:40)――茂倉岳(14:30)――土合(17:30)

今日は試験あけで、久し振りに山へ行こうと思い、以前に2度歩いたことのある白毛門～谷川を一泊でゆっくり歩く予定であったので、ツェルト・コンロ・食糧・水も4ℓも持っていったのに、1日で歩いてしまったので、ただむだに重い思いをしてしまった。始めから一日で歩くつもりならば、もっと軽装にしたのに、天気が良かったので快調にとばし蓬峠に昼前についてしまったので、頑張って今日じゅうに下山しようと思ったのだが、試験のためなまった体が、茂倉あたりで急につかれてきた。が、谷川へ向う途中、教育の壁さんと医学部の清水さんに会う。一ノ倉沢の三ルンゼを登って来たとのこと。壁さん達とラクダの背の所まで御一緒し、壁さん達は、一ノ倉に車をおいたので巌剛新道を下るというので別れ、西黒を下り土合へ向う。

朝日連峰

日　　程：1982年10月9日～10日
メンバー：山中　卓、豊島吉章、坂本　敦

10月9日
桐生――日暮小屋(9:10)――(12:45)竜門小屋(13:30)――(2:40)三方境・狐穴小屋

8日夜、車で桐生を出る。佐野より高速に乗り、福島で下り、米沢を経て、日暮沢小屋方面を目指す道がはっきりわからずかなり迷ってタイム・ロス。小屋のあたりに車を停め、荷分けをする。食事をとり出発する。小屋から急登ぎみである。途中、2～3人パーティに会い、竜門小屋の水が枯れているので、途中の水場で水をくんだ方がよいとのことなので水をくむ。清水岩山を過ぎたあたりよい紅葉が目につきはじめ、まるで雲上の楽園の様であった。竜門小屋で小休ののち、三方境にある狐穴小屋へ向うが、来る時ずっと運転していたためか、山中さんがやや遅れはじめる。狐穴小屋では、山中さんの下宿にあった、くずれた豆腐がみそ汁には入る。早々にねる。

10月10日

5 狐穴小屋(5:40)——以東岳ピストン——(7:50)狐穴小屋(8:20)——西朝日岳(10:00)——大朝日小屋(11:50)——頂上ピストン——大朝日小屋(13:20)——小朝日小屋(14:20)——日暮沢小屋(16:20)——鶴岡市

朝食後、以東岳ピストンに向う。ガスが出て風が強く寒い。以東岳では、ふるえながら写真をとり、早々に狐穴小屋へ帰る。小屋からは、昨日来た道を竜門岳まで戻り、西朝日岳へ向う。朝日連峰は、のっぺりした山容で、紅葉とのコントラストが素晴らしい。大朝日小屋で小休の後、頂上をピストンする。大朝日からは、だらだらの下りであるが、小朝日岳は急登である。小朝日岳からは少し下ると樹林の中で落葉を踏みながら下ると林道に出る。林道を20分程歩き、車のおいてある日暮小屋へ向う。日暮小屋からは数km林道であり、2人の登山者を車に乗せるが、山中さんの元気な運転に、その人が思わず『ラリーでもやってたんですか。』と聞いたのは忘れられないエピソードとなった。2人の登山者をバス停に下ろし、我々は、山中さんの親戚の家が鶴岡にあるので、本日は、そちらにおじゃまし、翌日、桐生へ向う。帰路、17号でアウディを追っかけまわす、大変元気なレオーネがあったのはいうまでもない。

会津駒ケ岳・裏燧

日　　程：1982年10月30日－31日

メンバー：田村博之、坂本　敦、豊島吉章

10月30日

夜、車で桐生を出発する。日光のあたりで道へ鹿がとび出て思わずはっとする。檜枝岐より、登山口へ向い、登山口でテントをはり寝るが、いつもの様に朝寝坊をする。10時頃より登り始め13時頃駒ノ小屋着。あたりはうっすら雪化粧である。頂上ピストンする。頂上からは中門方面が美しい。思ったより寒く早々に下山する。下山後車で御池小屋へ向い、天幕にテント張る。

10月31日

御池小屋（6:30）――燧岳（9:30）――見晴（10:30）――温泉小屋（11:30）――御池小屋（14:00）

持っていたテントが、ジャンボ式などで、あけ方寒い思いをする。御池から燧へ登る。雪をかぶった木道は少々すべり易い。燧より見晴に下り、温泉小屋を径て、平場の滝、三条の滝を見物する。なかなかの迫力である。その後、裏遂林道は静かで落ち着いていい所である。

昭和57年度冬山（南アルプス悪沢岳・赤石岳）

日　　程：1982年12月22日～12月28日

メンバー：C.L　清水信明（医2）　S.L　山中　卓（工2）　高橋明弘（教4）　渡辺明彦（教4）　清水浩彰（工2）　坂本　敦（工2）　田村博之（工2）　越沼　敦（工2）

12月22日

前橋（15:40）━━（23:45）伊那大島駅

大勢の見送りをうけ前橋発。電車の中では莫大な差し入れを消化する。伊那大島駅で、駅長さんの厚意で駅の待合室で寝かせてもらう。お湯までサービスして頂き恐縮。一面ガスが漂っており幻想的だった。

12月23日　◎

伊那大島駅（6:10）――（7:30）湯折――小渋川巻き道――（13:50）広河原小屋△1

マイクロで伊那大島駅をあとにし、湯折に到着。朝食を食べ出発。小渋川沿いの林道は凍結。林道を下りて砂防堤の上を徒歩。徒渉に40分もかかってしまう。徒渉後巻き道を歩く。よく整備されており、時々、あられが降ったり青空が見えたり、積雪量は3～5㎝、10:10頃より粉雪が降り始める。途中のはしごに雪がついていて、少し恐かった。途中山中がコケて頭を軽くケガする。巻き道が終わってから、細かい徒渉を繰り返し広河原小屋へ。小屋周辺から、木枝を集めてきて小屋で火をたいて暖まる。小屋周辺の積雪量は10㎝位。小屋周辺は一面銀世界で、雪が低くたれ、谷をおおっている。

12月24日　○

△1――（11:43）舟窪通過――（14:15）大聖寺平――（16:20）荒川小屋△2

5:00起床。尾根の積雪量は登り始め足首程度。中間80㎝、舟窪付近より積雪量非常に多く、ワカンをつけて登る。ワカンは3人しか持って来なくて、トップ交代しながら、ワ

カンを順に回して登る。樹森限界後、アイゼンにはきかえて登る。風は強い。大聖寺平では立てた赤旗が吹き飛ぶ。この付近はクラストしており、アイゼンが面白い様にきく。ここから荒川小屋までの道は巻道を使用する。風が強く進むのに苦労する。荒川小屋付近は、膝くらいまでのラッセル。テントは小屋の中に張る。他大学の4人パーティも同様であった。

12月25日　◎→①

$\mathcal{S}_2$ (7:15)——(10:08) 中岳山頂——(11:30) 東岳山頂——(12:45) 中岳と東岳のコル——(14:30) 荒川小屋$\mathcal{S}_3$

5:00起床。霧の中を出発。稜線上で、白い衣装をまとった雷鳥を見る。中岳山頂に着いた時から、にわかに晴れ始め、先程まで10mしかなかった視界が、北岳まで見える様になる。小屋を出る時、風はないのだが、手袋をはずすと、刺す様に手が冷たい。視界が良くなったので悪沢に向う。稜線上は風が強い。東岳山頂の岩陰で昼食。非常に寒い。この間は、稜線がやせていたり、岩場があったりして、結構シビアであった。中岳を下山途中、飛行機が長く尾を引いていた。明日は天気が悪いだろうと話した。荒川小屋では、小屋の中から、小屋の外へテントを張り替える。

12月26日　⊗吹雪

$\mathcal{S}_4$　沈澱

台湾坊主の通過で朝から吹雪。テント内で沈澱。降雪30～40cm。雪かきは、団結力のある2年生が活躍してくれた。エロいシリトリをして1日をつぶす。

12月27日　○

$\mathcal{S}_4$ (5:37)——(6:00) 稜線——(6:36) 大聖寺平——(8:40) 赤石山頂 (9:00)——(10:00) 大聖寺平——(11:40) 舟窪——(13:20) 広河原小屋$\mathcal{S}_5$

3:00起床。夜中に吹き荒れた吹雪も止み、空には満天の星。前日、一応赤石を狙うということで起床を3:00に決めたのだがカラーメンを作るのに時間をくってしまう。星空のもと、懐電を燈けて出発。雪のある時は、稜線上を行く方がよいので、まず稜線に登ってしまう。アイゼンが気持ち良く効く。大聖寺平で、悪沢、中岳がモルゲンロートで朱く染まってものすごく奇麗だった。岩稜には雪が少なく、稜線は雪庇が大きくはり出している。赤石山頂は、弱い風が吹いていて、展望は360度。移動性高気圧におおわれた様である。大聖寺平からは稜線上を下りる。ショイコを背負っている越沼が、樹にショイコがひっかかり樹林の中でもがいている。広河原小屋でのんびりくつろぎ、2日分の食糧を食べる。大満足。

12月28日　○

β_5（6:54）――（9:30）湯折の河原に到着＝＝伊那大島駅▬▬前橋

4:30起床。電車に間に合う様、山中、田村を先発として6:30に先に下山させる。本隊は坂本がS.L代行として出発。これで冬山も終わりかと思うと思わず遠くに見える荒川岳を振り返りながら下山する。公衆電話がないため、民家で電話を借りる。駅についたら2時間も時間があり、各学部に土産を買い、酒を飲む。少々飲み過ぎて、車掌さんに、乗車券の代わりに、スルメを見せたり、乗車券は他の人が持ってると言いはって自分が持っていたりして、エピソードを作った人が約数名。大変素晴らしい山行だった。

昭和57年度春山（三国峠～谷川岳）

練習日程

1／15～16	平標山ピストン　◎後①
1／18	春山の話合（トレーニング・コース検討）
1／23	西黒尾根・白毛門　①
1／26	春山の話合（コース決定）
1／30	黒岩でアイゼントレーニング、話合
2／3	パンフ作成
2／5	上州武尊下見
2／6	浅間山にて雪訓
2／19～20	鳳凰三山下見
2／25～26	天神平～谷川、白毛門（どちらも途中下山）

山　　域：三国峠～谷川岳

期　　間：1983年3／2～3／6

メンバー：C.L・渡辺明彦（教4）　S.L・清水信明（MⅡ）　食料・坂本敦（工Ⅱ）
装備・越沼敦（工Ⅱ）　気象・清水浩彰（工Ⅱ）　会計・田村博之（工Ⅱ）
気象・豊島吉章（工Ⅱ）

行動予定　3／2　前橋▬▬後閑駅――三国峠――平標山の家β_1
3／3　β_1――大障子の頭避難小屋β_1
3／4　β_2――谷川岳――土合▬▬前橋（予備日4日）

山行記録

3／2　⊙→⊛

1:53　渋川駅発、山下氏（教ＯＢ）、倉地氏（医Ⅲ）、南部伝（医Ⅲ）、川田氏（教Ⅳ）のお見送りをうける。

2:10　後閑駅着。仮眠をとる。

5:00　Taxiにて三国峠へ。

5:45　三国峠着。●＊ 気温は高いらしく暖かい。朝食をすませ、装備を整えて6:25出発。ラッセルはせいぜい膝位。樹林限界をこえてもさ程風は強くない。

8:50～9:00　三国山山頂。平らなため少し行きすぎる。小休止

9:55　調子よく下り始めたが、強い横なぐりの雨が降り始める。うっとうしく思いつつ歩いていると、目の前に亀裂が入り、アッと言う間にS.L転落。雪庇をふみ抜いて、ブロックもろとも20～30ｍ滑落。滑落したのがわかったのは、後ろにいた田村君らしい。シュリンゲを出してもらって稜線に戻る。

10:15～10:25　小休２。東に張り出す5～10ｍの雪庇に注意しつつ歩く。

12:00　平標山の家。入口が完全に埋まっており、掘出に１時間位かかる。小屋の中はなかなかよい。夜は豚汁。

3／3　⊛つづき

朝から小雪が舞い、見通しがきかないため沈でん。寝てすごす。「動きたい。」というのがみんなの声。風は南西の風。雪かきは朝、昼、晩の３回。視界は40ｍ位。

3／4　◎→⊛

4:00　起床。

6:00　渡辺と外に出て視界が100ｍ以上あることを確認。出発を決める。

6:40　出発。雪は適度にクラストしており歩きやすい。風はあまりない。

7:20～7:35　平標頂上

8:13～8:15　仙ノ倉頂上。ペースは良好。無風、高層雲が全天をおおっている。南の空は明るい。雪庇の発達は大きい所で10ｍ位。

9:50～10:05　毛渡乗越、この当りから西風が吹き始め、ガスが湧いてくる。

11:15～11:25　万太郎山頂。視界20ｍ。ガスはどんどん濃くなっていく。大障子の頭付近近では全くのWhite out。目の前１ｍの人の顔が見えない。大障子の頭の下り、最初初は南西に寄りすぎる。そこで元に戻ってから２回目のチャレンジ。今度は北に寄りすぎる。

13:30　下るのをあきらめ、大障子の頭付近で

3／2　⊛西風

今日は沈でん。朝からWhite out。朝起きるとテントの半分位まで雪に埋まっており、つぶれる寸前だった。入口付近に寝ていた坂本は苦しそうだった。（それでも寝ていたんだから大した奴だ。）もう１つの入口から渡辺がかろうじて脱出。清水(医)、坂本、

越沼がこれに続いて外に出て雪かき、朝飯を食べて体がぬくくなると外に出るのがオックウになる。ついついキジもがまんする。耐えきれなくなってS.Lが決死の覚悟で朝キジへ。テントから5mと離れていない所（本当はテントのすぐ脇）でキジを打つ。風雪にケツをさらすのもなかなかつらい。（でも気持ちいい～。クセになりそ。昼ごろから風も弱まり出し、雪も小止み、気温も上がったようだが相変わらずWhite out。ラジオは冬型が続くだろうといっている。飯の量が少ないせいか腹がすく。11時の昼飯＋Teaと14時のコーヒーゼリー、それに16時の飯作りが唯一の楽しみ。夜は食糧制限で梅ボシ3個とわずかなフリカケのみがおかず。

3／6　○～◎無風

4:30　起床。外に出た渡辺の第一声「晴れているぞ～。」半信半疑で外に出ると確かに待望の視界がある。晴れているとこんなに展望がきくものか。

6:45　出発

6:55　大障子避難小屋

8:00　オジカ沢の頭。雪庇の張り出しもさ程ない。北よりの斜面がクラストしていて調子がよい。下りは注意すべし。両側がきり立っている。

8:45～8:55　中ゴーの頭

9:20　肩の小屋。日曜とあって多くの人に会う。のんびり昼飯を食べてトマの耳ピストン。この山行の成功をみんなで喜ぶ。

10:45　出発。スキーをかついできた高橋（教Ⅳ）に会う。下りで空を見ると積雲が見える。前線が近づいているらしい。

12:30　ロップウェイ発着所。

13:30　土合。雪がパラつき始める。谷川の天気は本当に変わりやすいですね。

反省・感想抄

C.L　A. Watanabe（教Ⅳ）

初　日：雨については小降であったが、全員ぬれてしまった。しかし小屋までは後わずかなので行ってしまった。雪庇の踏み抜きは注意力がもう少しあれば防げたはずだ。

2日目：視界がない時の行動は私たちの実力ではムリと考え、沈澱を決めた。

3日目：昨日より視界がよくなっていたので仙ノ倉へ行って様子を見、無理な時は引き返そうとして出発した。夜中、テントが半分位埋まってしまった。夜中、雪かきをすべきであった。

4日目：体力温存のために寝ていた方がよかった。

5日目：パーティーがバラバラに行動しがちだった。まとまって行動すべきだった。

S.L　N. Shimizu（MⅡ）

不注意にも雪庇を踏み抜いたのは最大の失敗。ザックやスパッツのひも等、余分なものには注意すべきだ。White outの時はあまり動かない方がよい。

食糧　A. Sakamoto（工Ⅱ）

最近食糧計画がワンパターン化している。ラーメンには干ししいたけ、めざし等を入れるとうまくなるし、荷も重くならないので今後採用したい。予備日の重要性、行動可能か否かの判断、迅速な行動がどれだけ大切か思い知った。

装備　A. Koshinuma（工Ⅱ）

山では天候が最重要と思われる所があると実感させられた。ホワイトアウトの中では行動したくない。最終日には谷川からの景色も絶好調で良い山行となった。

気象　H. Shimizu、Y. Toyoshima

２人とも１年から２年にかけて大きく成長したと思います。体力気力とも来年の冬山から下級生をグイグイ引っぱっていってくれることでしょう。　（N. シミズ）

会計　H. Tamura

ホワイトアウトの中で行動するときは磁石と地図を十分に活用すべきである。「ヤマカン」で行動しようとしたことを反省している。

上　州　武　尊

期　　間：1983年３月８日～３月10日

メンバー：C.L　清水　信明（Ｍ２）　　S.L　坂本　　敦（工２）
　　医療　豊島　吉章（工２）　　医療　越沼　　敦（工２）
　　装備　小林　ひろこ（教３）　　会計　針谷　　晃（Ｐ２）
　　食糧　松井　伸一郎（Ｐ２）　　気象　小池　トモ喜（工１）
　　気象　伊藤　倫恵子（Ｎ１）

行動予定

3／8　前橋 ▬ 水上 ═ 宝台樹スキー場 ── 避難小屋 B_1

3／9　B_1 ── 沖武尊山 ── 中ノ岳 ── 剣ケ峰 ── 前武尊山 B_2

3／10　B_2 ── 武尊オリンピアスキー場 ═ 沼田 ▬ 前橋

（予備日２日）

＜3／8＞　㊗

7:05　前橋発、赤城山がガスに包まれているが前橋では快晴。林氏、山口芳子ちゃん、飯島千津ちゃん、スーラン（鈴木さん）が見送ってくれる。
敷島駅辺りで吹雪、水上に着き、高橋（教Ⅳ）と共に満員のバスに乗る。宝台樹スキー場のレストハウスで遅い朝食をとる。

10:25　スキー場出発。小降になっていた雪も本降りになり、林道の途中から膝位のラッセルとなる。

12:03－12:18　小休Ⅰ　1200ｍ地点

14:20　稜線に出る。時々青空が見えるようになるが、雪はいっこうに止まない。

15:50　避難小屋のそばにテントを張る。

＜3／9＞　⊙→○

4:00　起床

6:40　出発

小雪がパラつく。天気図は移動性高気圧があり今日は晴れるハズだ。膝上のラッセル。なかなか進まない。

8:40　快晴となる。雪面を照り返す太陽がまぶしい。

風に吹かれて舞う粉雪が星屑のように輝く。

10:40－11:15　武尊山頂

遠くにかすみはかかっているものの展望は良い。

風が少し吹いているが暖かい。みんなで壮大な自然をバックに写真を撮る。快調なペースで剣ケ峰へ。

12:00　中ノ岳

今まではここをトラバースしていたらしいが、偵察隊（坂本、豊島、越沼）が行ったところ、O.K.のSignが出たので登ることにする。

12:44　家の串を越えたコル。

テントを張るか、先に行くか、泊まらずに下山するかなどと、まとまりそうもない話の中、前武尊山まで行くことに決定。剣ケ峰Ⅰ峰は巻く。途中C.Lが5m程すべる。Ⅱ、Ⅲ峰は慎重にのぼる。

リエちゃんは怖がっていたが、坂本君のリードで無事通過。Ⅲ峰の下りはかなりの急斜面。まずC.Lがシリセードで下るが、30㎝位の上層にあった新雪が一度に雪崩の如く落ちる。ここは地道を歩いて下るのが正確。

15:00　前武尊山

ここでテントを張る。夕日がいつまでも明るく照らしていた。夜はドンチャン騒ぎ。

＜3／10＞　⊗

5:36　起床、起床係が寝坊。

朝食はカラーメンに干ししいたけ、煮干、わかめを入れて食べるだけなので早い。

7:30　出発

帰心矢の如く、みんなのペースが異様に速い。

8:15　スキー場に下りる。

リフトが動き始めたばかり。

10:30　Taxiで沼田にむかう。

（註３）　今から運動部の役員の忘年会に行ってきます。
12月は飲む機会が多くて……。金がトブよ～。

西黒沢スキー

日　　程：1983年4月3日
メンバー：高橋明弘、清水浩彰、田村博之、豊島吉章

4月3日
工合（7:30）――谷川頂上（10:00）――熊穴沢避難小屋（11:00）――土合（12:00）
高橋さんとは駐車場で待ち合わせし、西黒を登り出す。日曜なので道は舗装され、快調に登る。上部では風も強く、頭が白くなる。頂上で小休後、天神尾根を滑る。避難小屋(うずまっている）のあたりより滑り込むが、雪が深く、１～２度しかターンができないのでこけてしまう。急な所では小さな雪崩と一緒に落ちてしまう。が、十回以上こけながら、西黒沢へ降りる。ロープウェイ駅の手前では数ケ所流れが出ていて気を付けて滑る。

芝倉沢山スキー

時　　期：1983年5月5日
メンバー：高橋（数ＯＢ）、坂本、豊島、田村（博）
タ イ ム：桐生＝土合（6:00）――谷川岳（9:00）――（10:30）一ノ倉岳（11:40）――
芝倉沢出合（12:00）――土合（13:10）
5時30分、土合の無料駐車場にて高橋さんと待ち合わせをし、駐車場で合流したのち、西黒尾根を登りだす。すこし登ると雪がでてくるが、連休中でもあり、ステップはかなりきれいについている。熱い中、汗をふきふき登る。約２ピッチ強で山頂につくが、トマの方は混んでいたのでそうそうに、オキの耳にいき小休をとる。オキの耳より一ノ倉まではちょうど１ピッチほど。しかし稜線のため、ほとんど雪のないアップダウンのためザックにつけているスキーのテールをすってしまう。一ノ倉よりは一気に芝倉沢の出合まではスキーだと一息であるので山頂ではかなり休んで少々すべってみてはゲレンデ遊びをしたあと、いよいよ滑りだす。まずはカールのそこまでは急であるが、広い斜面なので自由自在のシュプールを描く。カールよりややゆるい斜面なので、スピードをあげるが少しいくと斜度が除々に増し、右手の斜面がせまってくると要注意である。その先にはのどと呼ばれる所であり、両側が部分的にせまくなり、斜度もきつく、両側は岩におさえられ、岩と雪のあいだにはシュルンドを形整している。自信がなければ横すべりを入れて、スピードを

十二分おとすべきである。のどをすぎるとあとは再び快適に飛ばせるようになり、少し行くと、旧国道が見える。今回、我々は雪の量などより判断して、芝倉沢の出合までスキーで滑べったけれど、雪の少なそうな時は国道から土合へと向ったほうが不難であると思う。実際この時も、下がうすくすけて見えるスノーブリッジをスキーで越えたり、スキーをしょったヤブコギをするはめになったが、ヤブコギ少々で国鉄の監視小屋に出た。ここより湯檜曾川沿いの道をたどり、土合の駐車場へもどり、その晩は高橋さん宅でごちそうになった。

日　光　白　根

日　　時：昭和58年5月21日～22日
メンバー：伊藤信吉　橋本英一

21日

桐生＝＝菅沼手前駐車場

午後車で出発。約3時間で駐車場着。途中車バンパー衝撃テスト実行

22日

駐車場（4:30）――（5:30）金精峠――（6:30）金精山――五色山――（7:40）前白根――（8:15）避難小屋（8:40）――（9:30）白根山（10:00）――避難小屋――五色沼――――（12:00）駐車場

金精峠までの登山道は最初倒木が多く歩きづらい。金精峠にはくずれかけた小屋がある。金精山の登りは頂上付近で西にまいているので注意。直登したら大変危険である。地図をよく見るべし。避難小屋は良く整備されており多人数の収容可能。ただし小屋の周囲はゴミだらけで気分を害す。自分のゴミは自分で持ち帰るように。白根山頂では濃霧のため視界が数メートルしかなかった。弥陀ケ池経由で下山予定であったが、濃霧で道をはずし、ガケッぷちに出てしまった。どうしても下山道が発見できず、山頂に登り返し避難小屋から五色沼経由で下山することになった。

立山～剣・山スキー

日　　程：1983年6月3～5日
メンバー：田村博之、豊島吉章、坂本　敦、高橋好幸

6月3日

夜行桐生 ═ 立山駅 ═ 室堂 (9:30) ── 御前小屋 (12:00) ── 別山平 (13:00) ──── 平蔵谷最高到達点 (15:20) ── 別山平 (17:10)

夜桐生を車で出発。片道380～90kはあるだろう富山県へ、ポンコツ田村号がひた走る。立山駅には、6時頃つくが室堂までの接続が悪く、室堂へは思ったより、おそく着く。室堂より少々走き、称名川へ落ちこむ手前でスキーをつけ、高度差100mあまりを滑るが、スキーをつけるなどしているうちに時間ばかり過ぎる。称名川を渡ると今度は一気に雷鳥沢を登る御前小屋よりは別山平までスキーをつけて滑ると、ものの10分とはかからない。別山平の小屋の側へテントをはり、平蔵谷出合まで滑る。ひさしぶりのスキーに喜々として滑り、出合よりはスキーをザックにつけ平蔵谷を登り出すが、1時間もすると夜行の疲れも加わり、極端にピッチがおちる。源次郎尾根のS字雪渓を過ぎて少し行った所で小休するともう腰が重くあがらない。時間的なことも考えこの辺よりもう下ることにする。あれほど疲れた登りもいざ下るとなると、あっという間だ。平蔵谷出合よりスキーを背負って、剣沢を登る。途中で天気図を取り、別山平へもどろうとするが、かなり雪もかたくなっており、疲れきった体には少々こたえる。

6月4日

別山平 (6:00) ── 長次郎谷出合 (7:00) ── (9:30) 稜線 ── 剣・頂ピストン ── 稜線 (11:30) ── 長次郎谷出合 (12:00) ── 別山平 (13:00) ── 御前小屋 (14:20) ──── キャンプ場 (14:50)

今日はいよいよ剣のピークを目指す、別山平より長次郎雪渓まで剣沢を滑べるが、朝早いため剣沢の雪渓はかたく、氷化しておりスキーのテールとトップがばたついて、ガタガタ鳴るほどであった。傾斜はないが、ころぶとかなり痛く慎重に滑る。長次郎谷の出合では、かなり大休止をし、アイゼンをつけて登るが、1ピッチも登るとかなり雪もやわらかくなってくる。能の岩の所で小休ののち、長次郎谷の左俣へ入る。左俣よりはかなり、急傾斜なため、下りはどうだろうかと思いながら登る。2ピッチで稜線では1時間ほど思わずみんな寝入ってしまう。その後頂へのピストン。1時間弱である。ピストンの後はいよいよ長次郎雪渓の滑降になるが、上部はかなり急であり、こまめにきざみながら下る。他のスキーのシュプールのない中、快適？な滑降であるが思ったより疲れる。長次郎出合より別山平へ向い別山平でテントをたたみ、御前小屋へ向う。御前小屋からは雷鳥沢の滑りとなるが、ここまでくると一般スキーヤーも多く、荷物を背負って山用のヤッケを着ている我々はどうもみじめである。テン場は称名川沿いのキャンプ場とする。

6月5日

キャンプ場 (7:00) ── 一ノ谷乗越 (8:30) ── 雄山 (9:10) ── 富士ノ折立ピストン ── 雄山 (10:30) ── キャンプ場 ── 室堂 ═ 立山駅 ═ 桐生

今日は高橋君の調子が悪いらしく、豊島、田村、坂むけの３人で行動することとなった。一ノ谷乗越よりは大きな岩の間を縫うように進むと立山の主峰雄山である。夏は有料となる頂も今回はもちろん無料。雄山で小休後、田村、坂本は富士ノ折立をピストンしてくる。昼食を食べた後、豊島、田村は雄山神社より直接、坂本は一ノ谷乗越を経てというふうに２つに分れて滑る。雄山神社よりの滑降は少々雪がかたかったが、キャンプ場目がけまっすぐに下れるため気分は最高!!。キャンプ場からは少々ロープ塔の付近で遊んだ後下山へ向う。

飯　豊　連　峰

日　　程：1983年10月８日～10月10日
メンバー：豊島吉章

10月８日
桐生＝＝駐車場（7:00）――（13:00）御西小屋

桐生を車で夕方出発する。米沢――小国をへて、飯豊山荘を目指すが、飯豊山荘の手前20分位の所で車止めがあり、工事をしていたので手前に車をおき、歩きはじめる。梅花皮沢の吊り橋を渡り、ダイクラ尾根を登る。紅葉が美しい。宝珠山のあたりより、少し雪があり、たかをくくって運動靴できたため、寒い思いをする。又、小雨も降り出し、つかれも加わり、つらいが頑張って飯豊本山を経て、御西小屋へかけこむ。御西小屋の２階に入り、あまりにも寒いのでシュラフにもぐり込む。16時に天気図をとるが、明日もあまり、期待できそうにない。

10月９日
御西小屋（12:40）――梅花皮小屋（14:30）

朝から雨。小屋には10名近い人達が居るが、みんな沈澱の模様。寒いので朝からシュラフに入りばなしである。雨があがり、１人、２人と出発する様だ。僕も出発しようとする。明日以降のことを考え、梅花皮小屋へでも行こうと思う。これで、今回も大日岳はパスとなる。出発し、烏帽子岳の手前で小雨が降り出すが、梅花皮小屋はもう近い。小屋のそばの水場は、雨のため水が流れていた。小屋には他に５～６人居た様である。寒いのでシュラフには入ったまま天気図をとり食事を作り食べる。

10月10日

朝起きる。外は濃いガスである。小屋を出る。北股岳－門内岳－梶川峰を経て下山。先日までのウップンがたまっていたせいか、一ピッチで駐車場まで行ってしまう。

行動時間 6:30 ～ 9:00

冬山（平標～日白山～仙ノ倉山荘）

時　　期：1983年12月25～28日

メンバー：C.L・斉藤繁（医）　S.L・山中卓（工２）　長崎知之（教４）　田村博之（工３）　越沼敦（工３）　清水浩彰（工３）　武井学（教２）　角田喜久雄（教２）　小池寛喜（工２）　藤井修一（工１）　田村健次（工１）　村田英紀（医進１）　新掘陽子（医短１）　田部井聖子（教３）　新田安紀芳（医ＯＢ）

12月25日

元橋（7:15）――松手山（10:25）――（12:50）一ノ肩（13:10）――（2:00）平標山手前――（2:20）一ノ肩（2:30）――（2:50）天場$\mathcal{S}_1$

新前橋駅にＡＭ1:00に集合。盛大な見送りを受けて谷川列車で出発。お弁当が多すぎて食べるのに苦労する。湯沢の新しくなった駅に泊まり、朝6:10のバスで元橋へ行く。元橋発7:15。天気は晴れていたが1時間後には苗場山が隠れ、9:30頃には晴れたり曇ったり。ラッセルは、腰の少し下くらい。松手山頂を素通りし、トレーニング山行の天場を11:00にすぎる頃には風吹の様子。一の肩にザックをおいて平標山へ向かうが、少し手前のなだらかなピークを越したあたりで完全なWHITE　OUT。赤旗をたよりに一の肩までなんとか下る。1750ｍ付近を天場にする。行動はすべて輪かんで、ラッセルは深くてヘソ。一の肩から平標山の稜線は広いから要注意。赤旗を乱立させるべし。

12月26日

$\mathcal{S}_1$（8:40）――（11:40）最低鞍部――（12:25）エスケープ尾根――（2:35）Ｐ1584――（2:45）天場$\mathcal{S}_2$

両パーティの連絡不足により、２パーティの起床が１時間おくれる。平標アタックは悪天のため8:00まで様子をみたが断念。8:40に北に向かって行く。視界50ｍくらい。はじめはラッセル腰くらいだが、しばらくしてヘソくらい。時々全身がうずくまるくらいもぐってしまう。1600ｍ付近で１度休けいし、最低鞍部に11:40に着く。ここまでの雪ピは東側にあまり大きくなく出ている。ここから登りでラッセルは腰くらい。１パーティがラッセルをする。時々太陽がみえるが雪も降り、あいかわらず悪天。視界は200ｍくらいになり、今までより大きく発達した雪ピがみえる。北東にカーブする地点（両側がガケの所）で工学部３年のＴ氏が右に寄りすぎ雪ピにヒビを入れる。一同、彼のことを、すごい度胸のある奴とみなおした。2:35にＰ1584に着きすぐに下りはじめる。30ｍくらい下って大

木のところを天場とする

12月27日

$\mathfrak{B}_2$ (6:25)——(7:40) 1580m——(8:05) 日白山頂——(8:20) 1580m (8:35)——(10:30) 1250m尾根分岐——(12:20) 仙の倉山荘$\mathfrak{B}_3$

4:00に起床し、1パーティは6:30に出発するが、2パーティは準備におくれ7:00に出発する。C.L、S.Lののろまに加え、キジ打ちに時間をとられる。1パーティがラッセルを先行し1500m付近で交代する。1580mのナガツル尾根の分岐でザックをおろし日白山をピストンする。このピストンで1年生のラッセル競争をする。山頂は、適度に広い所であったが早々に引き上げ、ザックを置いたところで休けいする。視界約500mになり、遠くに見える尾根をたよりに下山を開始する。ラッセルは腰から胸まであるが、下りのためあまり苦にならない。また天気も回復して青雲がみえてくる。尾根がゆるやかになりスピードが落ち、視界も落ちるが、タカマタギからのびるゆるやかな尾根や、仙の倉北尾根をたよりに高度を確認し、1250mの分岐を見つける。両側が切れた稜線から直角に左に曲がるようにして広い尾根に乗る。しばらくして狭くなり、ラッセルは太股くらい。南南東に行くと仙の倉谷におりて、雪崩の危険もあるので注意すべし、尾根分岐から約1:30くらいで、山荘手前の植林帯に入り、南に戻るようにして山荘に到着。輪かんをはいて約1mもぐる山荘の玄関をほり出して、中に入る。荷上げした酒やおでんで、無事下山を乾杯し、多いに飲んだ。

12月28日

$\mathfrak{B}_3$ (6:30)——(9:30) 土樽駅

朝4:00に起床するが二日酔気味、および山荘の掃除で少しおくれる。4名が荷上げしたスキーをつけ先行するが、深雪のため輪かんと速度はあまり変わらない。小松沢の橋の上に他パーティ3人がテントを張っており、日白山ピストンのようだった。そこからはラッセルの跡があり比較的楽であった。電通大山荘の少し手前から砂防堤におり、凍った湖の上をわたる。湖をわたってすぐに、少しの急登。何かの小屋の横を通り、上越線の線路のすぐ脇を通り土樽駅へ向かう。途中から工事中の関越自動車道の上におり、しばらく行って、途中から右にそれて土樽駅につく。電車の時間まで時間があるので、土樽山の家にてビール等飲みながら反省会を催す。

春山　上州武尊

昭和59年3月3日 ～ 3月4日

日　　程：3月3日　スキー場――前武尊――剣ケ峰――鞍部（テン場）
　　3月4日　（テン場）――家の串――中ノ岳――沖武尊山ピストン――――
　　――（テン場）――剣ケ峰――前武尊――スキー場

メンバー：C.L　豊島吉章　S.L　清水浩彰　装備　田村博之、藤井修一
　　気象・食料　村田英紀　医療・会計　佐々木正行

記録　3月3日

6:30　スキー場の駐車場で朝食をとり、出発の準備をし、出発する。スキー場の中を進み一番奥にある新しくできたリフトに沿って登る。

8:00　稜線に飛び出る。空は快晴であり、他の山々も美しい姿を見せる。ワッパをはき、交代で進む。雪はそれほど深くはないが疲れる。途中2ケ所ほど下山時にルートを失ないやすい所あり。ワンドを立てながら進む。

10:35　前武尊より剣ケ峰を見ると、いつもながら急に思う。比較的雪は安定しているが、雪は多く、例年よりも木がかなりうまり、白い壁といった感じである。ルートは左側にとるが、木にはあまりよりすぎない方が良い。途中より傾斜も増す。トップを行くS.Lのステップがたのもしい。急登を終えると通常三峰と呼んでいる峰であるが、下りは岩場になっている。トップは雪をはらい、足場を確かめ確かめ下りる。鎖のある所はゴボウで下りてしまう。同様に二峰も通過し、一峰はワッパをつけ西側を巻く。所々雪と木、岩との間に出来た空間に足を取られる。

13:30　一峰を過ぎ下りきった所を天場とする。かなりのんびり整地をし、ブロックをつむ。ここで藤井がべんじょ虫に任名される。テントを張っていると、山スキーのパーティーが通過してゆく。どうやら剣ケ峰はスキーでトラバースしてきたらしい。15:30ごろより天気が一時くずれ、小雪がちらつき、風も強まる。

3月4日

5:20　起床（起床は4時の予定だったのに…）

7:15　ピストンに出発。天気は昨日に引き続き快晴。昨夜降った新雪がうっすらとかぶっている。ワッパで出発。所々クラストぎみの所もあり、アイゼンの方が良いかな？と思われる所もあったが、ツメは雪をとらえているし、傾斜、距離等各情況より、危険はないため、沖武尊までワカンでとおす。途中、中ノ岳は稜線を歩いた。

8:20　頂上で休む。あまりにもあっけなく来てしまった。写真を写し、紅茶でも飲み、ひき返す。天場で大休止の後、テントをたたみ、パッキンがすみしだい出発する。(9:25)

10:30　来る時同様一峰は巻き、Ⅱ、Ⅲ峰は慎重に登るが、昨日通ったのに新雪でホールドがかくされている。アイゼンのにが手な者有り。又足の短い者有りでなかなか楽しく通過する。Ⅲ峰の下りはアイゼンをはいたままだった。鞍部でアイゼンをワカンにはきかえる。

11:35　前武尊よりはスキーのトレース(山スキー)がたくさんある。トントントンと自由にワッパで歩き回る。雪が深いため、シリセードもあまり調子良くいかぬようであった。主稜を右に見て小さなコブを越えるといよいよ今回の山行のメイン、スキー場の横断が始まる。ワッパをはき、大きなザックをかついだ6人はスキーヤーの羨望の眼差の中駐車場へ向かう。

13:10　行動終。

今回の山行について

行く前に人数が2名も減ったり、ルートが変ったりでゴタゴタが多く、一年生にはたいへん悪かったと思う。本来は宝台樹スキー場より沖武、前武を越えスキー場へ下山する予定だったのが、ピストンとなってしまった。内容的には大差はなかったのだが、ピストンということで少々だらけてしまった感が残念だった。又斉藤さんよりの、この水上一藤原湖の通行止という情報がなければ山に登らずして途中下山という状態になったと思えばゾッとする。

今回の山行に対してはあまりにも天候に恵まれすぎた。という一言につきると思う。又ラッセルも例年よりもずっと楽であり、本来の上州武尊の姿の一端も見ることはできなかったと思う。まちがっても初心者は、春の上州武尊ナンテ、などという気を持たないでほしい。

又一年生に対してはやはり総合的な山の力のなさが感じられた。今後積雪期、無雪期を問わず積極的な活動を期待する。そうでなければ、来年の春山S.Lは任せられないような気がする。又昨年と比べ、下級生との親睦が十分ではなかったような気がするのだが……。(これは個人的感想であるかも…)又個人的にも山行前のトレーニング等が不十分で自分自身にかなりあまさがあり、それもこの山行が少々だれた一つの要因となったような気がする。今回の山行の総括としては、かなりつみ残したことが多い山行になったと思う。今後のお互いの努力により山行の充実を計りたい。

又いろいろな激励、御支援をいただいた諸先輩、後輩のみなさまに心から感謝致します。

尾　瀬　沼

期　　間：1984年3月31日～4月1日
メンバー：高橋明弘（教ＯＢ）、豊島吉章、伊藤信吉

3月31日
桐生――大清水（7:30）――（10:00）長蔵小屋（10:30）――燧ピストン――長蔵小屋（14:20）

沼田手前のドライブインで高橋さんと待ち合わせをし、高橋号で大清水へ向う。大清水よりシールをつけて尾瀬沼へ向う。冬路沢をへて三平峠へ。雪もしまっていて快適であった。三平峠でシールをとり、東電小屋へ向う。長蔵小屋の冬期小屋に荷物をおき、燧ピストンに向う。途中、長英新道にて、２人パーティを追い抜く。頂では、２人の女性パーティがいた。高橋さんは学校のビデオを持ってきており、周囲の山を写している様子。燧からは快調に下る。

4月1日
長蔵小屋（6:30）――皿伏山（8:40）――荷鞍山（10:20）――大清水（11:40）

小屋を出、沼を横断し、皿伏山へ向う。のっぺりとした林の中を赤ペンキを目印に進む。皿伏山でシールをはずし、白尾山へ向う。白尾山の登りものっぺりしているが所々深い。白尾山より荷鞍への滑りは雪がもこもこのため嫌らしい。荷鞍への登りはかなり固いバーンで、時々気を抜くとスキーのエッヂをとられる。荷鞍山でシールをはずし、最後の滑降にそなえる。南東にのびる尾根をゆく。所々東側を巻きながら滑る。雪質よく、ターンが面白い様に決まり最高であった。

白馬岳山スキー

日　　程：1984年5月4日～5月5日
メンバー：C.L・豊島吉章（電子３）　S.L・坂本　敦（応化３）　高橋明弘（教育58卒）
　　飯塚宣男（情報３）

5月4日（　）晴
前橋――猿倉荘――惣平――村営頂上宿舎

荒牧部室で2:00高橋氏と合流、豊島号で一路白馬へ。明け方近く、148号線を走っていると、左手に白馬がドーンと見え始める。カッコいい。松電バス白馬線道路は、除雪してあったが中山平付近で、なだれた大雪塊に道をふさがれたため付近の駐車帯に車をとめ7:

30出発。猿倉荘着を過ぎ、本格的に登りが始まったが、雪が腐りぎみでシールがきかなそうなためツボ足で登る。連休の白馬岳ということで入山者は結構多い、半数はスキーを担いでいる。睡眠不足と普段の放蕩生活のため御殿場あたりからすでに疲れを感じ小休止ごとに眠ってしまう。豊島氏も結局一人で運転してきたため眠たそう。気温が上がってきたためか両側の谷で小規模な雪崩を何度か見る。途中ヘリスキー（白馬山荘付近までヘリコプターで上げてくれるらしい）で下ってきた集団が、これみよがしに我々の横で休む。疎ましい。12:30フラフラになって惣平に着いたところで昼食。食べ終わったとたんみんなで40分ほど寝こんでしまった。残りの行程も辛くはあったが、惰性でどうにか3:50村営頂上宿舎着。幕営、夕食後、ナイトキャップもそこそこに明日の高度差1700mの大滑降を楽しみに寝る。

5月5日（　）曇り

村営頂上宿舎――白馬山頂――猿倉荘――駐車地点

パッキングをすましておいて、6:00頂上へのピストンへ向かう。アイスバーンになっているのでピッケル、アイゼンを使う。6:40頂上着。展望を期待したが、付近のピークが見える程度、やや残念。山荘までは、岩の露出が多くカリカリのバーンなので閉口。頂上宿舎を7:30下りはじめる。ここからが本山行のハイライト、気合を入れて滑りだす。小雪渓下部で撮影会。大雪渓上部までは、良好な雪質。中部からガスがかかる。両側の谷からのなだれたブロックでひどいデブりのためターンがままならない。その地帯をぬけたあたりから良質のザラメ雪でゲレンデスキーのようにスキーが操れた。猿倉荘を過ぎ、雪が途切れるまで道路をスキーで下る。11:30豊島スカイライン着。帰路、特に混雑もなく無事に帰宅。

車での夜行強行軍とグジャグジャの雪で、登りが信じられないほどきつく、登りを楽しむ事がまったくできなかった。下りも一部は悪い雪質であったのが残念であったが、なんと言っても1700mの滑降は壮快であった。　（記録：飯塚）

月山・鳥海山・山スキー

日　　程：1984年6月6日～7日

メンバー：山中　卓、田村博之、伊藤信吉、豊島吉章

6月6日

月山駐車場（9:00）――（11:20）月山頂上（13:30）――（14:30）駐車場

夜、車で桐生発。福島、山形をへて月山スキー場へ。桐生からは高速を使う。月山は、

6月だというのに、雪が多く、付近の山々の稜線は真白である。国道112号ぞいにも所々雪があり驚ろかされる。スキー場で用意をし、リフトを2本乗りついで、スキー場の上へ。そこから月山の頂上目指して登る。頂上付近は一部岩がついている。頂上の奥の大雪城の上部を4～5本滑っていい気になっていると子供の集団が登ってきて、いささか興醒めである。頂上でゆっくりしたあとは、車の方へ向う。下降路は雪がややかたく、くせがあり、スキー場はこぶがひどくこちらも興醒めであった。車で次の目的地、鳥海山へ。

6月7日

祓川ヒッテ（8:00）――（11:40）鳥海山山頂（12:20）――（13:20）祓川ヒッテ

月山のあとは鳥海山へ向う。途中、酒田で買い物をしたりして、ゆっくりし、道に迷ったりしながら、祓川ヒッテの駐車場に着いた時は真暗だった。駐車場の所では部分的に3m位の雪があるところもあり、東北の雪の多さに驚く。どこにテントを張るか考えた末、駐車場に張る。夜中、田舎の兄ちゃん、姉ちゃんが車で来て、東北弁でしゃべりつつ、記念撮影をしていて少々うるさかった。

ゆっくりして、テントをたたんでから出発する。すでに、単独のスキーヤーが登り出している。御田、舎利坂をへて七高山（2229m）まで、少々頑張って2Pであった。頂上で大休止。途中で写真をとったりしながら、ルンルン下る。この2日間天気が大変よかったので4人とも顔がまっ黒である。

又、例によって帰りの車で……ある人が「おい、田村、この車100km越えてもチリンチリンと鳴らないぞ。」田村：「この車は古いから120kmでないと鳴らないんですよ。」その後、車は常にチリンチリンと鳴り続け、得意のシグナルグランプリを併用し、鶴岡――村上間は、規定の80Kオーバーだった。尚、彼は数々の前科の為、あと2点で免停、6点で免取であり、私はなすすべもなく、後席で震えていたのは、言うまでもない。

日原川己ノ戸谷・鷹ノ巣谷

日　　程：1984年8月8日

メンバー：伊藤信吉、豊島吉章

日原川己、戸谷出合（6:20）――（9:20）山道――（10:30）林道

鷹ノ巣谷（12:00）――（13:40）大滝――（14:40）出合

前日より入山し、日原川の林道の中の適当な所にテントを張り泊まる。林道より己ノ戸沢出合に下り、わらじを付ける。F1は巻き、ワサビ田を見送り、F2、F3を越し、ルート図通り、右手へ巻き上がるが、巻きすぎて降り口がわからないため、ザイルを木にかけ、懸垂下降により降りる。あとは難所なく、山道にゆきあたり、それより先は平凡らしいので、山道を下山。

予定の己ノ戸谷が早く終ったのでついでに鷹ノ巣谷を登る。鷹ノ巣谷は小さな沢でガイドブックに従って、大滝より引き返す。どちらも1級台で、思ったより楽であった。

ダイコンオロシ沢

日　　程：1984年8月20日
メンバー：藤井、田村（健）

出合（2:00）――シッケイの頭（1:30）――イイ沢出合

1年時の小屋番があまりにも暇だったので、「今年は沢登りでも」ということで入荘。2日目、小屋の住人と化した松井君を山荘に残して、沢登り初体験の田村君を連立って、小屋を出る。ケルンを通りこして、出合下手の左岸が赤くガレているのを目印に、水が流れているところをさがし、そこから沢に入る。だるいブッシュを通過してやっとF1にたどりつく。田村君は初めはバランスが悪かったが、F4あたりまでくると体が慣れてきたみたいであった。F6を通過後、沢は二分に右にルートをとる。大きなスラブを通過後、10分ぐらいやぶをこいでシッケイの頭へ。ここはお昼寝にもってこいの場所である。ビールがあれば最高である。下降路はイイ沢を使った。

大菩薩（丹波川・小室川谷）

日　　程：1984年8月24日
メンバー：田村博之、豊島吉章

泉水川出合（6:00）――小室川出合（6:30）――（11:30）稜線――（15:00）駐車場

前夜発で、泉水川出合にテントを張る。小室川出合で早々にワラジをつけ、2～3の小滝を越え歩いていると、釣りをしている人におこられる。途中1回休み、30mナメ滝となる最上部、ホールドがわからないので一応ザイルを出すが、行ってみると問題なく、ザイルの必要はないであろう。（ルートは右側、水線）その後も小滝を越え、稜線へ。大休止後、丸山峠をへて下山。尚、この時、泉水川ぞいの林道工事の為、泉水川出合までしか車は、は入れなかった。

仙ノ倉（ダイコンオロシ・西ゼン）

日　　程：1984年8月28日
メンバー：豊島吉章、古庄勝己、赤塚　靖

小屋発（8:40）――（10:00）ダイコンオロシ出合――（11:30）稜線――（12:30）西ゼン出合（13:00）――（15:00）稜線――（16:40）小屋

夜半、小屋着、朝寝坊し、朝食をとり出発。ダイコンオロシ沢出合よりワラジをつけるが、ダイコンオロシ沢は20～30分登ると水が消え、ヤブコギとなる。水が現われるとすぐF1であるが、小滝であり、水量も少ない。難なく次々と越えてゆき、沢が右に曲がりだすともう源頭である。うすい踏み跡をたどりイイ沢の河原へ。小休後イイ沢を下降するが始めはクマササ中を滑る様に、途中から伏流した狭い溝を下る。沢が少し広まるともう仙ノ倉の谷底である。西ゼン出合で小休し、最初のスラブで遊ぶ。P.M 1:00頃溯行開始。最初のスラブは、水流のすぐ右側を行く。途中10～20Mクラスの滝の手前で雪のブロックがあった。その滝は左から上へ越し、第一スラブの始まる手前の滝は右すみを登り、第一スラブは、だいたい水流の左側、途中、水流を越え、左手のふくらんだスラブ上を40mで、第一スラブ出口の滝を越え少し行くと、もう第2スラブである。第2スラブは、階段状の滑滝である。途中にある滝で小休止。その後、左手の草付ぎみにルートをとり、ちょうどスラブの出口へ向う。第2スラブから先はもう2～3の小滝しかなく、奥の二俣を右へ向うと丁度、池糖の所へ飛び出す。あとは平標新道を下るのみ。

登　川　米　子　沢

日　　時：1984年8月29日
メンバー：豊島、藤井、赤塚、古庄
コ　ー　ス
タ　イ　ム：駐車場（7:20）――奥ノ二俣（10:16）――巻機山――駐車場

昨晩、先輩の友達が数人来荘し夜遅くまで騒いでいたせいか、寝不足で頭が痛い、「天気はいいんだが体がいまひとつ…。」とつぶやきながら仙ノ倉山荘を出発する。清水部落の駐車場で登山者カードに記入し出発する。豊島さんがウサギの様にピョンピョンと進んで行く。はっきり言って人間モトクロッサーである。ナメ沢の分岐後の上部ゴルジュ帯で左岸に高巻きしすぎてしまい、下降に少々時間をくう。変なふみ跡に惑わされない事が重要だ。態勢を整えまたガンガン進んでいく。2条20m更に12mを越えると数百mのナメになる。大へん気持ちのよい素晴らしいナメで、フリクションを効かせながら登る。奥ノ二俣で昼食にした。あまりに気持ちがよいのでついうとうととしてしまう。山上の楽園を思

わせる巻機山頂付近の草原のふみ跡に導かれ、林道に出る。女性的山様の巻機に我々はすっかりとけこんでしまい、しばし時を忘れる。巻機山ピストン後井戸尾根をかっ飛んでいった。　（記　藤井）

冬山本山行（甲斐駒～仙丈ケ岳）

日　　程：12月26日～12月31日

メンバー：C.L　松井伸一郎（医２）　S.L　小池寛喜（工３）　田村芳美（医２）
角田喜久雄（教３）　田村健二（工２）　藤井修一（工２）
村田英紀（医進２）　長崎知之（教ＯＢ）

12月26日

前橋駅 ═ 高崎駅 ═ 新宿駅 ═

盛大でもない見送りの人達を後にして、P.M 7:28前橋駅を出発した。電車の中で、さし入れを食べていると、早くもアルコールがM君の中枢神経に作用し彼は深い睡眠に落ちていった。赤羽線に乗りかえるために赤羽で降りると、とたんにM君の胃の中にあったさし入れが、ホームを染めていった。当然、M君には禁酒令と厳重なる注意が与えられた。我々はこと赤羽駅でMⅡの田村君のおとうさんに出くわした。顔も性格も彼そっくりで始終ニコニコ顔でいらっしゃった。新宿を23:20に出発し、辰野で約１時間の待ち合わせとなる。

12月27日

═ 伊那北駅 5:14 ── 戸台 6:35 ── 丹渓山荘 9:05 ── 北沢長衛小屋 11:30 ⛺

伊那北駅に5:14到着。ここで登山届の提出を求められ持ってきたパンフを渡す。ここで雪の状態をきくと北沢峠でひざくらいまでと知らされる。6:35戸台出発。快晴。戸台川に沿って河原を上流へと向かう。積雪ははじめ５cmほどであったが、丹渓山荘に着くころには約15cmほどになる。9:05丹渓山荘着、ここから登りが急になり、トレースがしっかりしているので快調に進む。11:30に今月のテン場である北沢長衛小屋に到着。他にテントは７つほどであった。水は、北沢の氷の割れ間からとる。“偶然とはおそろしい”というが、何と我々の隣のは宇大のテントであった。仙丈ケ岳をながめながら、酒盛りを始める。ここでM君は宇大の仲本君に大いに気に入られ、昨日のことはケロッと忘れ今日も元気に飲む。私はテントキーパーがいても悪くないと思い黙認することにした。夕食はペミカンのカレーであるが、田村（健）が悪のりしてニンニクをどんぶり一杯分も入れたので全くカレーの味がしない。バカヤローと心の中で叫びつつ額の汗をぬぐいながら一生懸命食べる。20:30就寝。

12月28日

天場6:50——五合目8:30——11:00——天場13:20

4:30起床。小雪がちらついている。朝食をとり6:50天場発。8:30五合目着。雪がだんだん本降りとなってきたのでツェルトを張って様子をみることにする。風もだいぶ強い。11:00まで待って天気が回復しない場合は下山することに決める。11:00になったが天気は変わらない。一応樹林限界まで行ってみることにした。途中で引き返してきたパーティーに会う。樹林限界に出ると視界は50mくらいで、風もかなり強いので先に行くのを諦める。「下山!!」と大声で叫ぶと反抗の意を表明した者が1人いた。ピッケルを握る手に力がはいったが、堪忍袋の緒を結び直してしかりとばすだけにした。下山を開始し、13:20天場着。いつもの話題で盛り上がる。夕食は予備食のカラーメンにする。20:30就寝。

12月29日

天場6:25——大滝の頭8:55——仙丈ケ岳10:00——大滝の頭11:30——天場12:20

4:30起床。晴れ。朝食は予備食のお茶づけとする。6:25出発。8:55大滝の頭着。駒にはガスがかかっているが、まずまずの天気である。小仙丈手前でアイゼンをつける。樹林限界を越えたところから適当に赤旗を立てていく。特に危険を感じる所もなく、10:00山頂着。到着と同時にガスが出てきて展望が無くなる。写真をとり、お茶を飲んでガスにまかれることを恐れて早めに下山を開始する。11:30大滝の頭。樹林帯に入ったところでアイゼンをはずし、グリセードで下っていく。天場12:20着。テントの数がどんどん増えてきている。小屋の煙突からは煙が出ていて、いやな予感がしたが、予想どうりに今日はテン場代を払わされた。今回の山行で夕食がおいしいと感じたのは、今日のケンチン汁だけであった。(あとのペミカンは、ニンニクの味がすべてを超越していた。)20:30就寝。

12月30日

天場6:22——仙水峠7:30——六万石8:40——甲斐駒ケ岳9:30——六方石10:37——仙水峠11:50——北沢長衛小屋13:30——丹渓山荘14:40——ダム15:50——戸台の少し手前16:30

4:30起床。いよいよ甲斐駒である。天気はくもり。朝食のかまめしを食べ6:22出発。仙水峠まで何度か川を渡りながら進む。小さいが橋がかかっている。仙水峠7:03着。風が強い。積雪は40cmほどである。駒津峰までは樹林帯であるが、ここもしっかりトレースがついている。今回は念のためワカンをもってきたが、この時期の甲斐駒、仙丈は入山者が多く、新雪の翌日にトップで行くのでない限り、ワカンは不要であると断言してさしつかえない。何とこの登りの途中、駒津峰という名前を知らない論外の人間がいたのが発覚した。コース検討はしっかりやってきてほしいものである。駒津峰から六方石まではガイドブックによると今回の山行で一番危険な個所であったが、トレースもしっかりしていてそれほど危険な感じはしなかった。六方石に8:40着。風をよけながら休憩する。ここからの

最後の登りは急ではあるが大きな岩がたくさんあり、一気に滑落するという場所ではない。9:30山頂着。寒暖計は－22℃を指している。記念撮影をし、しばらく展望を楽しむ。天気はどんどん良くなっていく。下山は、来た道をゆっくり下る。あとから続々と登ってくる。10:37六方石。ここまでの下りはやはり慎重を期すべきだ。空は快晴となってきた。駒津峰から樹林帯に入るとひと安心である。仙水峠11:50着。風が強いのですぐ下る。天場13:30着、すぐにテントを徹収して下山する。天場にはテント数が増え、我々が下山するころには40ぐらいであった。14:40丹渓山荘戸台のバス停の30分ほど手前の河原でテントをはる。夕食をとり、最後の夜を楽む。

12月31日

天場6:40――戸台山荘7:10 ▬▬ 前橋駅

4:30起床、6:40発。ゆっくりと河原を戸台に向って歩く。正月を山をすごそうという人々がたくさん入山してくる。途中何度もふり返ってみた。甲斐駒ケ岳が美しかった。

≪反省≫

――トレーニング山行について――

毎年この時期は、コンパが多いためトレーニング山行はコンパの翌日が多い。毎年同じことの繰り返しで、コンパで盛り上がりすぎて翌日の山行ではつらい思いをする。特に、桶木沢のアイゼントレーニングでは猛烈な二日酔で指示を与えることができずルートファインデングもS.Lなどにまかせきりで、そのためルートをあやまり、危ない目にあった。大いに反省して、以後は、極力酒を慎んだ。以後のトレーニングも、アイゼンワークを中心に行なったが、アイゼンをひっかけ何度もころんだ者がいた。特に八ケ岳でのトレ山はヒヤッとさせられた。こういう人間を本山行につれていくかどうかは十分考慮すべきである。また、忘れ物が目立つ人がいて、スパッツなどを持ってこなかったのには閉口した。気を引きしめてもらいたいものである。

――本山行について――

今年の冬山は一年生の希望者が無く、したがって上級生だけのパーティ編成となった。そのため気がゆるんだせいか、朝の出発時間が遅く記録を見ればわかるが、ベースキャンプ方式であるにもかかわらず、すべて2時間以上かかってしまった。その他は行き帰りの電車の中を除けば、まあまあであったと思う。また本文にも書いたが、ワカンはこの時期の、このコースに限って、不要であると思う。

白　毛　門　山

時　　期：1985年1月9日
メンバー：小池寛喜、村田英紀、伊藤倫恵子

春山のトレーニング目的外として計画し、当初は村田と2人きりの予定であったが、その朝になって伊藤さんが加わり、さみしい2人を脱したが、山行の承認についてためらいを感じつつ同行を認める。

タイム：土合7:55——1500m付近12:40（ひき返す）——土合3:10

車で土合へ向い、朝やけの白毛門山頂を見ながら3人で喜ぶ。移動性高気圧の快晴。正月の野沢の悪夢が再びかと恐れていたが、前日から天気は回復していたらしく雪はかなりしまっていた。登山届を作ってきたが、どこへ提出してよいやら……提出しなかった。トレースを快調にたどってゆくが、900m手前の大木が横たわっている所からラッセルとなり、ペースもぐっと落ちてしまう。快晴に雪はキラキラ輝くが、どんどんと重くなっていき、膝上くらいのラッセルも辛いものになってゆく。山頂手前の雪庇が大きく、また、時間的にも遅くなってしまったため1500m付近で先行を止める。昼休みを十分すぎるほどとり、快晴の山々を楽しませてもらうが、巻積雲が現われはじめ天気が崩れてくる様子を見せる。しかしこれは回復してしまい、ちと判断が甘かった。上越の冬、天気に恵まれた今日の山行は、最高のものであった。あの苦しんだ山行から2年、リーダーで登る今となって、色々な思いが巡る感概深い一日を送ったことよ。

アイス・クライミング

日　　時：1985年1月19日
メンバー：豊島吉章、小池寛喜

足尾・松木川黒沢

豊島氏との、初めての氷登り。桐生山岳会からアイスバイル・ピッケルを借り、ボクの軽自動車で足尾へ。軽とて、四輪スノースパイクは強味である。車を止めてから沢出合までは約40分。砂防ダム手前の黒沢は、明るく気持ちのよい美しい氷の色をしている。細部は、クライミング・ジャーナル社出版の“アイスクライミング・ガイド”を参照されたい。また、岩と雪、岳人等を資料するとよいだろう。今回の黒沢は、その明るさもあり人気が高く、クライマーの多いこと。氷もブームになっていると実感。はじめてでも、リーダー

により楽しめる。快適な一日だった。

2月2日

裏妙義・小山川ホトケ沢

ボクの希望からホトケ沢に決定。早朝、前橋にいる豊島氏を起こして出発、さぶい！小山川は水量も少なく丸木橋があるので容易に渡れる。沢の氷は落ち葉を沢山含んでおりお世辞にも美しいとは言えない。しかし、氷は割としっかりしており気持ちよいクライミングが行える。下部はすべて直登、ナメ30×40mは上段を夏同様巻き、他に10m垂直も左岸をいく。このころ後続パーティがやってきて、この10m垂直をアタック。我々はしばらく見物、あまり氷の状態はよくなさそう。彼らをあとに我々らは先へ。最後のナメはなかなかの傾斜で、けり込まないと苦しい。ザイルを出すほどの難度ではなく、ここはアイゼンと自分の足を信用するしかない。すべったらOUTだ、要注意。突きあたりは、左から入る5m滝をいく。ここは短かいが、下部が長いナメなのでザイルを組む。ツメは、氷った泥の薄いヤブで、下山路側の稜線に出た。下降も泥が氷っているためアイゼンを付けたままいくが、歯がボロボロになりそう。下部では道を間違え落葉の中へズドーン。首までもぐり、ホコリだらけとなってしまった。松木川沿いの氷と較べるとうす汚なくヤブっぽいが、稜線にでる気持ちは譲れない。樹木が多いのでランニングビレーもとりやすいが上部のナメには注意が必要だ。

2月11日

足尾・松木川ウメコバ沢

連休を利用して2本の予定が、天気の関係からウメコバ沢のみとなる。10日には、寝ぼうして日光白根もパスしてしまった。ウメコバ沢の出合まではかなり遠く、砂防ダムを3つほど越えてゆかねばならない。この日はやたらと風が強く、沢ぞいの一部では立っていられないほど。ボクは体調すぐれず核心のF6下でDOWN、気合が出ずそこから帰る。下部には連続して滝があるが、F6手前のゴーロはかなり長い。この沢は、出合までも長く、ガッツを込めて行かないと登れないナ。

2月19日

吾妻渓谷・栃洞ノ滝・他

2月20日

棒名・船尾滝下右岸の滝・霧積ダムサイト

ガイドブックで調べおのおのへ行くが、霧積はいただけなかった。ダム管理者がやってきて、帰りなさいの一言。引き返し他へ行く。吾妻渓谷は沢山の短かい氷が川の両岸、主に右岸に多く、選べる。不動大滝60mも見に行くが、ここは難度が高そう。

南八ケ岳

日　　程：1985年1月24、25日
メンバー：C.L・小池　S.L・藤井　豊島　松井（医）

1月24日
桐生（午後発）═══美濃戸
午後桐生を出発し、美濃戸口に着いた時は、完全に夜になってしまった。車のライトをつけ、駐車場にテントを張る。夕食後酒を飲んでいたらテントの中に、座敷ブタの様なネコが入ってきた。

1月25日
美濃戸口──行者小屋──（地蔵尾根）──横岳──硫黄岳──赤岳鉱泉──美濃戸口═══前橋═══桐生
AM5:00ごろヘッドライトをつけて出発する。行者小屋までの道は積雪があまりなく、沈んでもくるぶしぐらいであった。地蔵尾根を経て稜線に出ると阿弥陀がよく見える。風が強い。小休止後、横岳に向う。横岳通過は、かなりしっかりしたアイゼン歩行が要求される。石室通過後、硫黄岳までの稜線はものすごい風が吹いていた。時々、吹き飛ばされそうな風に、体がふらつく。強風のため硫黄岳に着くとすぐに下山し始める。ガシガシと歩き、アッという間に赤岳鉱泉を通過し、小松山荘に正午をちょっと過ぎたころに着いた。スピーディーな山行であった。

春山（馬蹄）

日　　程：1985年2月27日～3月4日
メンバー：C.L・小池　寛喜（工3）　　S.L・角田　喜久雄（教3）
・松井　伸一郎（医2）　　田村　芳美（医2）
豊島　吉章（工3）　　藤井　修一（工2）

2月27日

練習山行からもどりあわただしく装備点検をすませ天候のよくなる事を祈る。

2月28日

夕方、ぽつぽつと集まってきたメンバーの顔には、それぞれ緊張が見られる。多大なる差し入れに心をなごませながら夜の列車へと乗り込む。いつもながら皆の気持ちには頭が下がる。土合着PM　　。軽量化の為、パッキングを考え、消化できるものはできるだけ食べることにした。それぞれ手の混んでいて楽しいものばかりである。平日の為、他の登山者もいない。待合室で仮眠をとる。

3月1日

早朝、土合駅出発。雪が我々を圧倒してくるような気分になる。パンフを登山センターに提出し、いざ出発となる。湿った春の雪は、私達の進行で防いでいる。天気も次第にくずれてきたのを感じた。間もなく吹雪となる。その頃、我々は、ラクダの背付近に到着する。西黒尾根は、北からの風の為、南側に雪庇があるだろうと予想した。その為、無視界中を右よりに歩いた。T氏が先頭をきっている時に、トレースからFの雪が「ズズッ」と動いたかと「ワッ」という間に表層雪崩が発生したのである。30㎝程だったので誰も危険を感じる物ではなかったが、それから先行することほんの少しの所で再びひき起こしてしまったのである。今度のは50㎝程のもので中間を歩いていたF君は足をすくわれそうになったと言っていた。ピッケルをついたほんの一瞬であった。戸惑いながらも先行する我々は、コルからの広い斜面をWhite outの中ただ雪庇側に寄らないよう右も左もわからず深いラッセルを続けていた。ひとかかえもあるかと思われる赤旗がここで大いに利用することができた。ガスが少し晴れる頃には、ザンゲ岩の斜面下まで達していたが、ガスの合間に見える大きな雪庇に戸惑った。しかも先程の雪崩の右斜面を切ることを恐れていた。ここを越えれば山頂はもう一息であるという気持ちからどうしても先に進みたかったのであるが、大きな雪庇、層状の雪積、生暖かい風が我々を躊躇させた。この地点で多くの時間を費したが、結局、本日は先行不可能と判断しひき帰すことにした。結果的には樹林帯に幕営することが必要である。天候の予想が甘かったと言えるだろう。

PM12:20　樹林帯に入った地点

視界が回復している為、復路はより安全なルートをとる。今までに雪崩を発生させている地点は、稜線をはずしすぎていることがよくわかった。樹林での暮常を考えるか、湿雪による全身のぬれと、天気予報による明日の悪天などを考慮し、登山センターへ引き返し、体力の温存に務めることにする。

PM3:30　登山センター

ガスが晴れると、山頂も見え、先に進めたかったくやしさがこみ上げてくる。稜上では風は吹いていたことには吹いていたが、全く寒くなく、手袋もいらないくらいに暖かくて、

気味が悪かった。下へ下れば下るほど雪は腐っており、まるでかき氷の山を登っている気分だ。

3月2日（土）　◎時々①

起床AM6:30　　センター出発AM8:20

本日は、ほとんど沈殿の予定であった為、起床はこのあり様であった。夜中、かなり多数のパーティが登山センターを訪れ、薄暗い中、出発していった。登山センターへの届出書から、横浜、他多数が西黒へ入っている様子なので、そのトレースを期待して出発。朝食は、予備のインスタントみそ汁にもちを入れるだけの簡単なものの為力がでるのかどうか？

AM11:20　1650m付近

3ピッチでここまで上がってしまう。トレースがしっかりしていたので、つぼ足で行く。途中、3人と6人の2パーティを抜いて行く。遠望がきき、武能手前ロッ小屋夫の雪庇が大きく見える。

横浜らしきパーティが、昨日我々の引き返した付近にいるのを確認した。昨日、引き返した所は、トレースをたどって通過。先行パーティは、うまい所を歩ていると感心する。ふり返ると雪庇の先端は、今にも落ちそうだった。（帰りにはすでに落ちていた。）

AM12:20　肩の小屋着

山頂付近は、多少クラストしている。小屋は入口が開いたままで、すぐに入ることができたが、中にも雪が吹き込んでいて冷込みそうである。中にテントをはる。横浜とは、肩の斜面で下ってくる所で会う。彼らは、雪洞を掘り始めた様である。テントをはった後、下見に行く。角田、豊島、藤井に先行してもらい赤旗を残してきてくれるように頼む。3人は一ノ倉ののぞきまで行っていた。松井は小屋に残り、田村、小池は後を追う。雪は、クラストしており歩きやすかった。また、雪が少なく、西側の斜面には、草木がのぞいている。所々、足首ほどのラッセルがあるが気にならない。一ノ倉に限っては、雪庇と稜の境界がはっきりしているので迷い込むことはないと思う。

雲はますます低くなってきているが、風はほとんどない。駒丹後の方向には、陽がさしている。万太郎谷はガスでうまっており、大きな湖の様である。夜の食事はペミカンの豚汁。天気図からは明日の晴天は望めそうにない。

3月3日（日）　⊛

AM3:30　　起床

8時過ぎまで様子を見るが回復の様子なし。沈殿を決定する。冬山からメンバーに変わりがないので話題も少なくなってしまい、算数の問題をやって時間をつぶす。

3月4日（月）　⊛のち○

AM 3:30　　起床

外へ出て見るが視界は少ない。様子を見ることにする。天気予報では、ほどほどの回復の後、明日以降再び崩れるとのこと。4日朝に進退決定を下すということから、ほぼ西黒下降は決定したようなものとなる。9時の気象をとり、その間に何名か下降路を見に行くことに決定。小池、豊島で赤旗を立ててくるが引き返してくる時には、すでに空は青くなりはじめていた。横浜の下った新しいトレースもあった。すぐ準備し下山開始。

AM 10:30　肩の小屋発

写真をパカパカとり快晴を恨みながら下山。

AM 12:00　登山センター着

土合駅PM 3:07の列車で前橋へもどる。

春　山　（上州武尊山）

日　　程：1985年3月9～11日

メンバー：C.L・小池　S.L・藤井　野口　原（医進1）　関本（医短1）　豊島、市原

3月9日　●のち◎

前橋═══水上──宝台樹スキー場──手小沢避難小屋⛷1

前橋駅（AM 6:30）集合。H君寝坊で出発が遅れる（AM 7:37）。水上着（AM 8:55）バスがないのでタクシーにする。タクシーは宝台樹スキー場まで入ってもらった。雨のため出発をためらいながらロッジで休憩。小雨に変わったので出発（AM10:40）。（AM 12:00）途中1ピッチとって林道終点の先。スキーのトレースが多い。雪はしまっており、ラッセルなし。（PM1:20）須原尾根に上った地点。ラッセルは足首から深くてひざ。輪かんなし。もぐる者もあり。（PM2:10）手小屋沢避難小屋に着く。雪は少なくかつしまっていてサッサと歩けた。天場すぐ手前でH君左足をつらせた。小屋は入口がほってあった。教育OB高橋氏がPM 4:30ごろ合流し楽しく過ごした。夕食はペミカンでケンチン汁である。

3月10日　⊛のち○

⛷1──沖武尊山──家ノ串──剣ケ峰を越えた鞍部⛷2

AM 6:20出発。輪かんなしでスタート。ラッセルは深くてもひざ程度。冬型のためか小雪がちらつき稜線上の様子を知らせる。（AM 7:30）鎖場。アイゼンをつけ稜線の歩行にそなえる。この鎖場は難なく通過。ほとんど問題にならない。（AM 8:30）沖武尊山頂。肩状になった所へ上ってから山頂まで風が強く、足もとがふらつく。OBT氏はスキーを

はずしてきた。体が冷えるので早々に先へ進む。T氏はここから引き返すとのこと。（AM8:50）山頂を下りきった稜線下。風が強く雪を含んでいるのでツェルトを出して休む。冬型の影響がまだ残りいまひとつさえない天気である。（AM9:50）家ノ串を越えた鞍部。中ノ岳は風当りが強そうなので右斜面をトラバースする。雪は状態がよかったため心配なし。（AM11:15）剣ケ峰を越えた鞍部。手前の岩峰は右側を巻く。雪質が悪くもぐってしまい歩きずらい。残りは直登。風は弱くなってきていたため安心である。天気は回復していき快晴となる。テントをはった後、夕食まで各自、自由に行動する。昼寝をする者、雪洞を作る者、イグルーで便所を作る者など、さまざまである。夕食は㊀カレーであった。

3月11日 ㊏

S_2——前武尊山——オリンピアスキー場——沼田═══前橋

出発（AM6:20）。すぐ前武尊に登りあげ、写真をとって出る。尾根を左へはずす地点を間違え、一度登り返す。スキーのトレースが多い。再び広尾根に乗る地点をとばしてしまい天狗岩への尾根に乗ってしまうが、スキー場への明確な尾根があったため、それを利用。結果的には早かった様子。（AM7:40）前武尊スキー場。雪で視界悪い。バスが無いためタクシーで沼田へ。

乗鞍高原

日　　程：1985年3月7日

メンバー：山中　卓、豊島吉章、飯塚宣男、伊藤信吉、高橋好幸

スキー場上部（10:00）——（14:00）2600m付近（14:20）——（16:40）スキー場上部

夜、車で桐生を出るが、松本で朝食、昼朝を買い、朝のラッシュに巻き込まれ、道に迷ったりして時間をロスしてしまった。スキー場で時計を見て、頂上までのピストンは少々苦しいなと思いつつ鳥居尾根へ伸びる2本のリフトをへて尾根にとりつく。リフトより10分も登ると、雪に埋まった鳥居があった。乗鞍の頂はガスに隠れている。鳥居尾根は、軽いアップ、ダウンがあるが、雪がしまっており赤布もあり、快適で、約一時間強で林道へ出る。所々林道の上や林の中など思い思いに登ってゆくと、冷泉小屋である。冷泉小屋で2度目の小休ののちちょっと登ると、位ケ原山荘であり、位ケ原山荘より上は樹がうすくなり、2～30分登ると、樹林帯を出た様である。その頃より風が強くなり、視界もきかなくなり、横なぐりの雪が顔にあたり痛い。ルートもはっきりしなくなり、2600m付近で小休ののち下降に移る。途中、山中さんがピッケルを落とし、探しに戻る。すぐ見つかる。登ってきたとおり下降。スキー場に下りた時には、5:00（PM）を過ぎていた。

平ケ岳・山スキー

日　　程：1985年3月25日～26日
メンバー：山中　卓、豊島吉章、伊藤信吉、飯塚宣男、伊藤大介

3月25日
山ノ鼻(6:40)――(9:30)大白沢山の背の天場(10:00)――(12:00)平ケ岳
――(14:00)天場

今日より、2partyに分かれ、我々は平ケ岳ピストンに向う。朝食後、皆に見送られて出発。途中、猫又川を2～3回渡る。猫又川の右俣と左俣の間の尾根をゆく。数日前のスキーのトレースがあり、所々木に赤ペンキのマークがあり、ルートはわかり易い。途中一人のシールが切れ、これを直す。又、途中で一部氷化している所があったが、問題なく通過する。大白沢山は、南面は岩が出ているので、東側を回り込む様にして背へ。そこに、天場の跡があり、整地してあるのでそのまま使わせてもらう。テントを張り、平ピストンに向う。大白沢山は北側を、1920は東側をそれぞれ巻き、白沢山へ向う。白沢山で、2度目の昼食をとり、平ケ岳へ向う。雲少なく、天気良好。平ケ岳の最後はだらだらとした長い登り。平ケ岳へ来る時は常にシールをつけたままで来た。頂上で写真を撮り下降にうつる。平ケ岳、大沢山の下りでシールをはずす。天場では、誰か(約一名)が日本酒を沸騰させてしまった。

3月26日　●　沈澱

朝より雨、気温は高い。1日中、ゴロゴロしながら過す。PM3:00過ぎには、雨があがり16:00には、晴れる。

3月27日
天場(7:00)――(8:10)尾瀬ケ原――(10:00)鳩待峠――(11:20)戸倉スキー場

雨、濃いガス、回復しそうにないが、下り始める。昨日温かく、今日は冷えこんだため、思ったより早く、尾瀬ケ原へつく。原よりシールをつけるが、ものの10分もしないうちに、飯塚のシールが切れる。始めは片足のみシールをつけて歩いていたが、山ノ鼻よりはつぼ足で歩く。鳩待では5～6人のワカン、スキーの混合パーティとすれちがう。鳩待よりは、メンバーがそろっていたのと、雪が固かったのでいつもより早く戸倉へつく。

巻機山山スキー

日　程：1985年　4月2日～3日

メンバー：高橋明弘，山中　卓，豊島吉章，高橋好幸，伊藤大介

4月2日 ①

桐生═══清水部落（9：30）──（13：30）避難小屋（14：30）──ブナの裏沢

──（16：20）避難小屋 $\mathfrak{B}_1$

朝、5時に高橋さんの所で待ち合わせをしたのに、一時間近くも遅れてしまい、結局、清水部落には9時頃到着。バス停のちょっと先に車を停める。スキーをしよって2～3分歩くともう雪の為道が消える。人の家の裏よりスキーにシールをつけ歩き出す。流石に雪が多い。井戸尾根の取り付きまで思い思いに進む。天気が良く、少々暑い。井戸ノ壁の手前で大介は暑さの為ズボンを脱ぎ、赤いトランクスがやけにかわいく映った。ニセ巻機山のあたりで先行していた単独行の人が降りてくる。午後3時頃のバスに間に合う様ニセ巻機山より滑走するらしい。巻機の避難小屋は2階の所が雪より出ており、入口を少し掘って入り込む。内部の雪を少し出し、内にテントを張る。その後、高橋（明），山中，豊島でブナの裏沢を滑りに行く。巻機山から沢に滑り込む。つづく限り何の障害物もなく快適であるが、下るにつれ雪が重くなりよくコケ始める。ある程度下ると不安定な急斜面が出て来たので（滝がある様だ）シールをつけ登り返す。テントに帰ってから明日も東面をもう一本滑ろうと話し合う。

4月3日 ①

$\mathfrak{B}_1$（6：30）──（8：00）米子頭山──（11：00）天幕（11：50）──（13：20）清水部落

今日も天気が良い。まずニセ巻機山に登り、米子の源頭部に向かって滑り込む。大介はニセ巻機の小雪庇を飛び降りて遊んでいる。米子沢の源頭部（奥の二俣の少し上部）より巻機山の頂上のやや南側の小ピークへ登り返し、米子の風這いまで滑りそこよりシールをつけ米子頭山へ登る。頂上よりトトンボ尾根を下る。直下にきれいなシュプールを5本つけ感激。途中よりブナの裏沢へ下ろうとするが、雪崩たためあきらめ、ブナの裏沢とヒゴトウジ沢の出合付近へ下る尾根を下る。途中何度も雪質が変わりアンモナイト攻撃（雪球が落ちると、それがどんどん大きくなってコマに巻いた糸の様になる）を連発する。途中カモシカを見つけ、時には腰のあたりまでの深雪を下る。沢床へおり立つが、雪崩をさけるためすぐ尾根を登り、ヒゴトウジ沢、ブナの裏沢にはさまれた北尾根を登り小休。その尾根をつめ巻機山の頂上へ。小尾で荷作りし、小休の後、井戸尾根を下る。東面に比べ雪質悪く何度も転ぶ。車で高橋明彦さん宅に寄り、自家製の手打ちそば，農園でとれたおいしいリンゴ，酒を御馳走になった。その夜は高橋さんの親父さんの面白い話を聞かせてもらい楽しい一夜を過ごす。

西　　黒　　沢

日　　程：１９８５年4月7日

メンバー：豊島吉章，伊藤信吉

駐車場（８：００）――（１０：３０）谷川頂上――（１２：００）土合

日曜なのでトレースをあてにしてゆっくり出発。ラクダの背あたりよりガスの中となる。背の小屋に荷物をおき、頂上をピストン、背の小屋で小休後、スキーをつけ滑りだすがガスの為いつもの雪田を滑らず、忠実に天神尾根を滑り、熊穴の避難小屋のあたりより熊穴沢を下る。雪は固く、春らしいザラメで滑り易い。一度高度が下がるともう斜度も落ちロープーウェイ駅はすぐである。

神楽峰～雁ケ峰・山スキー

１９８５年4月6日

メンバー：武井（教），藤井，赤塚

8時前にみつまた神楽スキー場に着く。まだロープーウェイが動いていないので、ロープーウェイからかなり右側にまわりこんだリフト（民宿から直接登れるリフト？）の下を歩いて登る。登り終えるころリフトが動き出し、なさけなくなった。第２，３，４リフト・神楽第１，２，３リフトと乗りつぐ。風が強いが展望はいい。山スキーの藤井だけシールをつけ、他の二人は登山靴にはきかえ登る。１９８４からの下りは尾根が二つに分かれるが、右を滑る。ここは樹林の中である。２０１０の登りは急で、右に寄ると危険である。ここは直登する。２０１０から方向を確認して下降開始。けっこう快適な斜面であった。後ろに描かれた自分のシュプールに思わずニンマリ。雁ケ峰へ向かう稜線の分岐からは、快適な稜線歩き。雁ケ峰手前でシールをつけ、少しの登り。今度はみつまた第4リフトをめざして滑降である。神楽第3リフト終点からみつまた第4リフトまでコースタイムでは7時間４０分であるが、我々は休憩も含め6時間ぐらいで来てしまった。このコースは展望は申し分なく、終始谷川連峰や越後の山を眺めてのツアーとなる。雪がしまっていればゲレンデ用スキーでも十分楽しめる。　（記　藤井）

守門岳・浅草岳（春スキー）

日　　程：１９８５年4月２３日～２４日

メンバー：豊島吉章

／２３日　桐生═══浅草山荘（１０：００）―（１３：３０）浅草岳（１４：００）――浅草山荘（１４：４０）

前夜桐生を自家用車で出発。途中で少々寝すごし、浅草山荘に着くのがやや遅くなってしまった。

車は、山荘の駐車場を利用することとした。

始めはやや複雑な地形で、２～３小尾根を乗っ越して、ムジナ沢へ入る。今年は雪が少ないせいかムジナ沢内部は所々水流が見える。だいたい右手を行き、途中滝の出てくる所より右の赤布に導かれて巻き上がるが、ルートを間違えてしまい（本来なら少し登りその後、沢へ下降する）そのまま右手の尾根へのってしまう。しかし気付いたときにはもうかなり登っていたため、かまわずその尾根をつめ、国境稜線を登り、１４５２のピークを越え前岳へ向う。前岳よりは１０分ぐらいで浅草岳である。頂上で写真をとり休む。寒くなったので、前岳を経て１４８４Ｐよりムジナ沢へ下降はじめる。源頭部は快適であり、滝は左手より巻き、ムジナ沢を出てからは来た時と同じく下る。明日にそなえ守門の登り口の大原スキー場付近で車内にて寝る。

／２４日　大原スキー場（６：００）―（８：３０）断念――大原スキー場

車で大原スキー場へ向う。スキー場はもつリフトを動かしていない様だ。リフトの下を歩き、ルート図どうり登る。稜線に上る直前はかなり急で、靴をけり込みながら登る。稜線はのっぺりしていて、あまり目標物もなくガスに巻かれると苦しそうだ。しかし、守門岳の手前で、あっという間にガスにまかれる。ルートがはっきりしないので休み、様子をみるが、ついには雨になってしまった。ひょうが降る頂上へ行くのを断念し下降する。稜線をはずして、今日登ってきた尾根の東側の沢へ滑り込むとすぐ車の所へ着いた。車に着いてからは、雨足もなお強くなって来て、下山は正解であった。なお、今回の登りはすべてツボ足であった。

至仏山（春スキー）

目　　程：１９８５年４月２８日

メンバー：豊島吉章，他３名

鳩待峠（９：００）――（１０：２０）至仏（１２：３０）――山ノ鼻（１３：００）――鳩待峠（１４：３０）

鳩待までが除雪されたと聞いたので、さっそく至仏でも滑ろうと思い出かける。しかし、戸倉ではゲートが下りており、８時にならないと開かないということで、ある。日曜日のため、駐車場には車がいっぱいだ。至仏では、２～３度いつものように滑って登ってとくり返し、大休止をとる。昼ころやっと下降となる。山の鼻からは再びスキーをかつぎ峠へともどる。

春スキー　燧・芝倉沢

日　　程：１９８５年5月１日～２日
メンバー：豊島吉章

／１日　大清水（１０：３０）―東電小屋（１２：００）―（１４：００）燧（１４：４０）―東電小屋（１５：３０）―大清水

車で大清水に行く。早くついたので仮眠をとったら寝過ごす。三平峠の登り口で雪が出てきたので運動靴より兼用靴にはき変え、三平峠よりスキーで下る。東電小屋よりつぼ足となり長蔵小屋へ。長英新道を至て燧へ向い、ナデッ窪を下る。沼尻よりつぼ足となり、東電小屋から三平峠へ。スキーをつけてみるが２～３分で雪が消えてしまった。大清水よりは、明日にそなえて車で土合へ移動後、車中泊。

／２日　土合（６：５０）―谷川（９：００）――ノ倉（１０：３０）―芝倉沢出合（１０：４０）―土合（１２：００）

昨夜は、土合の駐車場で車中泊。朝食後は、すぐ出発。谷川～一ノ倉と快適にとばし、一ノ倉山頂で休む。早々にスキーをつけ芝倉沢を下り始める。登ってくる人をしり目に、芝倉沢出合へと一気に。芝倉沢の山スキーはもう４回目のため、なれたものである。

１９８５年　パーワン　白毛門～谷川

日　　時：１９８５年　5月４日～5月６日（予備日１日）
メンバー：越沼　敦

5月４日

桐生＝土合（５：５０）―（８：００）白毛門（８：１５）―（１０：０７）朝日岳（１０：４５）―（１１：５５）清水峠（１２：１５）―（１３：５０）蓬峠

車にザックを積んで桐生を出発。早朝の南面をとばして５時過ぎに土合に到着した。水を入れ、装備を担いで歩き始める。２Ｐ半で白毛門のピークに到着、宝川から登ってきた登山者と話しをしたがかなりの残雪にまいったと言っていた。白毛門から笠へは東側斜面の雪渓の上を歩き時間を短縮することができた。朝日岳に１０時に着きしばらく休んだ。残雪のおかげでヤブをこぐようなことも殆んど無く、天気も快晴でずい分とペースが上がる。朝日から清水峠までが約１時間、ここでも蓬峠から

きた登山者と少し話しをして小休止を取った。七ツ小屋山への登りは、雪どけ水でゆるくなった登山道を苦労して登り、七ツ小屋山ピークで一服した。そこから一気に蓬峠へとゆるやかに下り、１３時５０分に蓬峠着。この先、谷川肩の小屋までは張れそうなところも無さそうなのでここを天場にする。時間が大分あるのと燃料がもったいないのとで、水は蓬沢側の雪渓に下りて流れる雪どけ水を２０分くらいかけて取った。シュルトを張ったが、夕方から風が強くなり、疲れてはいるのだがテントがうるさいのと初めての単独行であることなどによって寝つきが悪かった。アルコールの忘れた山行、或いは山に酒を持っていかない山行は寂しいものだと尽々思った。

５月５日

6:20 (６：２０)—(９：４６)谷川肩の小屋(１０：１５)—(１４：０５)万太郎山(１４：１５)—(１５：１３)舟窪—土樽—桐生

５時３０分頃起床。天気も悪くはなく朝食を取ってツェルトをたたみ６時２０分出発。武能岳への登りに１時間をかけ、更にその下りではなまじ雪が付いているために苦労をさせられた。茂倉岳手前くらいからはずっと雪がつくようになり、殆んど雪の上を歩いた。これで若干ペースはあがったと思うが、雪はすでにグズついていて歩きにくく足の筋肉が思ったより疲れた。肩の小屋前で昼を食べてゆっくり休む。ここから下りるかどうか迷ったが予定通りにオジカ沢へと進むことにする。この辺から記録が曖昧になってしまった。オジカ沢の頭から大障子へと下る途中で登山者に出合い、先の様子について話しをきくが、平標新道がかなり荒れていると言っていた。さらに万太郎山のピークで別の登山者と話しをすると、天気が崩れてきていることと、平標新道は使わない方が良いと言うことで、ここから吾策新道を使って下山することにした。尾根筋に急激に下るが、ところどころに雪が出てきて道も跡絶えがちとなり、ピッケルを出して雪渓を一気に下りトラバースして道に戻ったりした。途中、２人のパーティーを追い越し、日も暮れかけるころに林道へ出た。ここで雨が降り始めたので急いで土樽へと向い、土合まで汽車に乗り、そこで車を取って桐生に帰った。

巻機山・山スキー

時　　期：１９８５年５月５日

メンバー：武井(教)，藤井，市原，赤塚，原(医進２)

スキーの滑りおさめをするため清水に車をとばす。米子沢橋のそばの駐車所に車をとめ出発。(ゴールデンウィークは駐車料をとられる)。にせ巻機まで３時間、井戸の壁を越して展望台あたりから雪が出てくる。右に見える米子沢は水流が所々見えていて、この時期には滑走不能である。にせ巻機山頂よりスキーをつけ滑走開始。あっという間に避難小屋に着いてしまう。小屋附近には数人のパーティーがいるだけである。巻機山やヌクビ沢下降の偵察がてら割引岳にピストンしに行く。ヌクビ沢を登って来た人の話によると、不動滝、行者ノ滝、アイガメの滝、吹上ノ滝の４ケ所滝が見えているが、そこだけ注意したほうがいいとのこと。その人はサッサとヌクビ沢を滑降してしまった。我々も

滑べる方向をたしかめながら滑降する。４ヶ所の滝の手前でスキーをはずし登山道を利用し通過する。吹上ノ滝まで１時間３０分弱で来る。吹上ノ滝以後は、雪もほとんどなく、スキーをザックにつけ、登山道で駐車所へ帰った。　（記　藤井）

北アルプス　北穂高・奥穂高岳

期　　日：１９８５年５月３日～５月５日

メンバー：Ｃ．Ｌ　小池寛喜　　清水信明（ＯＢ）　伊藤倫恵子（ＯＧ）

大型連休を利用してのこの計画は、清水氏の手によった。当初サイクリングかと思われていたが、山であったことにいくらか安心。

５月３日　天気晴れ

前橋４：００═══沢渡駐車場８：００═══上高地──涸沢ヒュッテ１６：００

上高地への道路は規制のため、タクシー，バス，バイクしか入れず、沢渡に車を止める。ものすごい数の登山者，観光客とともに林道を歩く。素敵な景色も山々が狭くなってくると横尾山荘に着く。ここからやっと登山道らしくなる。この先からは雪渓も多く、またスキーをかついだ者達も見られる。屏風岩の下あたりからは完全な雪上歩行。深いトレースをたどる。横尾から２ピッチで涸沢ヒュッテ。ヒュッテ周辺のテント場はすでに色とりどりのテントで埋めつくされ、都会を思わせる。登りでのあの行列はうそではなかった。

水場，トイレはすごい混雑でうんざり、すこし時間をはずすことが必要だ。せめてもの好景に慰められる。

５月４日　天気快晴

涸沢ヒュッテ─穂高稜線小屋─奥穂高岳ピストン

朝は４時半ころ出発するが、すでに先行パーティー多数。どんどん追いつき追い越す。稜線小屋まではひたすらの登り。ステップを切りながら行く。小屋にはトイレもあり便利。

奥穂は小屋前からすぐ鉄バシゴ・くさり場となっている。５月連休とは言え、北アルプスの３０００ｍ級稜線では氷が付いているため、アイゼン・ピッケルは必需品である。

奥穂山頂では、あまりの好天と展望をむさる。・・・・ が、人々の多さにはうんざり。どんどん山頂も狭くなり脱出。鎖場はルートが一本しかないために混雑が予想されていたが案の定つまっており、上から声をかけて行列を切ってもらい交互に登り下りを行う。時間も早かったので、雪のついていない涸沢岳をピストン。こちらはすぐである。北穂高への切れ落ちた稜線が見える。下山はグリセードで、登りの人目を気にしながらも大胆に行く。とにかく人が多いために下降路も深いミゾとなってしまっている。昼すぎにはテントにもどってしまい暇をもてあます。一日中の好天に真黒の人も。サングラスの跡が残りそう。

５月５日

涸沢ヒュッテ４：００─北穂高ピストン─ヒュッテ８：００─上高地１５：００═前橋

昨日の経験から４時出発。昨夜は、まだ帰らないと交信を続ける他のパーティーが気にかかりよく寝むれなかったが、やっと戻ったらしい声に安心して寝つく。

早朝の雪はしまっており、またかなり斜度もあるのでアイゼンを付けていく。昨日の登りよりはぜんぜんきつい。我々が中ほどまで登ったころ、上部からザックがころげ落ちてくるが、あまりに遠かったため手も出せなかった。かわいそう。

頂上稜線は風が強く、この中にもいくつかのテントが見られた。その中のひとつのツェルトをたたむ女性３人パーティーは昨晩の話しに上っていた人達だったのだろう。かわいい顔をしてよくやるものだと感心。滝谷側の岩雪崩の音に何度もぞっとする。すごい。

南峰・北峰を踏み、雪のくさらないうちに下山開始。グリセードのやりすぎで手が疲れるころテントに着く。何と８時。とても早かったので、今日中に帰ることとし、すでに人の減りはじめたテント場をあとにする。多くの人に踏まれてグシャグシャの雪の上をとびはねながら横尾へ。これから登ってくる人の中には、ハンドバックを持った長グツのおばさんも。北アルプスとは不思議な所だ。
天気は下り坂ながら帰りたくない気持ちになるこの景色を背に、黙々と林道を歩き上高地へ。ここもまた人の混んでいることよ。３人で顔を見合わせホッと一息。楽しい山行でした。

裏妙義ホトケ沢

期　　日：１９８５年５月１８日
メンバー：小池，市原，嘉村，竹本

教育の部室７時集合すぐ出発。予定では日曜日のつもりであったが土曜日に変更、メンバーも減ってしまった。僕以外みな初心者。出合８：３０着。９：００出発。Ｆ１は右を巻く。不安そうな竹本さんが心配になってしまうが、この先何とか歩っているので不安は消える。ナメにつづく３０×４０ｍの滝は、下部直登、上部左岸高巻。傾斜もあり多少不安定。３段１０ｍ、ナメ２０×４０ｍは快適に過ごす。久しぶりの沢で気分がいい。１０ｍ垂直は左岸を高巻。水量が少ないので、滝にもそのはげしさが見られない。上部の長いナメは注意しながらツメ、最後は水流のある左の小滝を登る。多少のゴーロを含むナメをつめるが、傾斜がつよくなってきて不安なため尾根ににげる。ナメが３つに分かれた所は中央をとっていき中途で右ににげた。にげるとき僕が大落石。５０Kgほどありそうな岩がガラガラとナメを墜ちていった。ひやり、青くなった・・・・・。　ヤブのツメは約１５分で頂稜。山頂手前に出た。山頂１１時半着。昼食後下山、出合には１時ころ着く。新緑のやわらかな感じのする山山がとてもよい。　ここ一週間ほど雨がほとんどなかったために、水量が少なく、沢としての醍醐味には欠けていたが、気持ちのよいナメが味わえたことはとても良いことであったろう。　午後は、榛名黒岩へ、先行している医学部のメンバーと合流して練習をすることとした。充実した一日を味わえたナ。

双子山　（中央リッジルート上部・下部）

日　　時：１９８５年　５月　１９日
メンバー：小池，藤井，村田（医）
コースタイム

林道駐車場（７：５５）―（８：３５）取りつき（９：００）―（１２：１５）終了地点

取りつきまで火を吹いて歩く。取りつきで後発隊の清水さん（医ＯＢ）と医短，教養の人達に見送られて出発する。１Ｐ目はやさしいフェイスを右上気味に登る。２Ｐ目、大テラスから左へ少しトラバースし直上、２５ｍで３人位立てるテラスへ出る。中央リッジルート下部には３本のルートがある。左フェイスに行くつもりであったが、クラックがおいしうなクラックルートに行く事になった。ここはピレイピンが沢山あるので、こまめにピレイをとった。４０ｍでテラスにつき下部終了。一般登山道から清水さん達の声がビンビン聞こえる。中央リッジルート上部は下部にくらべると、ぐっと傾斜も落ち、ホールド，スタンス共豊富で初心者向きである。１２：１５西岳一峰にとびでて、登攀終了。ここでは我々を待っていてくれた清水さん一行に紅茶をごちそうになる。皆で東岳をピストンして下山する。志賀坂峠では、「恐龍のふるさと」で一役有名になった中里村の恐龍の足跡を見学して帰った。　　（記　藤井）

西　上　州　鹿　岳

時　　期：１９８５年　５月　２６日
メンバー：小池，藤井

リターンマッチ第２弾。この鹿岳は３度目の挑戦である。桐生ＡＭ５：００発、前橋でザイルを借りてゆく。このころ天気は回復に向っており、かなり期待させてくれたが・・・・・。南牧で２度ほど道路を間違えながらも下高原登山口は７：５０着。このころは陽も差し、あつくなりそうと思わせる。装備を確認し、８：００出発。つゆのついた草木が覆っていてトップの藤井はあっという間にびしょ濡れ。スギ林をぬけたあたりで左についている赤いテープを目印に踏跡をさがして北峰基部へ。このころから空はへんな色に。しかし降るとは思わなかった。基部８：４０着。基部の滝は以前、武井ときたときよりも水量が多い。装備をチェックし、シングルザイルで右の１０ｍ滝に取り付く。この滝はビレーを取る所がなく、上まで抜けて灌木でとるが、水で濡れているため割合危険、一度ズルリとなってヒヤリとする。右の滝を登ればそのままだ。左の滝からの場合、トラバースする必要あり。つるべで次は藤井。ルンゼはびしょびしょで靴が濡れる。このころガスが出てきておかしいと思っているとポタポタ・・・・と雨が。ルンゼ３ピッチ登り切った所でカッパを着て休む。このまま右のヤブへ逃げようかどうしようかと迷うが、待つと再び回復の眺があったため雨の止んだスキにルンゼをつめる。ルンゼ終了点まで４ピッチ。水の流れている時は注意が必要。ビレーもうまくとることが大切

となるだろう。しかし傾斜はゆるくホールドは豊か。ルンゼ終了点は明瞭。踏跡が左へあるのでたどると、フェースの取り付きとなる。ドッペルでボク、トップ。岩がまで濡れており、しかももろそうでこわい。すぐ樹木が多くなりピッチを切る。２０m、Ⅱ～Ⅲ。つるべで藤井が行くが、クラックが苦しそうでとどまり、まず引きあげてもらい、左を見に行く。この際、足元の大きな岩をくずしてしまう。ものすごい音が響きわたり、震えあがってとまった。こちらはパス。クラック下の小さなテラスへ上り、ルートをよく見る。左は左の壁がかぶり気味についており、びしょびしょ。右は傾斜ありしかも岩がはがれそう。ピトンを打ってみるが岩がくずれはじめたので、すぐやめて直上する。多少むりやりの感じ。肝が縮まったホント。テラスでは灌木でビレー。安定している。２０mⅣ。ラストは藤井。フェイスの中央をまっすぐ走るクラックをいく。　快適。　このころは晴れ間が出ており、岩も乾きはじめる。３０mⅢ。終了点１１時４５分着。２時間４５分かかった。終了点で昼食とする。完登を喜び握手。ヤッタネ。北峰ピークまで５０mほどである。ピークから登山道で南峰との鞍部へ向い下山。約1時間で下り切ってしまう。途中、子供2人連れた親子に会う。今回といい前回といい鹿岳とは相性あまりよくないみたいだ。しかし今回は完登。ひとつのステップである。ザイルを貸しに行くがてら黒岩へ立寄り、大スラブ正面ルートを登って帰った。

針ノ木雪渓・白馬大雪渓

日　　程：１９８５年6月1日～2日

メンバー：山中　卓，坂本　敦，豊島吉章

／1日　扇沢（７：２０）―大沢小屋（８：３０）―二俣（１０：１０）―マヤクボのコル（１１：３０）―針ノ木岳ピストン―マヤクボのコル発（１３：００）―スキーを取る（１４：００）―扇沢（１５：２０）

前夜発で扇沢へ入り駐車場にテントをはり仮眠。大沢小屋上の標識を見るあたりで1ピッチ、そこより３０分くらいでもう雪の上となる。針ノ木雪渓をつめ二俣よりは針ノ木峠へ向わず、マヤクボ沢を登るが、途中よりガスにつつまれルートが解からず、カンにたよって直登すると、コルに着く。針ノ木岳ピストンは約４０分。下りは所々氷化している所もあり注意して滑る。二俣付近は雪訓しているパーティもある。写真をとったり、クレバスを飛び越すなどして遊びながら滑り降りる。

／2日　猿倉荘（６：３０）―白馬尻（７：３０）―村営頂上宿舎（１０：２０）―白馬岳ピストン―村営頂上宿舎発（１２：００）―白馬尻（１３：００）―猿倉荘（１３：４０）

前日のうちに猿倉荘に車で入る。昨年５月は雪のため２時間ほど歩かされるが、さすが6月ともなると楽である。雪は白馬尻の少し手前より出てくるが、思ったよりしまっており快適。宿舎に荷を置き白馬岳ピストン（　1　時間弱）。小休後、宿舎より杓子岳の方へ少し進み、稜線の鞍部より滑り出す。急な斜面ではあるが、雪質もよく、快適にルンルンしながら白馬尻へ。今回の山行は、登りは登山靴、下りはスキー靴にスキーであった

上州武尊荒山沢

日　　時：１９８５年6月１６日

メンバー：藤井，小池，伊藤（信）

タ イ ム：桐生＝旭小屋（８：３０）―（９：３５）川場尾根登山道―（１０：００）前武尊山（１０：３０）―川場尾根経由―（１４：００）旭小屋＝桐生

昨日のショウブエンコンパでの二日酔いと、大間々から黒保根村経由川場村にぬける林道での車酔いのダブルパンチをくらったＹ氏を車に残して出発する。駐車場からすぐ荒山沢へ降りた。平凡な河原を少し行くと登山道が横切る二俣へ出る。右俣へ入るとすぐナメが現れる。まず２ｍ，２ｍ，１０ｍのナメ滝を登ると左に急峻なルンゼが分かれ、本流は一枚岩に約３０ｍの大ナメ滝をかけている。続いて７ｍ滝は右岩の外傾した岩棚をトラバースして越える。次の５ｍ，４ｍＣＳ滝は直登。　続く３ｍＣＳ滝は、ホールドが細かいので越えるのに苦労した。この３ｍＣＳ滝を越えると、素晴らしいナメ滝が連続する。８ｍナメ，４ｍナメ滝は直登、２０ｍナメ滝は右岸を小さく高巻き、１０ｍＣＳ滝は左岸の岩棚から越えると、真正面にナメ滝が階段状となっている。あまり期待していなかった沢であるが、意外にも素晴らしい。やがてナメ床の中に左岸から枝沢が入ってくる地点を過ぎるとようやく源流状となる。水が涸れ、草付の岩場へ出て、たいしたヤブコギもなく登山道に５分ぐらいで出た。前武尊山でメシを食べ、川場尾根で下山した。

駐車所で「上州武尊」を出刷するため撮映に来た岡田敏夫氏に会いました。

今回の資料は岡田氏が「岳人Ｓ５９年１０月号」に連載されたものです。　（記　藤井）

上州武尊山西俣沢

時　　期：１９８５年6月２３日

メンバー：小池，山中，伊藤（信），伊藤（大），藤井

コンパあけ前橋を６時近くなって出発。逢瀬橋には７時半に着き、下山路を前武尊側にするということで車を置きに行ってくる。８時過ぎ橋を出発。林道歩きである。約３０分の林道歩きで、道はしょぼくなり西俣沢の徒渉点となる。ここから入渓する。下部は前回の荒山沢とは異なる岩質のナメでとても気持ちよく溯行をすすめる。滝も小さく、すべてが直登だ。途中崩壊した橋のあとを見ながら行く。先を行く溯行者は２人のつり人であった。彼らの前をびくびくしながら通過。以前山渓にあった沢ヤと渓流づりの犬猿論にビビッていたボクとしてはひや汗ものだった。長いゴーロは左右が泥壁で崩壊した所も見られる。右に沢を分けると次期に左に屈曲した７ｍ滝となる。これは流水の右側をシャワークライムでぬける。このあたりからは、沢床が砂レキ質になってきており、それぞれの小滝は小さいながらも釜をもっている。水が清んでいて美しい。部分的に流木がつまっていて滝らしくなくなっている所もあるが、これは何年か前の台風によるものらしい。ぐっと両岸がせばまったＣＳ滝は下に小さいトロがあり、とりつきにくくしかもぬけ口がいやらしそうなので高巻くこととする。

すこし手前から左岸を灌木とササにまみれて、次に続く１０ｍＣＳ滝の落ち口へと下りる。５ｍＣＳの落ち口へは下降できないであろう（フリーで）。１０ｍＣＳは上からのぞく限りは登れそうである。すぐに左へとルンゼ状の滝をわけると、この山域の特徴的なナメが見られる。６ｍのネジレ滝を左岸から越えるとメインは終了、あとは水量の多い方、多い方と進路をとってゆく。水源は何と、いきなり壁からわき出していた。ヤブのかぶさる細い沢をもぐるように行くと、次期にトゲのあるハリブキに出会い本当に悲鳴をあげてしまった。ここからはなるべくヤブのうすい所を歩いてゆくと３０分ほどで中ノ岳と家ノ串の鞍部へとび出す。ここで午後２時ごろであったろうか。中ノ岳の斜面に雪渓を見る。沢の途中も岸にへばりつくようなのが残っており水をつめたくしていた。下山は剣ケ峰を越え前武尊から東へ下る。花咲登山道と前武尊スキー場への分岐は、かなり下で今回は間違えたのでは‥と火を吹くが何ということはない。立て看板があった。前武尊スキー場の駐車場に５時近くになって着く。コンパあけにはかなり長かった。登攀要素はまったくなく、初心者にも楽しめよう。また早い時期からの入山も可能と思われる。下山は武尊牧場へとったほうが楽であるかもしれないが、剣ケ峰を越えるのもなかなか楽しい。しかし車で入山、下山口をつなげる場合に限るが。

大源太川北沢

時　　期：１９８５年7月7日

メンバー：小池，山中，伊藤（信），藤井

先週行く予定であったが雨のためパス、今週となった。桐生・前橋経由で２時間半ほどで大源太村着。付近の人に道を聞き、林道へ。かなり奥まで入れる。７時半頃歩きはじめ、すぐ沢（広い）沿いに歩き、左に入っている林道へと徒渉する。途中から山道となり約４０分で徒渉点。８時過ぎ徒渉点から遡行開始。再びヤスケ尾根の徒渉点があるが、ここまでは平凡なので登山道をたどってもよいだろう。遡行は主に水流を、滝は直登だ。最初は冷たいと感じた水も思ったほどでなく、すぐ慣れてしまう。５ｍ４条は美しい。いちばん左の水流をシャワークライムでいくが、全身びしょ濡れ、他の３人はカッパをつけて登ってきた。続く５ｍは傾斜もゆるく、水流左のクラック沿いに快適にいける。七ツ小屋裏沢は水量がほぼ等しいので注意。左へ入る。このあとのゴルジュ帯は中央を行く、泳ぐ人約１名。手前５ｍは釜を太モモまで入り、右手に取り付く。水中にスタンス有り。山中氏は左を高巻きする。次の５ｍは右を小高巻。いかにも雪渓の残りそうな所で左から１０ｍ滝が流入。今回はスノーブリッジは消えていた。台風６号の影響か？。沢が右に屈曲する所の１０ｍ滝は水流右を直登。多少のシャワークライムとなる。次の１２ｍはかるく越え、三俣となる。３０ｍ滝を混じえて流入する七ツ小屋沢は素適である。いちばん左へ入る。水量１：１：３だが中央はほとんどない。３０ｍは水流左をつめ、飛水の下を右のトラバース。流水をもろにうける。この３０ｍを上ると水量もぐっと減る。せばまった３段１２ｍチムニー滝は右側からの高巻可。小池，藤井は水流をもろにうけながら直登。水に顔を覆われ窒息しそうになるが、おもしろかった。続く４ｍ６ｍほどの滝は快調にいく。１０ｍスラブ状というのはホールドが確かに細いが、水流右を行くことができる。小さい巻きとも言

えるナ。つめはスラブ状の草木の生えている所を左よりに行くと、ヤスケ尾根にでる。尾根着１１：００。休んでいると手のひらほどの小さなイタチが我々の目の前で出たりひっこんだりしていてとてもかわいい。山頂まで5分。車を止めた所まで2時間弱で下りきる。車のまわりにはワラビが生えており、ついつい取りながら帰ってくる。2時ごろであったろうか、今回の山行は何と時間のかからなかったことか。朝のコンパあけの苦しさに比べて帰りの気持ちよかったこと。大源太北沢は時間もさほどかからず、小滝を楽しく登れるので非常にいい所ですネ。手ごろと言えましょうか？。山中さんが作ったワラビのおひたしがおいしかったヨ。

一ノ倉烏帽子沢変形チムニールート

期　　日：１９８５年7月２９日

メンバー：豊島吉章　小池寛喜

出合駐車場６：００――終了点――南稜下降――駐車場

昨日は栃木の古賀志山へ行き、その足で桐生発。森田氏のワゴン車で登山センターへ向い、ミヤマ山岳会の佐藤氏と合流、早朝出発を心がけ、はやく寝むることとする。

天気晴れ、水がつめたい。最初の渡渉点から雪渓をつめテールリッジへ取りつく。変チの取付点は、ガイドブックの写真と照らし合わせる。豊島トップで全ピッチ終了。ルート細部はガイドブックによりたい。終了点からはすぐ右の南稜へ下降。途中ザイルの回収不能という状態が起こりヒヤリとするが何度か引くうちにとれる。以前もこの様なことがあった。南稜終了点は注意が必要だ。　本日は天気が最高によかったため、ほとんど岩の上で日干しの様相。登り４時間、下り１時間半であった。水が１ℓでは、のどがカラカラで苦しかった。私（小池）はほとんどバテ気味でありました。

仙ノ倉谷　東・西ゼン

期　　日：１９８５年　8月1日～2日

メンバー：豊島，藤井，小池

８／１　山荘（８：５０）――東西ゼン出合（１０：３０）――稜線（１２：００）――山荘（２：４５）

山荘へ行く。古庄，市原とともに桐生出発。２人を山荘へ残して我々は早々に出発。小屋からの道は、とてもきれいに刈り払らわれている。出合で大休止。出合には西ゼンのスラブから、大きな一枚岩がはげ落ちていた。第１の滝は右、第２の滝は右岸をトラバースして落口に立つ。L字滝は右岸より取り付き、ゴルジュを少し登ってから左岸に取り付いて３０ｍ滝の落口に向って登る。大滝は、下段４０ｍの滝は、右側のバンドを利用し落口へ向い、上段２０ｍは、左手の岩より凹状のヤブの中の踏跡をたどる。大滝は、残置のピンがあるが、ビレーを取る時は注意したほうがよい。今回はノー・ザイル。大滝以降は沢もせまくなり、２～３の沢を分けると、水もぐっと減ってくる。左の三ノ字沢

へ向うころには、雷の音が聞こえてきたため、大急ぎで稜線経由イイ沢へと下る。

8／2　山荘（7：30）—出合（8：50）—平標新道（11：00）—山荘（1：00）

今日も昨日につづき沢日和である。出合に着くと右に広大な西ゼンのスラブが、左には遠く東ゼンの大滝の一部が見える。スラブの左より水流沿いに、フリクションをきかせながら取付く。スラブ終りの15m程の滝は左側を登る。大スラブでは、流水を左に見ながらとなり、右へ行きすぎないようにする。休憩のたびに沢の水を飲んだため、休憩の回数、時間がくってしまう。我々だけの広いスラブが狭くなると、一昨年夏の遭難現場である。静かな一時であった。第2スラブを通過して、いくつかの小滝を越えて枝沢を登ってゆく。枝沢には所々ゴミがあり、その人気を物語っている様でもある。しかし、なさけない人間達もいるものである。稜線までは、踏跡も明瞭で、正直につめていけば上部の草原に出る。下りの平標新道は、とてもきれいに刈り払らいがされており、歩きやすかった。

（記　藤井）

湯　檜　曽　川　本　谷

期　　日：1985年8月4日

メンバー：山中，藤井

タ イ ム：土合無料駐車場（4：50）—魚止メ滝（6：50）—朝日岳（13：10）—
白毛門登山口（17：30）

眠い目をこすりながら林道を歩き、魚止メ滝に着く。溯行の準備をしていると、社会人らしきパーティー5人が到着する。溯行は、ナメ床，滝，釜とあいつぎ、我々は大満足である。思わず写真を撮りまくる。40m大滝手前の5m，7m滝は、左，右の順でへつり気味に登る。40m大滝に着くと、我々は、あまりの天気のよさとともにTシャツを脱ぎ滝にうたれて、しばらく遊んだ。当然のごとく写真におさめる。大滝は左側から取りつき上部をトラバース気味に登り、滝の上部に出た。峠ノ沢出合より上部は、やや平凡となる。奥の二又で大休止。ガイドブックによると、ヤブニギをさけるためには、ここより左沢へ入ったほうがよいとあるが、我々は本流の右沢に入る。稜線までは、あまりしっかりしたとは言えないが、踏跡がある。稜線歩きは、寝不足がたたってか、体と足がガタガタになってしまい、白毛門の下りはほとんど泣きながら下った。　（記　藤井）

マ　チ　ガ　沢　東　南　稜

期　　日：1985年8月9日

メンバー：斉藤（医），藤井，小池，村田（医）

西黒登山口——（西黒尾根）——谷川岳山頂——東南稜基部テラス——終了点——谷川岳山頂——
——巌剛新道

早朝ガスの中、西黒尾根を歩く。樹林限界ごろになると風が吹き出し肌寒い。ガスの中、肩ノ小屋に着く。少し休んで東南稜基部テラスに向い下降をはじめる。降り口は、オキの耳付近からだ。岩がぬれていたため、ザイルを2～3回使うが、残置ピトンはほとんど無く、あっても、くさっており注意を要する。落石にも注意。

基部テラスは、要ノ滝のすぐ先である。あいかわらずのガスの中、準備をし、斉藤－藤井、小池－村田でザイルを組む。1P目、小池，藤井で行く。10mほど登った所で、左壁のハングに突き当り、回り込むように右のスラブへ移るのだが、ガスの影響か、岩がぬれており、いやらしい。しかし、このピッチは残置ピトンが多いので、多少安心できる。ここより右の容易なスラブをさらに5mほど登ると、テラスに着くのであるが、残置が少なく、打つことにする。2P目、ぬれたフェースのクラックをさけ、左の凹角をいく。S氏は、凹角内に体をつっこみ、"必殺AO"と言いながら直上。藤井はフリーで試みるがけっこうしぶかった。3P目以降は、2～3級程度で安心して登っていくことができる。終了点付近になると天気がかなり回復、トマの耳やら雪渓がよく見えてくる。終了点からは傾斜の緩やかな草付で、踏み跡をたどると縦走路まで5分ほどである。下山は、巌剛新道経由で下山。

一ノ倉烏帽子沢中央稜

期　　間：1985年8月20日
メンバー：CL小池（工3）　村田（医3）
　　SL藤井（工3）

19日に登る予定であったが雨のため、衝立前沢出口付近まで行ってひきかえした。衝立前沢出合には大きな雪渓が残っていた。

20日、早朝出発する。テールリッジの上部一ケ所でザイルを使用した。中央稜基部に着くとさっそく用意して登り出す。滝沢スラブを登っているパーティーがよく見える。4ピッチ目のⅣ、AOはしぶかった。傾斜が強く、ホールドも細かくフリーだと我々には手に負えない。残置ピトン，シュリンゲが多数あるが、アブミに体重を乗せるのにいまひとつ不安がある。トップの小池氏がクリアーした後、村田，藤井の順で登ったが、ここで約一時間弱も費してしまった。大幅な時間ロス後、空腹とのどの渇きを我慢しながら衝立ノ頭に着く。ここで昼食をとる。国境稜線までは約2時間位で出た。疲労と充実感を味わいながら西黒尾根をおりていった。　（記　藤井）

一ノ倉烏帽子奥壁凹状岩壁ルート

時　　日：1985年8月29日
メンバー：豊島吉章　　小池寛喜

夏休みも終りに近づいた今日、以前計画倒れした凹状を再びねらう。　前夜桐生発、出合駐車場で車内泊するが、つい寝冷え。朝、腹痛にひやりとするが何とか回復。

以前にも増して本谷の雪渓は減り、ヒョングリの滝はきれいに露出し美しい。平日のためほとんど貸し切りだ。取付まで一時間半。８：３０ザイルを組む。

１Ｐ目の最初がわるいが強引に。核心部の凹角までルート図では３Ｐとなっているが、４Ｐに分けたほうが安心できる。ここは落石線の中なので要注意。最後のＰは５ｍほどの立ったクラックで、ピトンが沢山あるので強引に行ける。上部はもろい岩を交じえた草付で、落石を発生させないことが大切。　合計１０Ｐ、終了点１１：３０ころ。

下降は南稜とし、一ノ倉尾根を懸垂岩へ。途中１Ｐザイルをのばす。ここは中央稜を登ったときも歩いているため気楽。変チの終了点と合流し、下降。今回もザイルが引っかかる。南稜下降途中２人の若者パーティに合うが１４：００ころか。

前回にくらべると秋の気配を感じるが、まだまだ岩の上は暑い。水を求めてテールリッジをヒタヒタ下る。乾いていると何とも楽であるが、やはり傾斜を感じる。雪渓のくずれる音を聞きながらの今回の登攀も無事終り１５：００～１６：００といった所だったろうか。　盛夏にくらべぐっと少ない観光客達とともに帰ることとする。

谷川ヒツゴー沢

時　　期：１９８５年９月２日

メンバー：小池寛喜　　藤井修一　　田部井聖子

予定のメンバーを大幅にへらしてしまい、３人になってしまった。

谷川温泉まで車で入り出発は６：００頃、他にも３パーティーほどおり、すごい人数。二俣までは１時間で着くが、さあこれから行こうというところで雨が降りはじめてしまい、木蔭で雨やどりをしている。３０分程で止んだろうか？　沢の水は少ないを通りこし、二俣では水がないという状態である。川原に降りた時点からもう水はなかった。非常に不安に思いながらＦ１逆くの字滝へ。先行の大パーティーがザイルを用いて登っていたためすぐ追つき、彼らの落としたらしいカラビナなど拾ってしまう（あとで返してしまったが）。

我々は３名ということもありスイスイと進む。田部井さんも不安なく登れているので特にザイルを用いることもなく、あっという間にトップのパーティとなる。今回も滝は直登で、巻き方も小さい。水量も少なく、しかも水がつめたくないので濡れることは心配ない。初心者のしかも女性を含む大パーティを追いつめていた時、ザイルにつながる女性が、我々と同じルートをとろうとして釜にドボン。エーンという感じ。カワイソー。

２０ｍチムニー滝の所で休んでいると"ムサシノ"のネームの入ったパーティが楽しそうにやってくる。彼らは、この滝を直登していったが（下部は側壁）ぬける手前でトップがすべり落ちチムニーにはさまり止め。もう少しで直登だったのにおしい!!　彼らはこの先の大きな釜で水泳大会を行ってお

り楽しそう。それを横目に我々はとばしてゆく。間もなく水がつめたくなり水量はガックリと減ってしまう。以前はこのあたりで中ゴー尾根につきあげてしまうところであるが、今回は谷川まで行こうと本流をつめてゆく。上部で2つに分かれていて右へ入るが、これは天神尾根の最上部へ出た。ササのヤブこぎ約3分といったところか。途中で沢を右へよけたがこのほうが楽だろう。踏跡がある。水が枯れてからの沢はゴーロが長いせいか部分的には滝状で、涼しければ気分がいいだろう。谷川山頂着12：00ころ。　山頂でゆっくりし、雲が下がってきたので下降とするが再びザーッとくる。合羽を持っている我々はよいが、何も持たない観光客はズブぬれでカワイソー第2弾。

天神平からイワオ新道で谷川温泉へと下る。3時間ほどかかったか？　最後でヤブの中を歩いてしまった。温泉はいつもの露天風呂へ入れてもらい、つかれをいやす。前日の睡眠不足のためかなりつかれを感じた今日の山行であった。

年中行事と化しているヒツゴー沢は谷川温泉とのマッチで最高のものとなっている様だ。

巻機山登川米子沢

時　　期：1985年10月10日
メンバー：小池，豊島，藤井，市原，ほか医学部，教育，医短　（数人はヌクビ沢一般道より）

試験後久しぶりの沢で先日からうれしくてしかたがなかった。医学部と合同でということになり、いっしょに出発するが何とのろいことか!!　1時間のロス。高速で石打まで2,100円ナリ。行きはよかったが、帰りはすごい混んでほとんどカメの様な走り方、高速とは言いがたい感じ強かった。米子橋の駐車場は満車で路上に置いたり、下の（かなり下）駐車場へ置いてゆく。100台はあったろうか？　最初のゴーロがかなり長い。多くの登山者（溯行者）を先に見ながら歩くが、なかなか追いつかず、ゼーゼーいう。ナメ沢を分けてからのゴルジュは右岸の明瞭な踏跡をたどる。この先は平凡。水が冷たく水流を登るのはかなりの度胸が必要。水がぬるければ、滝は直登可のもの多いとみられる。不可の場合は踏跡が必ずあるのでさがしてみること。上部のゴルジュから先が楽しい。直登がルートか？　この先のナメは西ゼンにくらべるとさすがにもの足りないが、秋とマッチしてとても美しい。フリクションをきかせて登ること。傾斜がさほどないと思って進むと、行きづまることあり。ルートをよく見ること。かなり沢の傾斜が落ちると奥の二俣となる。ここからは紅葉の山頂側がうかがわれとても気持ちよい。奥の二俣からは左沢へ入る。踏跡を見つけながら左よりに進むと巻機小屋はすぐである。まったくヤブこぎなし。体力的にも技術的にもあまり問題となる場所はないであろう。溯行所要時間、3時間半。稜線でゆっくりと休み秋の日を楽しむ。下山は井戸尾根で約1時間半。この沢は秋のポカポカ陽気が最高と思われる。

一ノ倉沢南稜

日　時：１９８５年１０月１３日
メンバー：藤井，小池

一ノ倉にまたもや来てしまった。天気はまあまあで、紅葉の一ノ倉沢出合ではカメラマン達がシャッターチャンスを待っている。今日は休日のため混んでいるかと思ったが、中央稜基部には数人いるだけで、南稜テラスにはだれもいなかった。テラスから上部に見えるチムニーに向けて登り始める。２人だとつるべ式でいいので、時間的ロスがないのでいい。チムニー，フェースと快調に登る。夏の一ノ倉もいいが、岩にはりついた紅葉の一ノ倉のほうが生命感があっていい。馬ノ背リッジではテラスから右上のリッジに上り奥壁側のクラックからテラスに向かう。この上の７０～８０度の最終フェースは高度感がある。ここは一ケ所、ピンをつかんで登る所がある。我々もＡＯで登った。南稜テラスから２時間で終了点に出た。ここで大休止。途中から腹の調子が悪くなった小池氏はようやくキジ場へ。私はお昼寝。ここから草付きの踏み跡をたどり国境稜線へ向かう。途中５ルンゼの頭の通過は、露岩帯があるので注意する。帰りは巌剛新道経由で下山した。　（記　藤井）

冬山　八ケ岳　（硫黄岳～赤岳）

時　期：１９８５年１２月２６日～１２月２９日
メンバー：ＣＬ小池寛喜（工３）　ＳＬ藤井修一（工３）　山中　卓（工３）　奥山洋章（医２）
田村健次（工３）　浅見高志（工１）　阿部純子（教２）　嘉村肇晃（工１）
竹本好美（教２）　原和比古（医進２）　糸井伸雄（工１）　土佐融児（工１）
福田　靖（工１）　山口　毅（教１）

１２月２６日　○
前橋═══小海═══稲子湯（１０：５０）──しらびそ小屋（１２：５５）──中山峠（１５：００）──黒百合ヒュッテ

前橋で見送りをうけて出発する。八ケ岳へよく利用する列車である。車内では早くも、"むすび"をめぐりジャンケン大会となった。小海からは、タクシーで稲子湯へ向う。天気は良く快適である。下見の時とは打って変わってラッセルがしてある。２Ｐでしらびそ小屋である。事件はこの時起こった。某ＳＬのＨ氏が明らかに硫黄岳と見える山を指差し「天狗岳だ。」と言いだした。彼は地図、コンパス用意しての自信を持った発言である。もちろん全員彼を笑った。さらに中山峠の登りでは、またしても奥秩父の山々を「南アルプスだ。」と言いはった。最後には、すぐ直前の中山峠も「ちがう」と言い出す始末である。彼は人類最古の時代から生きつづけているため、現代社会について行けず、ボケてしまったらしい。黒百合ヒュッテ付近に幕営。途中でアイゼンを拾う。

１２月２７日　⊛～◎

黒百合ヒュッテ（７：００）――天狗岳（８：３０）――夏沢峠（１０：１０）――硫黄岳（１１４０）――赤倉鉱泉（１３：００）――行者小屋（１４：００）

今日は、あまり天気が良くない。天狗岳へザックを凍らせながら登る。天狗の下りは少し細い。根石山荘のカゲで休む。風雪が強い。展望もきかない。根石岳の下りで１年の福田君がコケた。夏沢峠を過ぎ、硫黄の登りとなる。樹林帯では雪があるのだが、岩稜帯となると風で飛ばされて雪が少ない。硫黄の山頂では、堀立小屋で休む。赤岳鉱泉の下りでグリセードを楽しみながら行く。稜線をはずれれば、風も弱まり、少々あつい位である。行者小屋でフカフカの雪にテントを張る。

１２月２８日　○

行者小屋（７：３０）――（地蔵尾根）――赤岳（９：３０）――中岳――行者小屋（１１：３０）――赤岳山荘（１６：００）

今日は快晴である。赤岳がひときはすばらしい。快適な地蔵尾根の途中でオヤ？オヤ？どこかで見た顔の人間が・・・。それは、茨大の人だったのである。彼らと抜きつ抜かれつつして、スリルある地蔵尾根を行く。赤岳石室で個人写真を撮り、快適な赤岳の登りを２５分で頂上に着く。すばらしい景色である。下りは慎重に中岳まで行く。赤岳と中岳の鞍部で休んでいると、中岳方面にカモシカ？が出現した。最初は岩に見えたのだが、動き出しやがて稜線から消えていった。中岳と阿弥陀岳の鞍部より大シリセード大会が開かれた。非常にスピードが乗ってカイカンであった。行者小屋に戻りテントをたたんで美濃戸口の赤岳山荘まで下ることになった。年越登山であろうか、入山する人とすれちがいながら下山する。

１２月２９日　○

美濃戸口＝＝茅野＝＝前橋

朝まだ暗いうちタクシーに乗り茅野駅へ。　小淵沢で"元気甲斐"を買い小海線で例のごとく前橋へ向った。　　（記録）　嘉村肇晃

南八ケ岳阿彌陀岳北稜

時　　期：１９８６年１月２４日

メンバー：小池，　藤井

タ イ ム：１月２３日　桐生＝＝＝美濃戸口（車内泊）

１月２４日　美濃戸口（４：４０）―（７：３０）行者小屋（８：００）―取付き（１０：００）―（１１：１５）阿弥陀岳山頂―（１２：３０）行者小屋―（１４：１５）美濃戸口＝＝桐生

２３日午後４時、桐生を出発する。途中高崎で買い物をしていき、美濃戸口の駐車場に着いたのは１０時ごろ。酒を飲んですぐ寝る。２４日、朝食を食べ小雪のぱらつく中、ライトをたよりに歩き出す。行者小屋付近はトレースが完全に消えていて、時々ひざまでもぐる。行者小屋には人がいた。犬もいた。道の途中に１張り、テン場に１張りとさすがに平日は入山者が少ない。気温は－１５℃。

ガスっていてまわりは何も見えない。中岳新道で途中まで行き、中岳コル手前で北稜の尾根にトラバース気味に登る。中岳コルとほぼ同高度あたりまでワカンのラッセルで火を吹いた。ここからアイゼンにはきかえ、時折ひざまでもぐりながら登る。なぜか犬がついてくる。風が強く、気温はさらに下がっているようだ。とにかく寒い。１０時ごろ取付きに着く。犬はツメをアイゼンがわりに、ガシガシ登って来る。壁をやや左に登ってから、登攀開始。容易な岩場であるが、手がかじかんでいるので多少緊張する。２Ｐで終了。ランニングビレーは灌木に取った。このルートは壁が出てきた所から登りだせば３Ｐになるだろう。また壁の左をまけば、岩を登らず稜に出られる。犬もこのルートを使い登ってしまった。斜度もけっこうあるのに、ずりずり滑りながらも登ってしまうのである。最近のクライマー犬はすごいと感動した。ザイルを使い岩を登っている自分が情けなくなった。終了点から10分で阿弥陀岳山頂。視界は２００ｍ程度。下降路を間違い、多少時間をくう。中岳コルで大休止。犬も我々の間にすり寄って休んでいる。中岳新道はシリセードで下った。行者小屋には朝とはうって変り、数十人の入山者がいた。ここから駐車場まで２Ｐ。ちゃっぷいちゃっぷい山行だった。

巻機山・山スキー

時　　期：１９８６年３月３０日～３１日
メンバー：山中，　藤井，　小池，　市原
タイム：３０日　　桐生（２：３０）＝＝清水部落（７：００）―（５Ｐ）―（９：２５）巻機避難小屋
　　３１日　　雪洞（１１：２０）―（１：１６）清水部落＝＝桐生

３月３０日

ＡＭ２：３０桐生発。山中号で清水部落へ向かう。ここまで道路は完璧に除雪されていた。さすが新潟第三区である。日曜日とあって入山者は多い。シールを付けて登り出すが、雪がカリカリなので、シールはいまひとつ。ほとんどの人はつぼ足であった。我々も米子沢橋を少し越えた所でスキーをはずした。スキーをはずしたとたん気合がなくなり、メンバーはやたら休憩したがる。井戸の壁で火を吹いた後、スキーを再び付け登る。樹林帯をぬけると風が強く寒い。ここからニセ巻機山頂までは約１００ｍごとに新潟大の赤旗があった。ニセ巻機に９時着。大休止後、避難小屋へ滑降。シールを付けているのでスピードが出ない。小屋手前の斜面を利用し雪洞を堀る。雪が堅く苦労する。４人がゆっくり寝られる広さになるまで、２時間近くもかかってしまった。サボりながらやると時間がかかる。雪洞を作り終えるころになるとガスり始め、巻機山に登ると視界はまったくなし。まことについていない。小屋付近の斜面を何回も上り下りしただけで終ってしまった。雪洞にもどって天気図をとると、明日はあまり見込みなし。とにかく今晩は飯を食べ寝ることにする。雪洞を完璧に作ったので、実に住心地がよかった。

３月３１日

５時起床。外に出て見ると昨日と変らず視界なし。朝食を食べ、少し様子を見る。９時頃気象を取

った後、下山始める。井戸尾根を下降路にとる。視界はあまりきかないが、赤旗に導かれながらニセ巻機を下りきる。途中単独の登山者とすれちがう。ニセ巻機の下りは悪天時は非常に迷いやすいので要注意。とくにスキーをはいて下った場合、下りすぎには注意。樹林帯からは雪はあられっぽくなった。井戸の壁から下は視界がきき、清水部落が見える程までになった。ここから下は雪もくさっていて、少しもスピードが出ない。一生懸命ストックでこいでいるうちに部落に着いた。今回は上トトンボ沢、ノミオ沢右俣を滑る予定であったが、悪天のため滑降できなかった。今シーズンはまことに山スキーはついていない。

春山，鳳凰三山（御座石鉱泉～夜叉神峠）

時　　期：１９８６年３月５日～８日（予備日２日）

メンバー：総ＣＬ　田村健二（工３），　総ＳＬ　奥山洋章（医４）

（第１パーティ）		（第２パーティ）	
ＣＬ	田村（工３）	ＣＬ	奥山（医４）
ＳＬ	原（医２）	ＳＬ	村田（医３）
	市原（工２）		阿部（教２）
	関本（医短２）		竹本（教２）
	土佐（工１）		糸井（工１）
	木村（工１）		山口（教１）
	鹿沼（医短１）		大塚（医１）
			藤井（工３）

３月５日　前橋[redacted]穴山

遅刻常習犯の原も無事に集合し、前橋を出発。高崎で竹本さん、関本さんの２名と合流。穴山には９時頃到着。駅で眠る。

３月６日　（５：２０発）＝＝＝＝（６：０５）林道の途中――（７：３０）御座石鉱泉
　　タクシー
　　（８：０５発）――（１１：４０）ツバクロ頭山の手前――（１３：４２）鳳凰小屋

駅からタクシー３台で御座石鉱泉まで向かうが、このタクシーがとんでもない連中で、路面が凍っているという理由でそれ以上先へ行けないという。思わぬピッチ追加に文句を言う者も出た。御座石鉱泉のあたりでは雪はほとんど無い。ここで、昨年のパーティー（ＣＬはあの某Ｔ田氏）のテン場代まで取られてしまう。何ともさえない出発である。天気はくもりときどき晴れ位で、かなり気温は高い。皆、余裕を持った顔をして歩いている。ツバクロ頭山の頂上の直後の鞍部はやせていて、両側がやや急であるが、雪もやわらかく、風も無かったのでそれほど苦労せず越える。ほぼコースタイム位で鳳凰小屋へ。積雪は１ｍ位だろうか。この晩で２泊分の酒がほとんど無くなってしまう。ちょっと調子に乗りすぎたのでは？という気もする。

3月7日　（6：05発）――（8：20）2750のピーク付近の稜線上。
（地蔵ビストン・・・40分程）――（10：20）観音岳――薬師岳小屋（11：00位）――夜叉神小屋（3：30位）$\mathcal{L}_2$

稜線に上がってみると、雲も少なく、青々とした空いっぱいの晴天である。アイゼンを付けているのが何となくこっけいな感じさえする。ビストンは40分程で済んだ。観音岳など、稜線上では南アルプスや八ケ岳の展望がすばらしい。原と二人で、春休み中に北岳に行こうなどと誓ってしまう。昨年と同様、樹林帯に入ってからアイゼンをはずす。しかし、わが第2パーティーは昨晩飲み過ぎたせいか第1パーティーと比べて遅れ気味である。もし天候が厳しい時の事を考えればこれは少なからず反省すべき点であったろう。とはいうものの、ほとんどみんな夏山気分で余裕をもって歩く。夜叉神小屋に着いた頃、やや雲が多くなる。

3月8日$\mathcal{L}_2$――夜叉神峠――スーパー林道――バス停＝＝甲府＝＝＝＝前橋

今日も晴。まったく春山とは思えないような陽だまりに恵まれた山行であった。宿泊山行トレーニングの松手山や白ケ門のほうがずっと雪山らしかったであろう。まあ、しかしメンバーみんなの心がけが良かった故の晴天とも言える訳で、みなさんご苦労さま!!　　（記録：　村田）

八方尾根・山スキー

時　　期：1986年4月3日
メンバー：山中，　藤井，　伊藤（大），　長谷川，　赤塚
タ イ ム：ゴンドラ乗場（8：00）―（リフト2本経由）―第1ケルン（9：00）―（9：25）第2ケルン（9：40）―（10：30）P2361（10：50）―丸山ケルン（11：10）―（途中2554にスキーデポ）―（12：10）唐松山荘―（12：30）唐松岳―（1：00）唐松山荘―（1：30）丸山ケルン（2：00）―（2：35）第1ケルン―ゴンドラ乗場＝＝＝＝桐生

かねてから計画していた八方尾根がようやく実現した。2日PM10：002台の車に分乗し桐生を発つ。18号から406号経由で八方スキー場には3日午前3時頃着く。まだ早いので、これからの大滑降を夢みて、車内で仮眠する。6時頃起きて車をゴンドラ乗場のすぐそばの駐車場に移動する。準備をしてゴンドラに乗る。空は青一色。光線がまぶしい。アルペンリフトを2本乗り第1ケルンに着く。シールを付けガンガン登る。尾根上は赤旗（ほとんど旗が取れているが）が3～5mおきに立っている。第2ケルンやその他のケルン付近は、雪原となっていた。第3ケルンを快調に通過。この付近は強風地帯らしく、石が露出していた。第3ケルンより本格的な登りとなるが、下の樺からの急

登はすぐ終わる。Ｐ２３６１で休憩する。先行パーティはなく、我々が稜線上を独占している。不帰嶮をバックに記念撮影。丸山ケルンでは、天場跡のブロックの中に荷物をその中にデポ。ここから、アイゼン、ピッケルでスキーを引き２５５４にスキーをデポ。唐松山頂を目指す。丸山ケルン先は、尾根も細いので、強風の時は、スキーを下にデポしておいた方がいいだろう。２５５４から唐松岳までは、両側が切れているので気を使う。山荘から、唐松は目と鼻の先。右の雪庇に注意しながら山頂に立つ。３６０度の大パノラマである。白馬岳、五龍岳、鹿島槍エトセトラがバッチリ見える。キャッホー。このすばらしさは一体何だ!!感動に顔をひきつらせて、スキーデポ地点まで一気に行く。この途中、白い衣をまとった雷鳥三羽。一羽は雄で目のあたりが赤く、きれいだった。荷物のデポ地点から標高差１８００ｍの大滑降。メンバーは、雪面に思い思いのシュプールを描く。メンバーの皆は、素晴らしさにはしゃぎまくり、転んだりエアリアルをしたりして、アッという間に第１ケルン。ゲレンデでは、荷物をしょった我々は、人目を引いた様だ。かなりのスピードで、途中の休憩所まで滑り下りて、ビールを飲む。ゲレンデは、コブだらけで、それなりに面白かった。１８００ｍの標高差は滑り甲斐があり、天気もよく最高だった。豪壮な景観とあいまって雪山の醍醐味を充分味わえたすばらしい山行であった。

ＰＳ，　ゴンドラ（アダム）料金　１人６００円＋荷物代１００円／１０ＫＧ
　　リフト代　１回　１６０円
　　駐車料　１０００円／１台　　でした。
　　また桐生から片道約２５０Ｋです。

仙ノ倉谷東ゼン

日　　時：１９８６年8月１３日
メンバー：藤井（工４），伊藤（大）（工４），新田（医ＯＢ），高橋（工ＯＢ），堀尾（工ＯＢ）
タイム：山荘（７：００）――東西ゼン出合（８：３０）――稜線（１１：３０）――仙ノ倉山（１２：００）――イイ沢出合（１：４５）

お盆の山荘での年中行事となっている沢登り、まずは東ゼンを溯行。ひさしぶりの沢登りにメンバーは前夜、酒の量をひかえる程の息込み様。東西ゼン出合で休止後、大きく波打ったナメ滝を登り始める。中ゼン出合には雪渓が残っていた。大滝２段６０ｍは初心者もいることから、ザイルを使用。プルージックで通過する。今日はいつもより水量が多い。快適なシャワークライムが我々を迎えてくれた。幾つかの滝を通過後２５ｍの滝で高橋さんが我々に追付く。なんと氏は山荘から２時間余りで来たそうだ。三ノ字沢出合から長いゴーロにうんざりしながら、仙ノ倉北尾根にとび出す。ここで昼食。ビールで乾杯!!仙ノ倉山ピストン後、北尾根下降点へ向かう。きれいなササのジュータンの上で、ササセードを楽しむ。イイ沢下降点付近の美しい高山植物をふまぬよう、注意して、ゆっくりとイイ沢を下降した。

魚野川万太郎本谷

日　　時：１９８６年8月4日
メンバー：高橋（教ＯＢ），藤井（工4），土佐（工2），平井（工2）
タ イ ム：山荘（７：００）═══取水口（７：３０）────（１：３０）谷川岳オキノ耳────ノ倉岳
────茂倉岳────（５：００）茂倉新道入口═══山荘

本当は西ゼンに行く予定であったが、高橋さんの希望で今日は万太郎本谷となる。車を茂倉新道入口におき、すぐ川へ降りて溯行を開始する。日帰りの予定だったので、ゴーロは走るように溯行する。滝はすべて、直登、トロは岩魚のごとく泳いで通過する。天気がいいので大変気持がいい。高巻するのがもったいないぐらいだ。デトノタキ沢出合後の一ノ滝は私（藤井）がトップでザイルを使い右壁を直登。残置ピンは４本程度。確保地点にはボルトが２本あった。ザイルの長さに余裕があるなら、さらに７ｍ程右上し、灌木を確保地点にしてもいいだろう。高巻く場合は、少し戻って左岸より登る。三ノ滝は１段目は水流右を直登、２段目右側の細い水流の途中から左手に行く。ここを過ぎると、後はちょっとした小滝がある程度。奥ノ二俣に着く頃は、泳ぎ疲れ？のためか、ドッと疲労が出てあえぎながら稜線に向う。ＰＭ１：３０ようやく稜線に出て大休止。稜線上は家族連れの登山者が多かった。下降路は茂倉新道を利用。ひさしぶりの長い沢でくたびれました。

仙ノ倉谷西ゼン

日　　時：１９８６年8月１５日
メンバー：高橋（教ＯＢ），土佐（工２）
タ イ ム：山荘（９：００）────東西ゼン出合（１０：３０）────平標山（１２：００）────山荘（
１５：００）

山荘を６：００出発の予定であったが、雨がパラついていたので、しばらく待つ。あまりパッとしない天気だが、雨は上った様子なので、堀尾さんとともに山荘を出発する。堀尾さんは別行動で平標新道を登り、平標山の頂上で我々と落ち合うことになっている。

連日、山荘から沢登りに行っている高橋さんは、その疲れをものともせずに、出合まで快調に飛ばす。後からついて行く者にとっては、ひたすら大変であったが、出合までアッという間に着いてしまった。

出合いからは、ワラジのフリクションを確かめるようにしてナメを快適に登る。見上げると、西ゼンのスラブが目前に大きく広がっている。第１スラブ，第２スラブと登りつめて下を見ると、かなり傾斜感がある。スリップに注意しながら第２スラブを登り切ってしばらく行くと沢は次第に細くなりいよいよ稜線を目指してのヤブこぎとなる。稜線に出てからは、平標山のなだらかな尾根と、あたりに散在する池塘を眺めながら登山道をゆっくり歩く。平標山頂からは人の声とラジオの音が聞え、結構にぎわっているらしい。山頂に到着すると同時にラジオから正午の時報が聞えてきた。昼食を食べ

ながら堀尾さんを待つが、なかなか姿が見えないので下ることにする。西ゼンのスラブを横に見ながら平標新道を駆け下りる。天気が良ければ、さぞかし気持ち良かったであろう。

登川　　米子沢

日　　時：１９８６年１０月５日

メンバー：藤井（工４），山中（工４），小池（工４），豊島（工ＯＢ）

タ イ ム：桐生（７：００）――米子橋（１０：００）――（１：００）稜線――（２：３０）米子橋

桐生を４時に出発する予定だったが、全員寝坊。関越自動車道を使い、時速ｘキロで六日町へ。紅葉見物の登山者のためか、駐車場は車が置けないほどの混み様。帰りが遅くなると思い、懐電を持ち駐車場を出発する。どうせ帰りは遅いのだから、ゆっくり行こうと４人は口々に言うのだが、互いにプレッシャーをかけ合ってか、ペースが早い。ナメ沢出合付近で１人の溯行者を抜かす。このペースで前に人が見えない所を見ると、我々は今日入谷した最後のパーティーなんだろう。紅葉はいまひとつで、一週間後が見頃か。１２ｍスダレ状付近より、溯行者を抜かす人数も増してくる。上部大ナメで、トイレ掃除に使う吸盤を手に持ちナメを登る人がいた。（ウソではない）私もスラブを登る時、使ってみたい。溯行者をゴボウ抜きした我々は、奥ノ二俣で昼食にする。やはり米子沢は紅葉の時期が最高!!稜線には１時頃着く。山頂はピストンせず、すぐ下山する。１ピッチで駐車場へ。なんと、まだ出発してから４時間半しかたっていない。４人は明日以後、襲ってくる筋肉痛にゾッとしながら桐生へ帰る。

北岳バットレス（ｄガリー～第４尾根主稜）

時　　期：１９８６年９月１３日～１４日

メンバー：小池（Ｋ４）　　藤井（Ｍ４）

タ イ ム：９月１３日　桐生＝広河原小屋（１：００）―（４：００）大樺沢二俣 B_1

９月１４日　B_1（５：００）―ｄガリ―大滝取付（８：００）―（９：２０）第４尾根取付―（１２：００）第４尾根終了点（１２：５０）―北岳（１２：００）―（２：１５）B_1（３：００）―（４：０５）広河原ロッジ＝桐生

９月１３日

桐生をＡＭ４：００出発する。甲府市街で食料の買出しを済ませ、広河原の駐車場には車が多い。広河原小屋に登山届けを提出し、出発する。社会人のパーティーがかなり入山していて、我々と同じルートを登るのは２パーティーいるらしい。入山者が多いため、テン場を白根御池小屋から大樺沢二俣に変更する。明日できるだけ早く出発できるように、二俣からさらに１０分程歩いた所をテン場と

する。天気が不安定で夕食時より、小雨がパラつく。夜は一時土砂降りとなる。

9月14日

3時半起床。まだ小雨がパラついている。5時頃やんだので出発するが、またすぐ降り出す。途中の岩影で様子を見る。またやんだので、とりあえず取付まで行く。取付でまた小雨になったので、ツエルトを張って様子を見る。まことについていない。そうしているうちに2パーティーがCガリー大滝、第5尾根を登り出す。雨もいちおう止んだので、我々も予定の第4尾根下部ピラミッドフェースをパスし、dガリー大滝より取付く。dガリーはべっとりと岩が濡れていて、非常に気をつかった。4Pで緩傾斜帯へ。そこから左へ横断バンドをトラバースする。ここの途中、上下にルートが分かれているが、これは下の方を行ったほうが正解。Cガリーに出て、灌木帯の踏み跡を登る。すぐテラスに着くが実はここは第4尾根主稜の取付ではない。ここで先行パーティーをぬかす。我々はそこからリッジを登る。他は右に回りこんだ踏み跡を行ったらしい。取付に着くと、さらに先行パーティーに追いつく。5ピッチ目の4尾根の核心部5mのフェースはビトン沿いに登ると少々むずかしい。ただし右に逃げれば容易に登れる。マッチ箱の頂では、アプザイレンの順番待ち。マッチ箱のコルはなくなっていて、昔のガイドブックの写真の様になっていないから注意。ここから2ピッチでハイマツテラスに終了。この頃になるとガスが消え始め、時々二俣が見えたりしていた。北岳は終了点から約15分。山頂には多くの登山者がいた。多分、学生として北岳に来るのは、これが最後だろうと2人で話しながら、仙丈岳、甲斐駒ガ岳を見る。2年前、冬山でまっ白に雪化粧した仙丈、甲斐の感動的なSCENEが、よみがえってくる。4年生になって、以前に比べると、グッと入山日数も減ったが、「山を忘れた渡り鳥」にはなりたくないものだ。山頂でちょっぴり、センチメンタルになった二人の年寄は、ただひたすら惰性でビールと芦安鉱泉で入浴するのを楽しみに、下山するのであった。

おわり。

さらば，我愛しの"皇海"

日　　時：1986年11月16日

メンバー：山中　卓（工4），坂本　敦（院2），藤井修一（工4），伊藤倫恵子（医短OG）

タ イ ム：桐生（11：40）═══根利═══不動沢（14：00）────（15：22）皇海鞍部（15：22）────（16：08）皇海頂上（16：14）────鞍部（16：35）────不動沢（17：24）

今年の夏、根利小で教師をしている教育OBの高橋氏より、"林道を使えば、皇海は往復3時間だ"という話をきき及び、長老となってしまった私達が、重い腰をあげたら、今日になってしまった。

車で大間々から、沼田にぬける林道を使い、更に、根利より老神にぬける林道を使う。根利からの林道は、石が、いたるところで落ちていて、ガードレールすらなく、更に追いうちをかける様に、小雪が舞い、恐れおののきながら、不動沢まで行く。

車の中で、I嬢の作ってくれた弁当を食べ、不動沢ぞいの林道の終点まで車ではいる。車の外は、

猛烈な寒さ。S氏は、安易に考えすぎて、Gパンにドレーナー。Y氏も手袋すらもたず、あわてて車から手袋をみつけだす。寒さに震えながら、I嬢の強行に行こうという意見で。老人3人、しぶしぶ出発。枝沢より不動沢にはいり、不動沢ぞいにある、多数の赤ペンキ、赤布をたよりに進む。昨日のコンパの影響か、ペースはゆっくり。S氏はピークにつくまで、下ばかりみて歩いていたため、2度も木に頭をたっぷりぶつけ、その度に、その場に座り込んで痛がっていた。少し登りが急になるあたりから（沢の）雪が現われ始める。1週間ぐらい前の雪らしい。鞍部から、皇海ピークまで意外に距離がありまだか、まだかと思いつつ歩いた。踏み跡は、鞍部から少しの間は稜線の右より、その後左よりにある。木々は霧氷がつき、地面は白く、幻想的世界である。霧氷をバックに記念撮影。幻想的世界に、いきなり現実的なカラーがはいると少し異和感。

皇海頂上、全く展望なく、プレートのみが目につく。寒いので、リンゴをかじりつつすぐ下る。不動沢を下っている途中、あたりは、どっぷり日が暮れ、ヘッドランプたよりに下る。途中、鹿の鳴き声が、妙にものかなしさをかもし出す。無事車まで帰りほっとする。

今回行った工学部老人3人のうち2人は、ブタ山だと言っていたが、筆者は、幻想的な初冬の大変良い山であったと酒を飲みながらしみじみ思った。

珍らしいことに、今回行った4人が4人とも皇海は初めてであった。桐生に帰り、"舞宝夢"で食事をし、F氏の下宿でウダウダしているうちに、私達の1日は、どっぷりと暮れたのであった。

沢登りの為に（主に利根川源流について）

85年の沢登り計画段階において、OBの大田稔さんより、利根川源流遡行についての、幾つかの大変参考になる御意見を頂きました。残念ながら、源流遡行は中止となってしまいましたが、紙面をかりてここへ転載させて頂きます。

1. 八木沢ダムより水長沢出合までは、参考となる本なども古いため、7時間の行動時間では無理がある。太田さん等の行動時間は

   八木沢ダム—5 h—割萱ノ沢川—7 h—水長沢出合　（1979年　工学部夏合宿）

   ・・・・・鉱山跡の道はほとんどヤブこぎ。

2. 東千ケ倉付近は道がわかりずらいので注意して進む。東千ケ倉からは良く踏まれたトラバース（同一方向のトラバースなのでつらい。）

3. エスケープルート及び方法について

   3.—1　エスケープルート

   尾根通しのエスケープを考えよ。

   ○沢通しのエスケープルートでは、増水時利用できない。

   ○尾根はあらかじめ目ぼしをつけておかないとゴルジュ帯にいた時、エスケープできない。

   3.—2　常にエスケープできる態勢を整えておく。（特に天幕）

   増水時にでもエスケープできる様にテントから手の届く所にエスケープ用のザイルを必ず

張っておく。（夜、気付いた時には増水時で対岸に渡れない事も有る）

4.雪の多い時のスノーブリッジの通過について

○必ず１人づつ通過する。

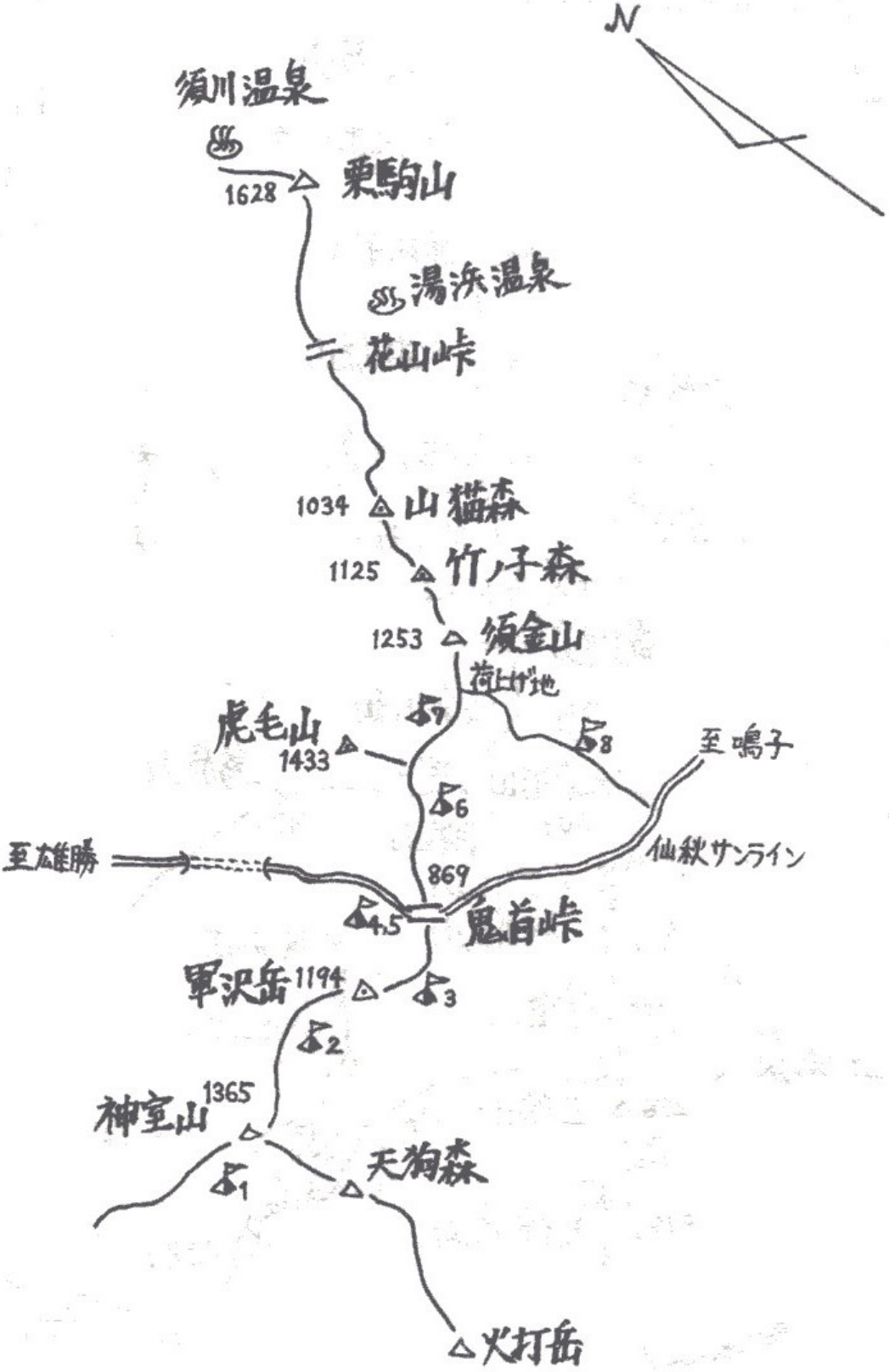
○事前にブリッジの有る場所はわからないかも知れないが、可能なら、朝気温の低いうち通過する。

5.装備について

沢の両サイドがつるつるの草付きで、アイスハンマー２本ないとトラバース等の時、手が出ない所が有る。

アイスハンマー１本とピッケル１本、または、アイスハンマー２本有ると良い。

1982年度 夏合宿 概念図
神室山～栗駒山

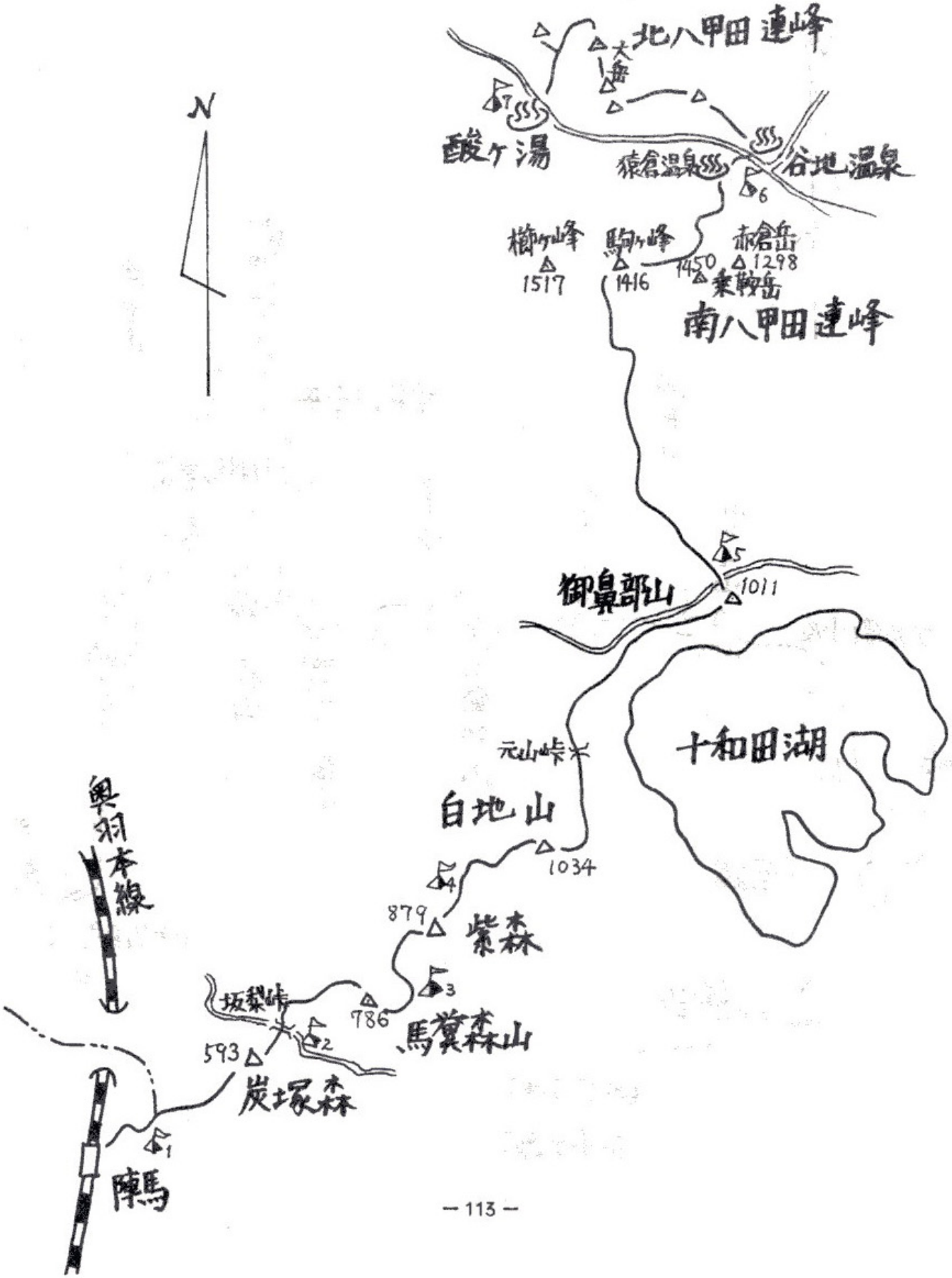


1983年度 夏合宿 概念図

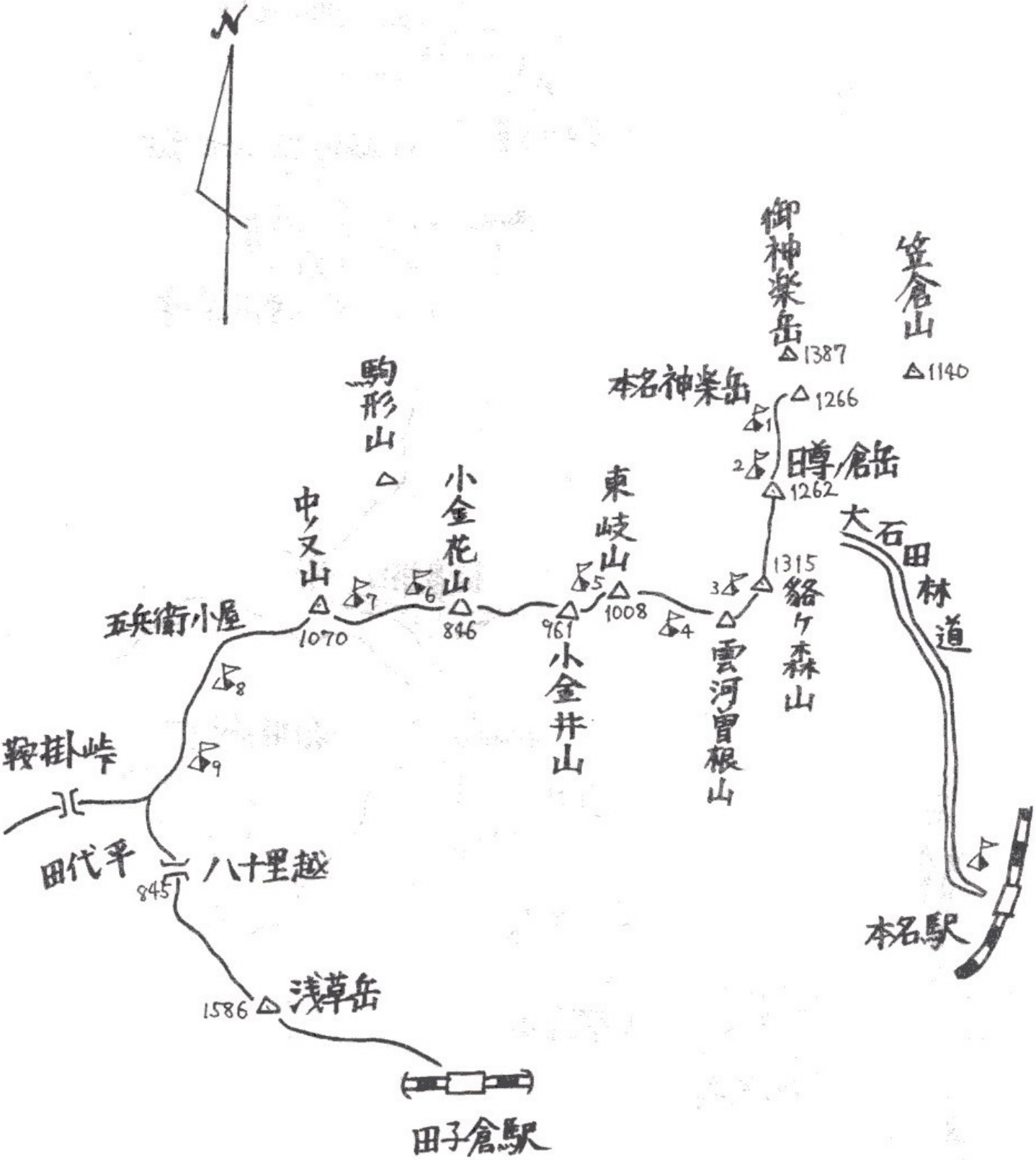
朝日連峰 及び 月山

1984年度 夏合宿 概念図

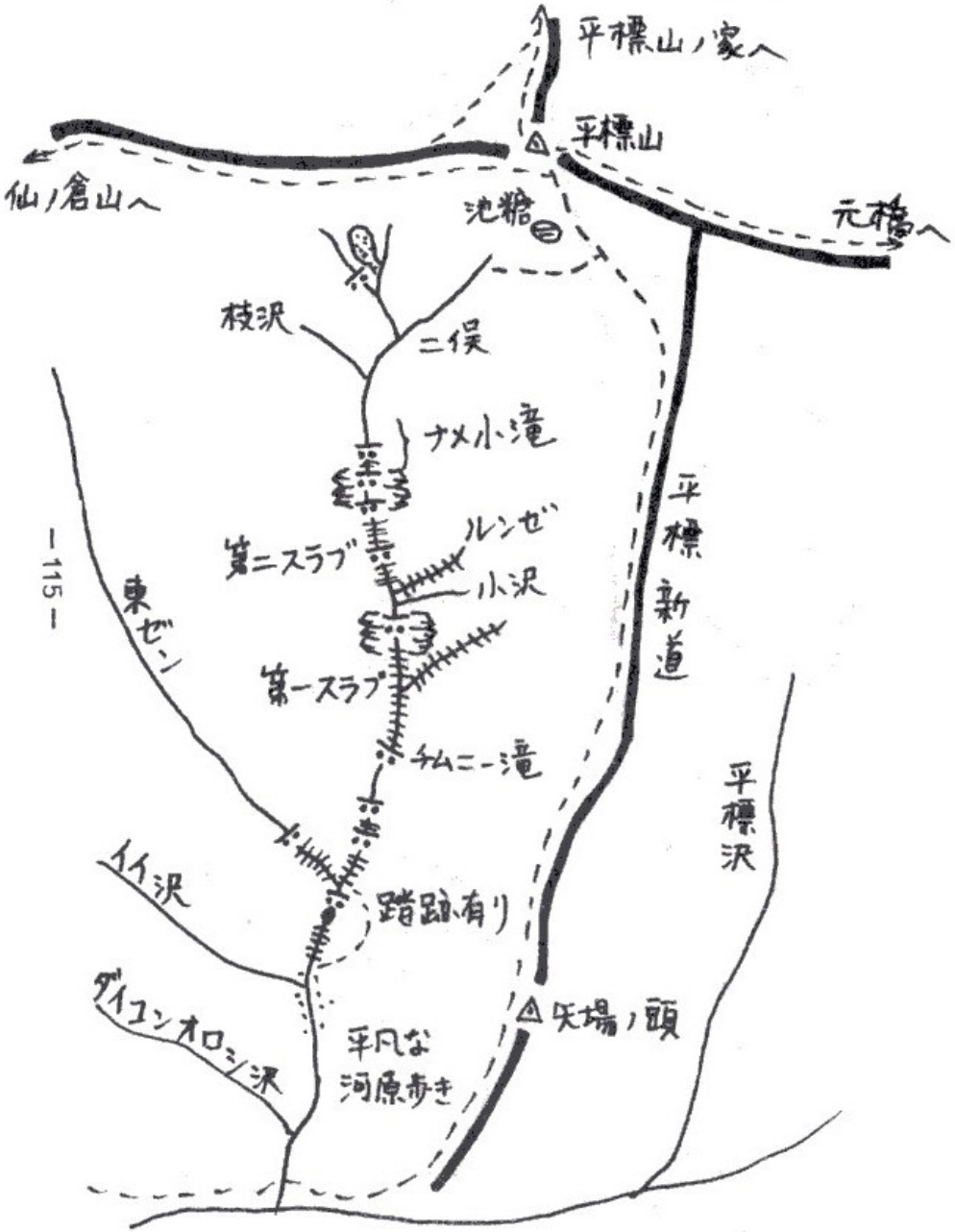
青森~秋田県境
十和田湖，八甲田連峰



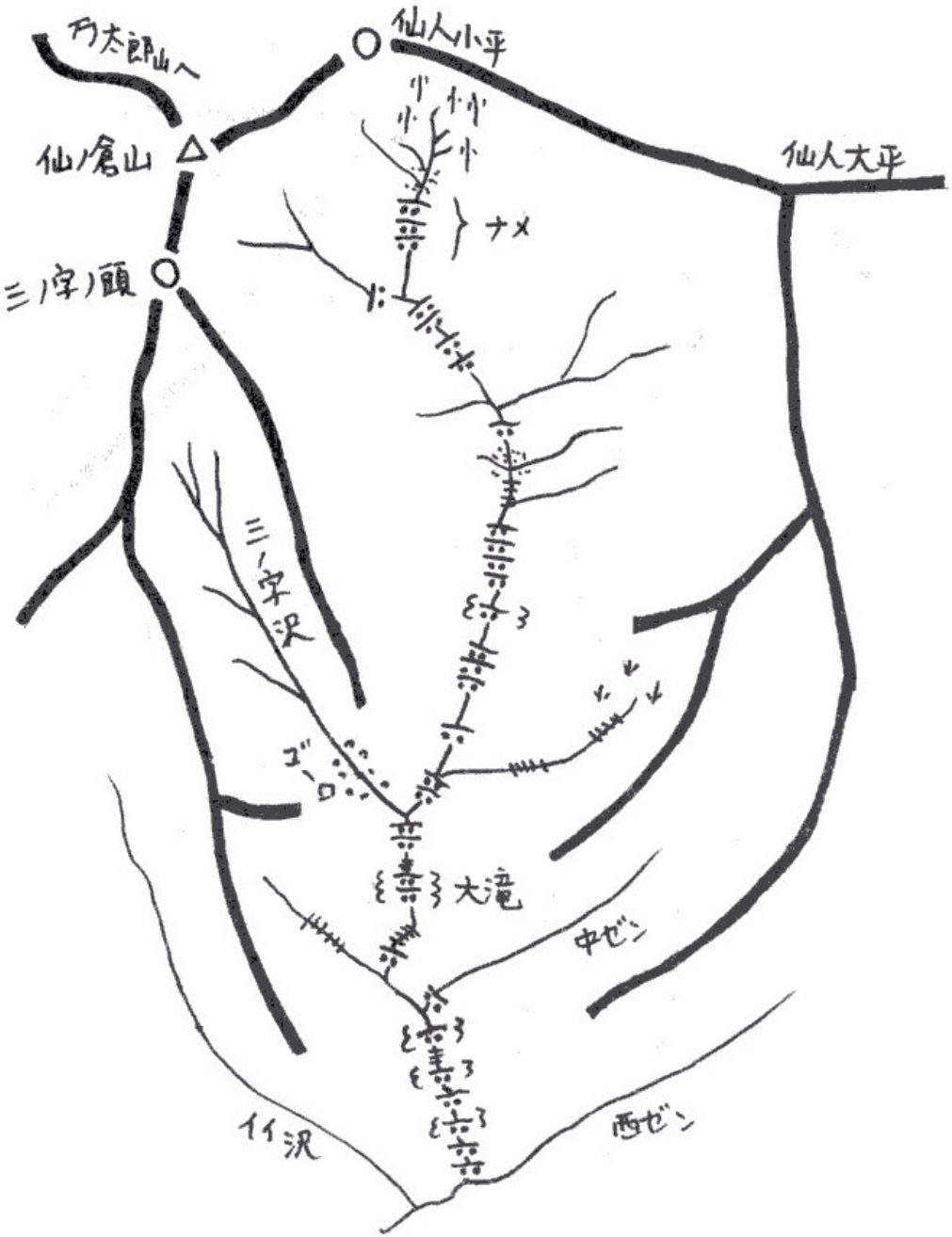
1985年度 夏合宿 概念図
会越 国境縦走



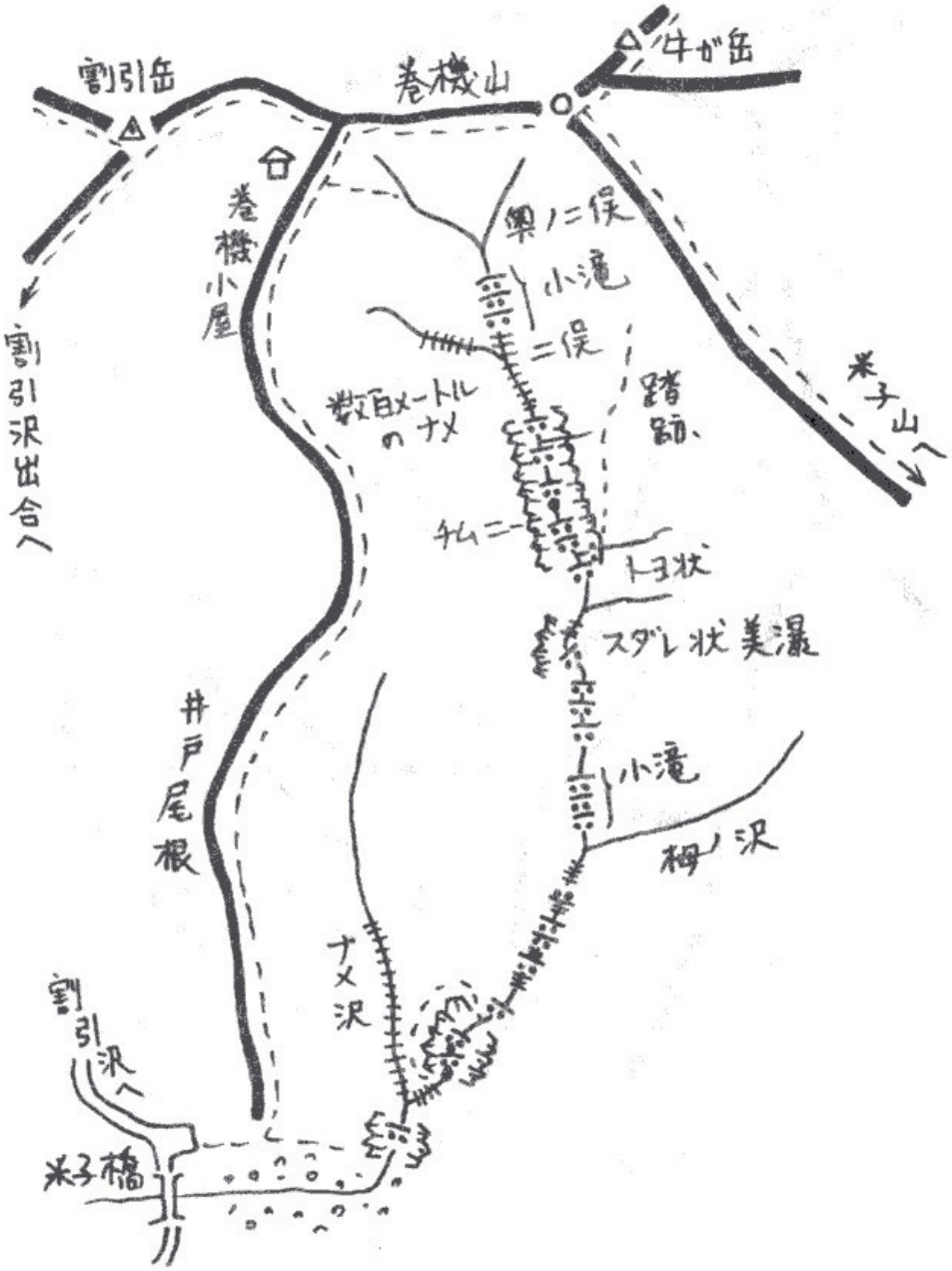
仙ノ倉谷西ゼン



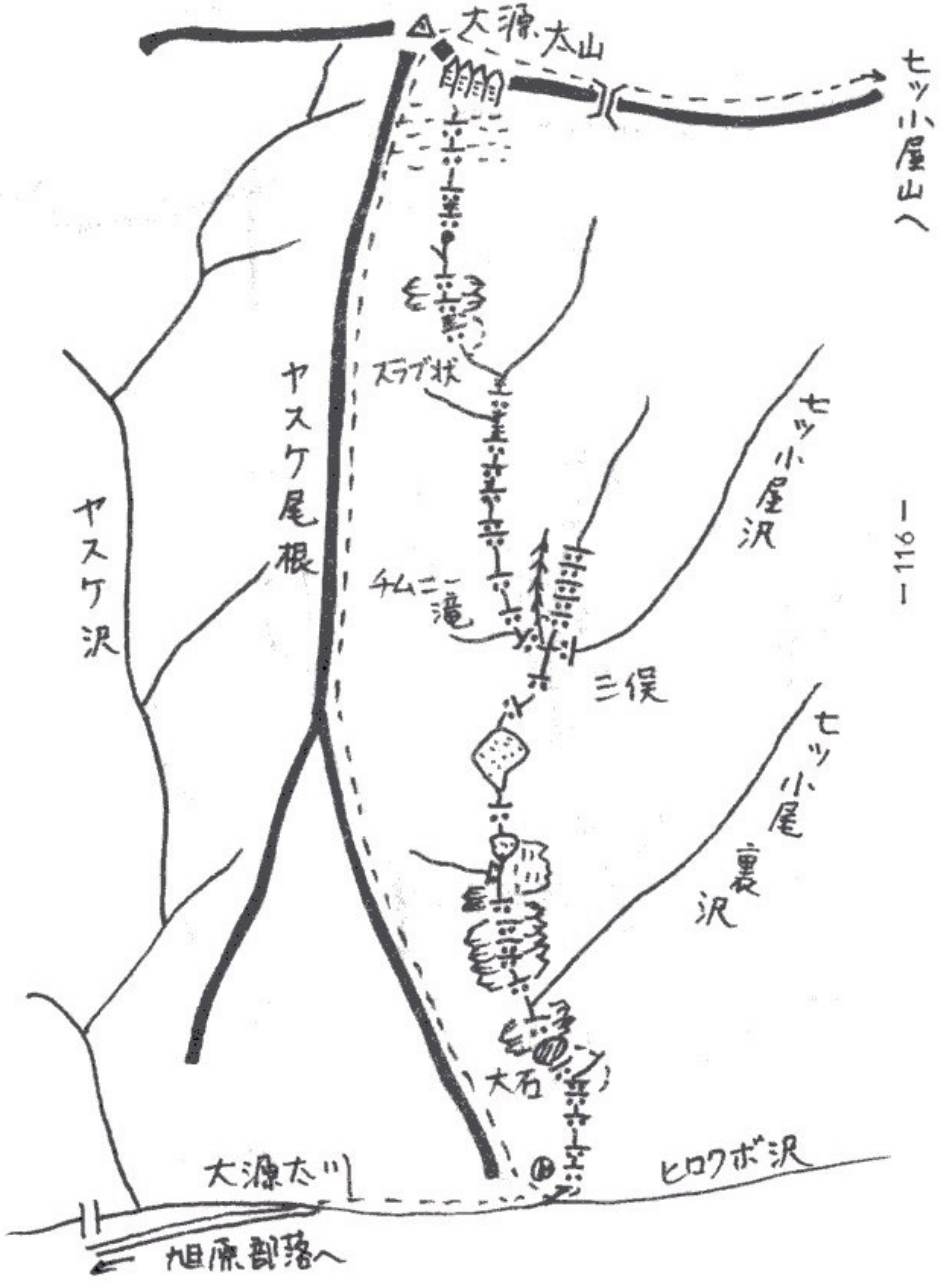
仙ノ倉谷東ゼン



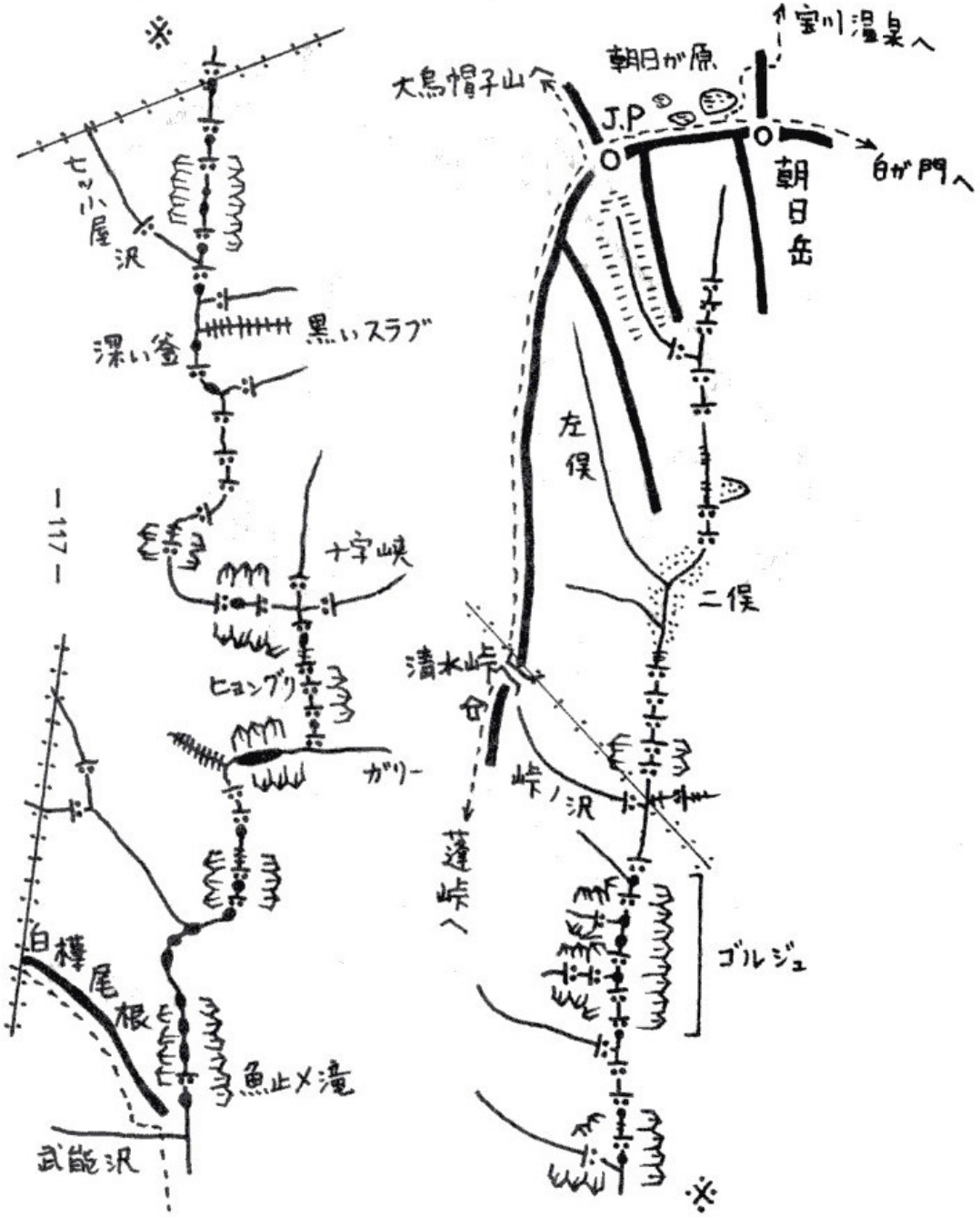
登川米子沢



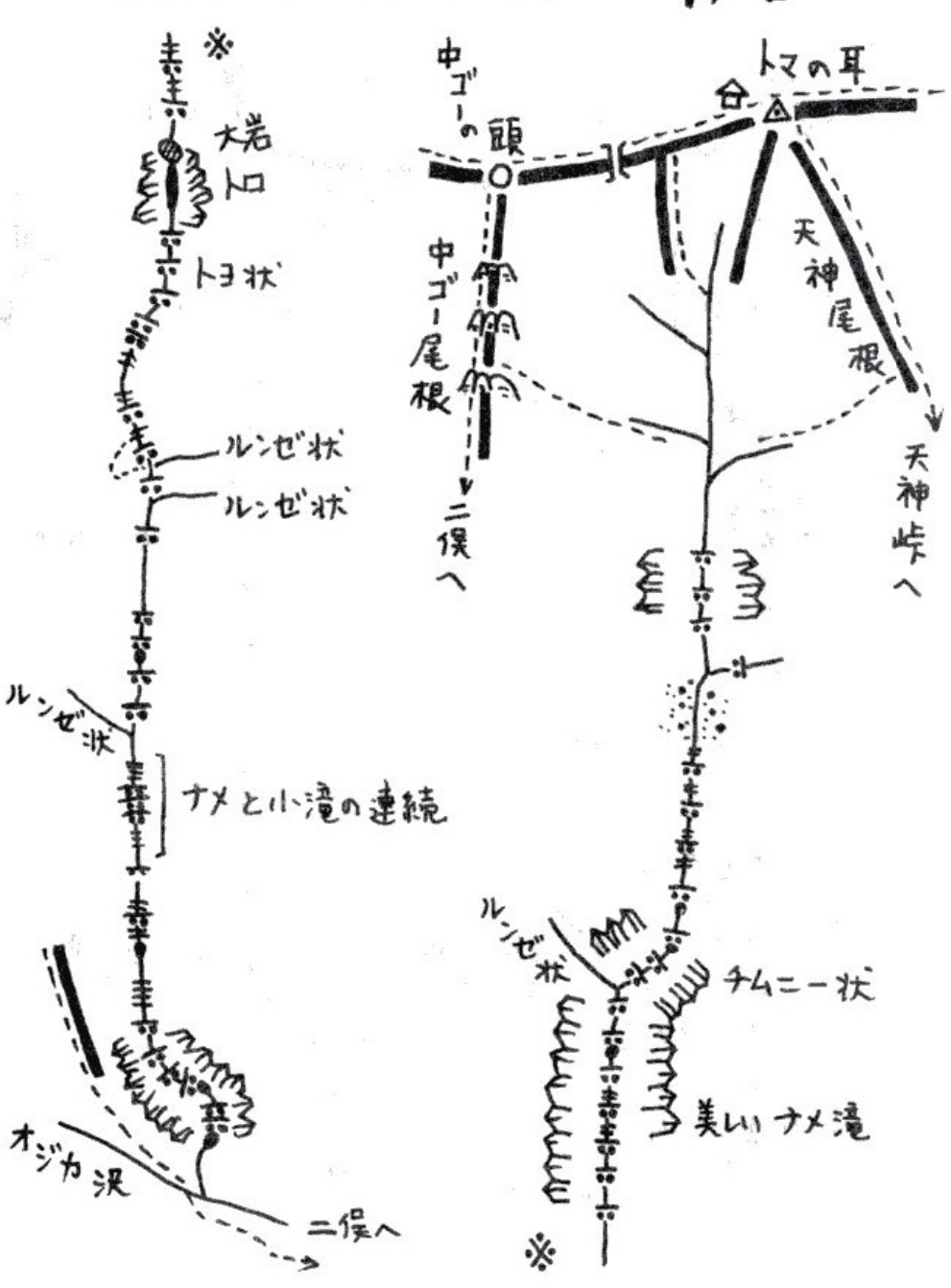
大源太川北沢



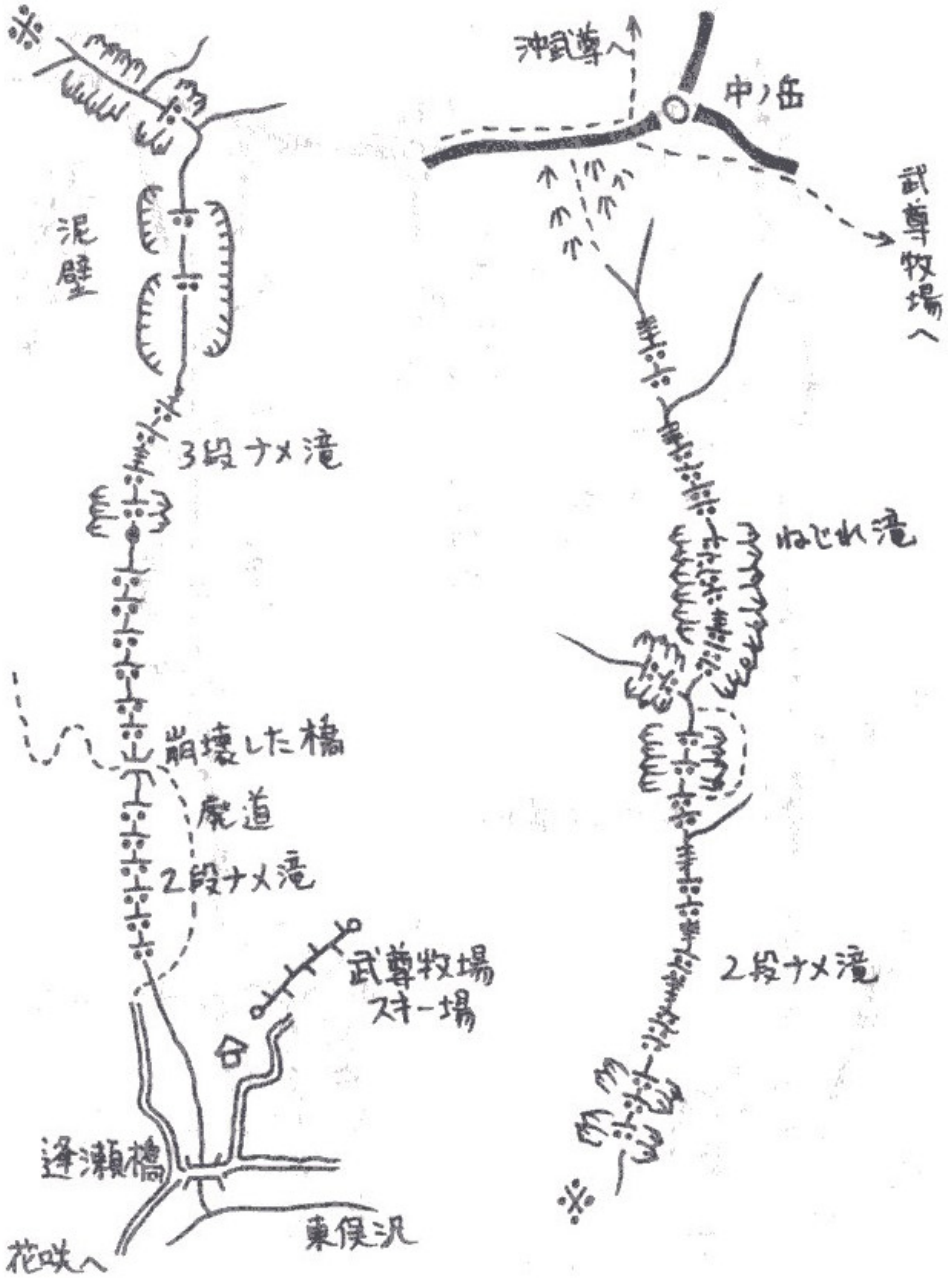
湯檜曽川本谷



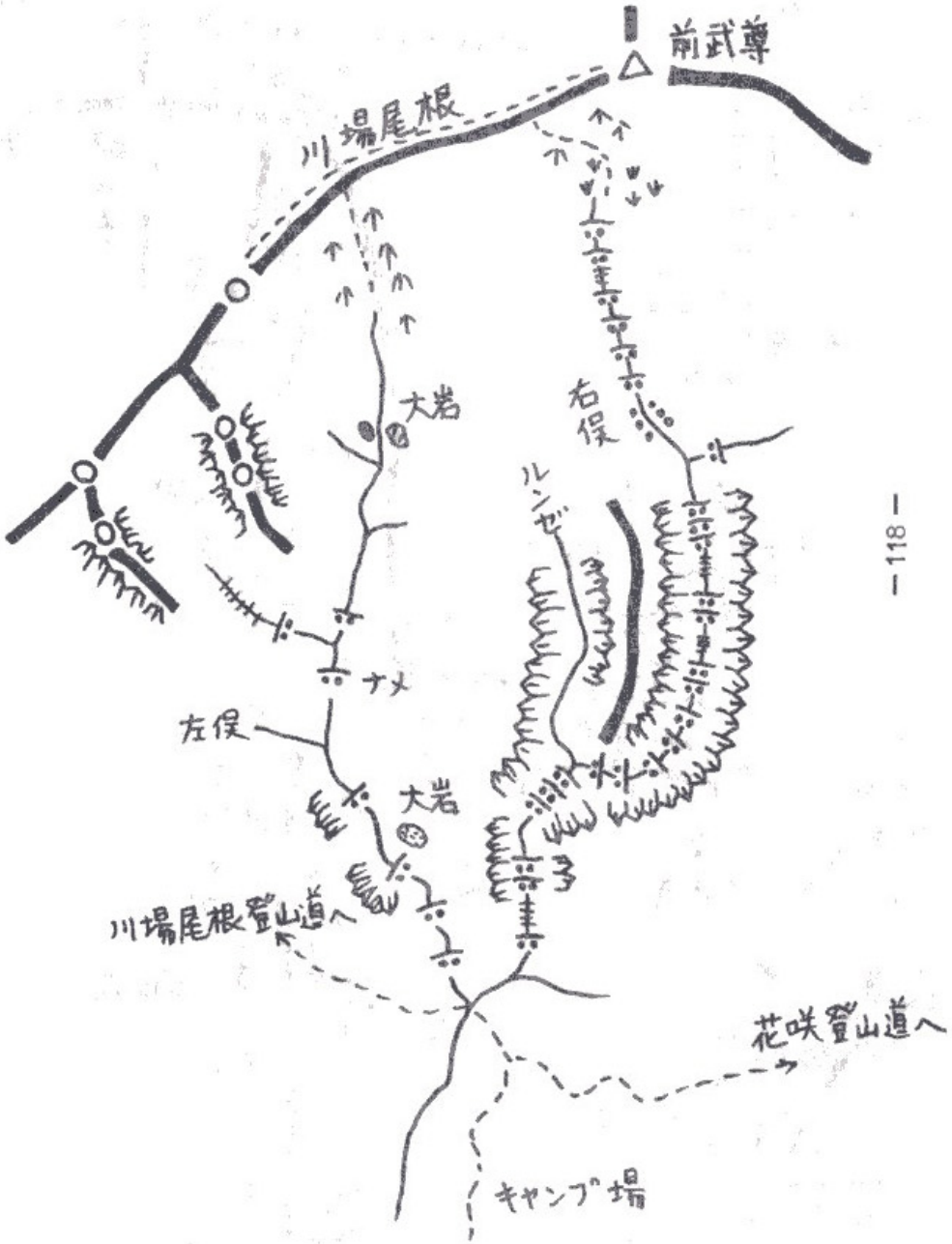
谷川ヒツゴー沢



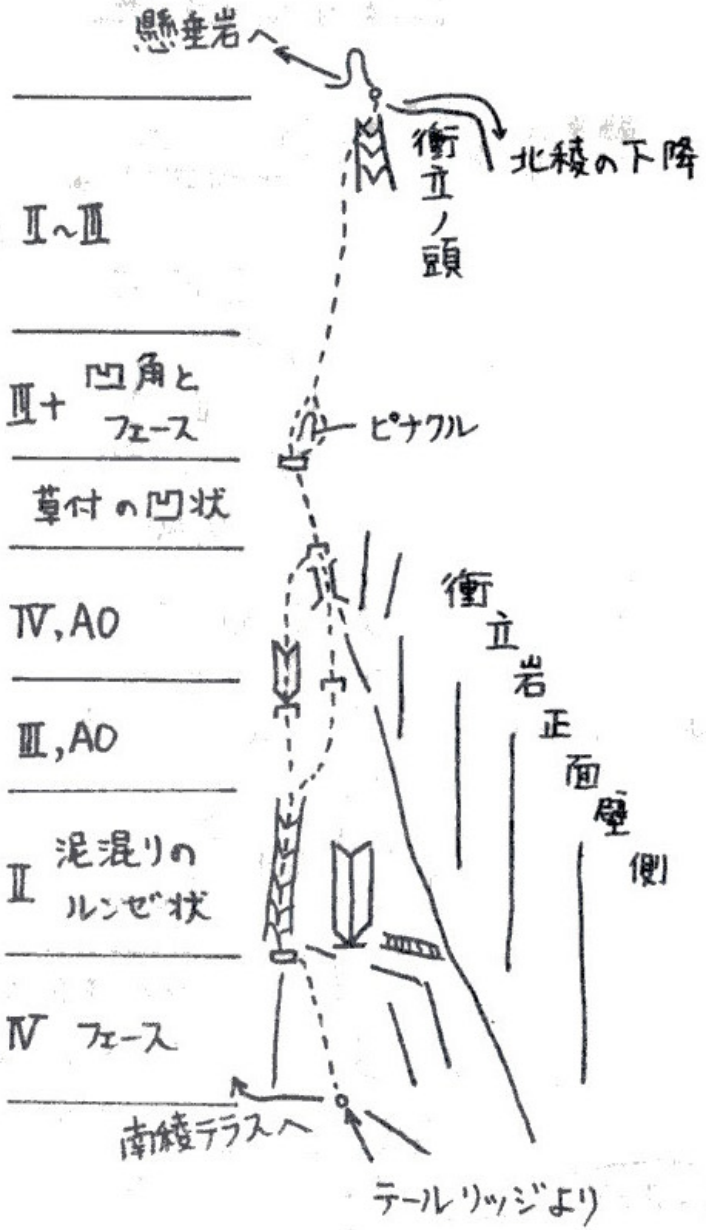
上州武尊西俣沢



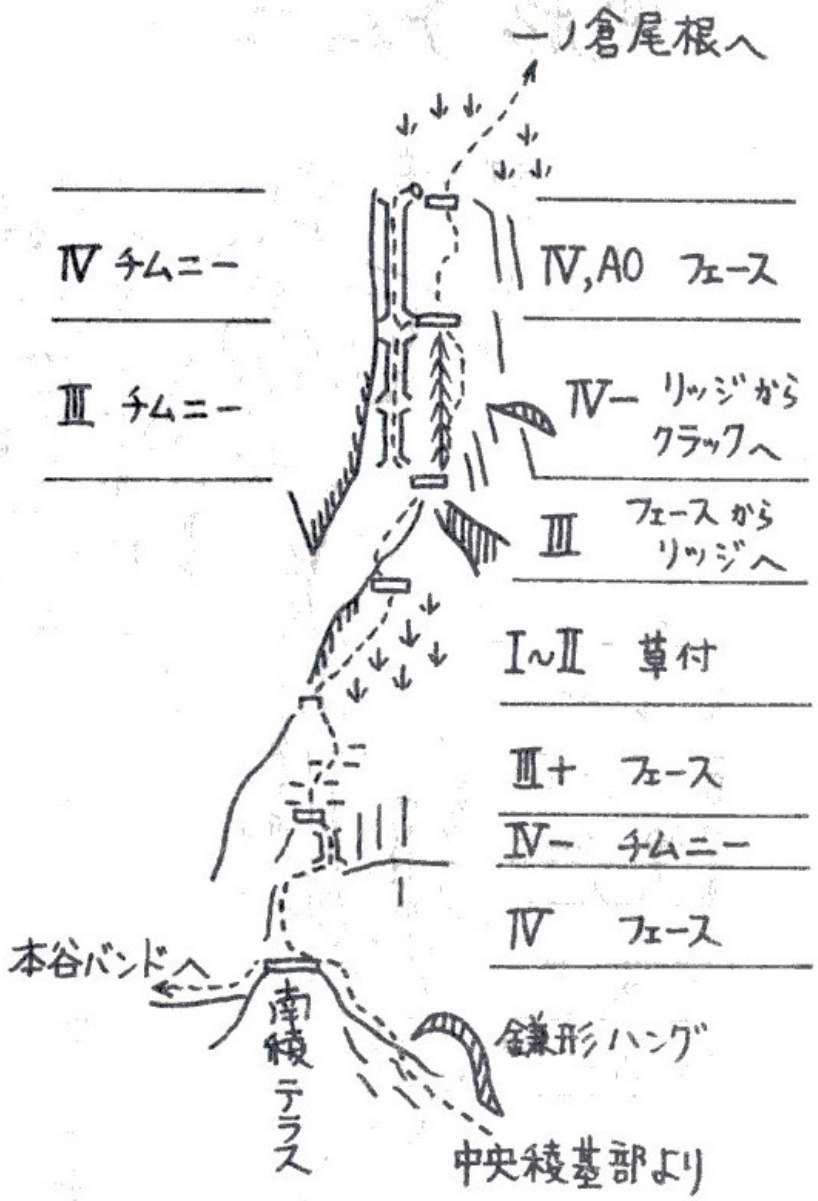
上州武尊荒山沢



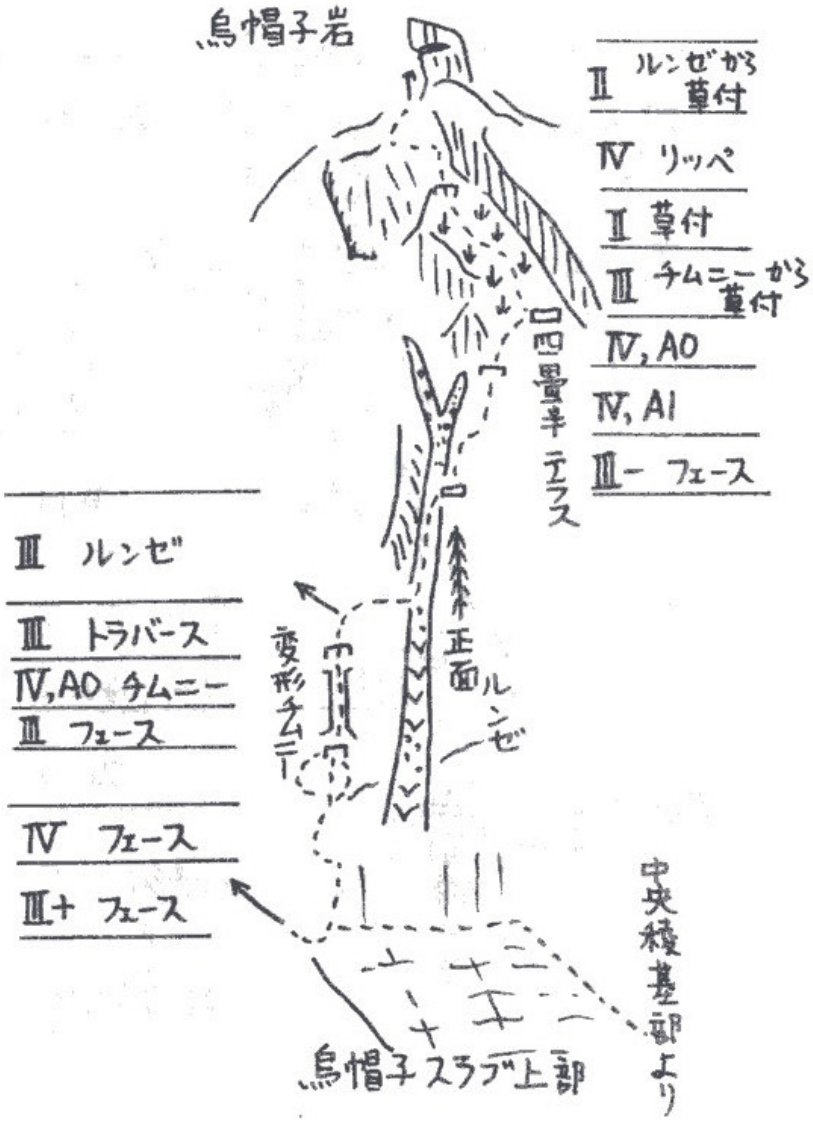
一ノ倉沢 中央稜



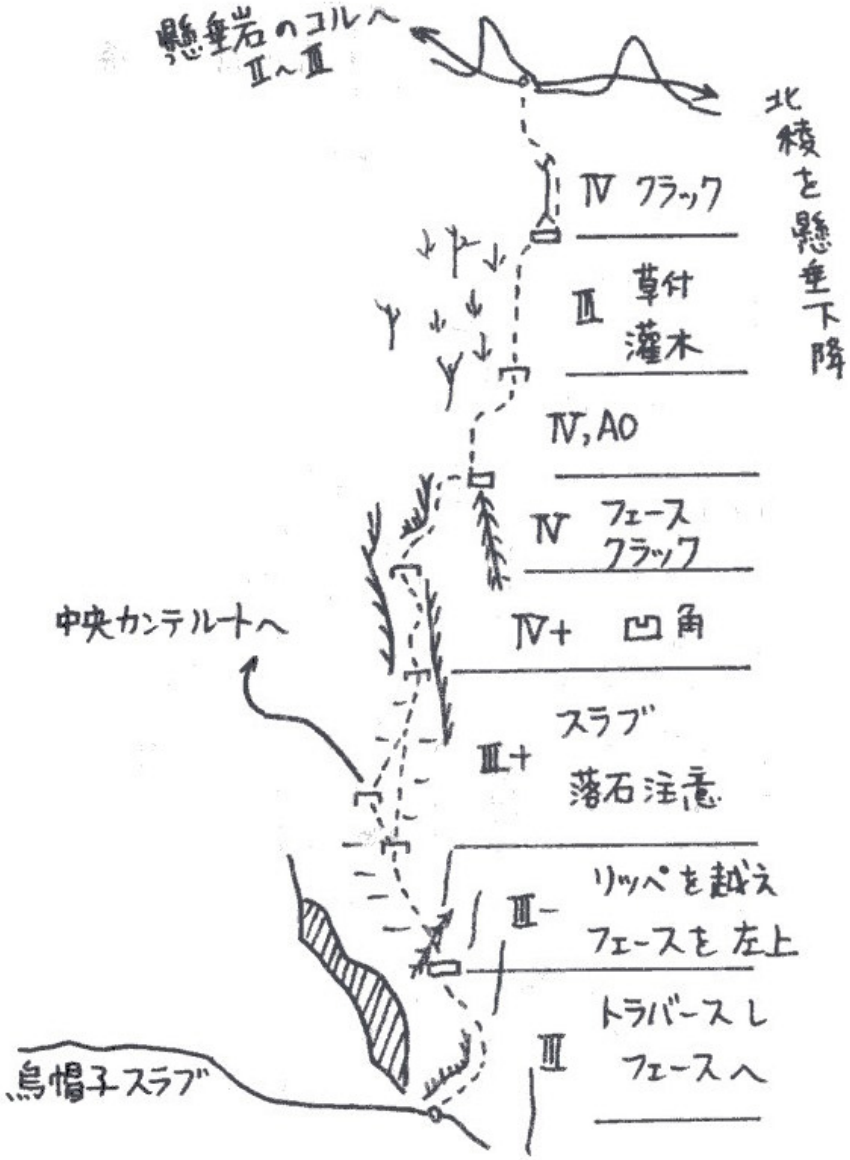
一ノ倉沢 南稜



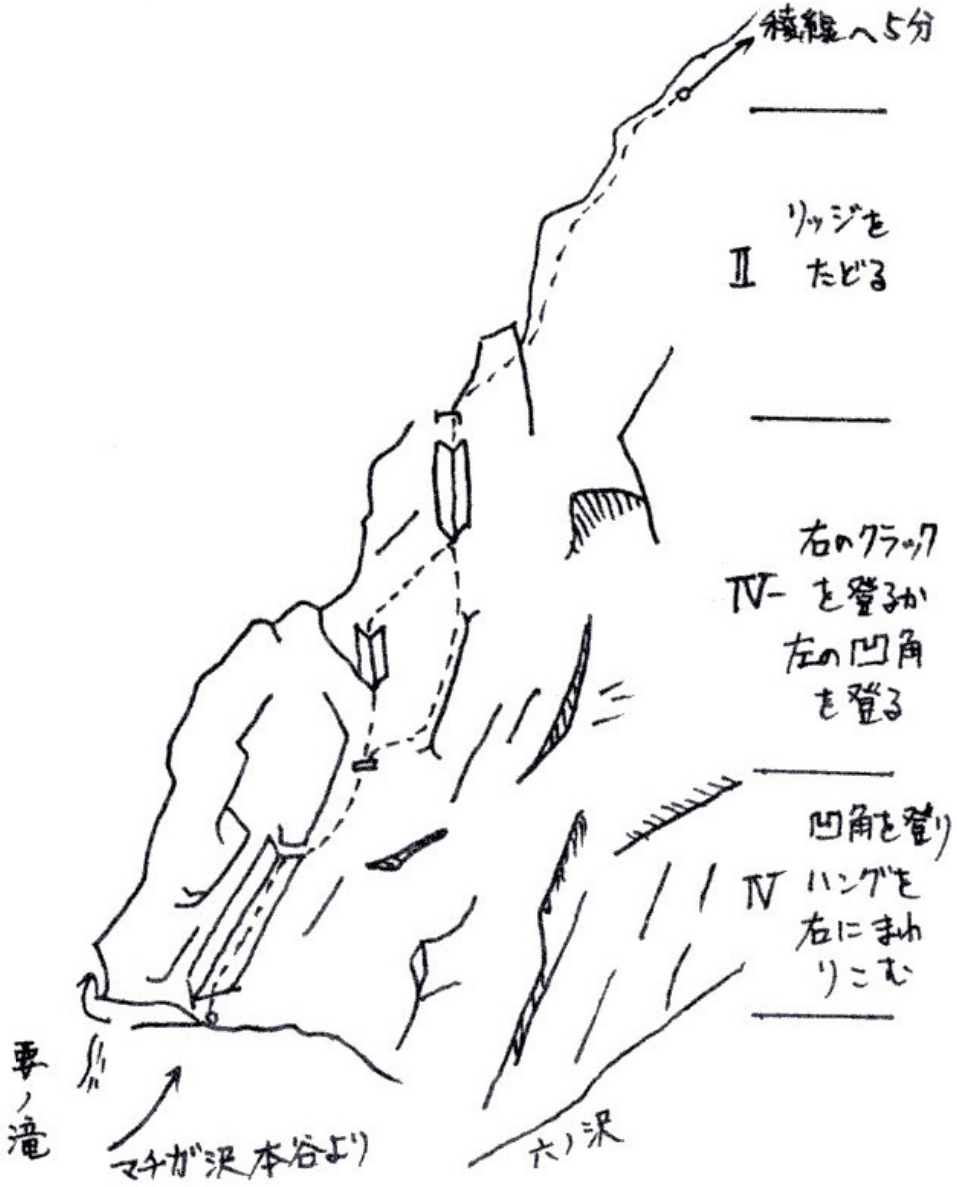
一ノ倉沢 烏帽子沢奥壁
変形 チムニー



一ノ倉沢 烏帽子沢奥壁
凹状岩壁



マチガ沢東南稜


稜線へ5分
リッジを
Ⅱ たどる
右のクラック
Ⅳ- を登るか
左の凹角
を登る
凹角を登り
Ⅳ ハングを
右にまわ
りこむ
要ノ滝
マチガ沢本谷より
六ノ沢

O　B　住　所　録

氏　名	卒業年・科	勤務先・住所	TEL
宇田川　紘	40E	(財) 関東電気保安協会 〒376 桐生市相生町5−707−9	02775−3−9515
岩下佳司	41W	日清紡㈱ 〒350 川越市東田町4−11	
新井靖衛	41C	東洋パルプ㈱ 不　明	
浅海玦二	41S	不　明 不　明	
鳥居寛治郎	41M	千野製作所㈱ 〒370−33 群馬郡榛名町下室田甲942−2	02737−4−1249 02734−4−1404
見供滋忠	41M	三菱油化エンジニアリング㈱ 〒222 横浜市港北区大豆戸町834−2　大倉山ハイム6−604	045−541−0148
鳰原恵二	41E	㈱くろがね工作所 〒330 大宮市三橋市3−142−15	0486−45−4438
藤村孝道	42S	モーリン化学㈱ 〒329−42 足利市駒場町770	0284−91−1747
内田邦夫	42M	神戸製鋼所㈱ 〒673 明石市沢野1丁目17−13	078−927−1207
田沼正也	42M	㈱パブコック日立 〒231 横浜市中区間門町2−299 パブコック日立　間門社宅11号	045−623−1087

朝倉正博	42E	㈱クラベ 〒432 静岡県浜松市佐鳴台2−20−10 エンゼルハイツ201	0534−49−1905
大塚光守	42E	東芝電気器具㈱前橋工場 〒371 前橋市古市町　東芝電気器具寮	
鹿山　公	42S	興国化学工業㈱ 〒373 太田市龍舞町2070	
小林弘一	42C	明成商会㈱東京営業所 〒362 埼玉県上尾市錦町2の12	0487−75−5030
深沢　鼎	42教	太田女子高校 〒371−02 勢多郡粕川村前皆戸14	0272−85−3660
川田祐一	43W	塚田産業㈱ 〒326 足利市元学町823	
小島　昭	43S	群馬工業高等専門学校工業化学科 〒376 桐生市本町4丁目338	0277−22−7055
横尾国夫	43M	横尾製作所㈱ 〒322−03 鹿沼市西沢町388	0289−77−2264
金子岩男	43K	日東製粉㈱ 〒340 草加市栄町松原団地B−46−7	
五十嵐信之	43K	東洋インキ製造㈱ 〒336 浦和市南浦和公園住宅42−501	
久保田耕司	43K	東芝セラミック㈱ 不　明	
藤井幸吉	43M	ソニー㈱ 〒259−11 伊勢原市高森5−5−302	0463−94−6998

斎藤　譲	44S	群馬県土木部下水道課 〒371 前橋市岩神町3−4−9	0272−34−3054
原　文雄	44K	日本酸素㈱ 〒367 本庄市北堀1479 （USAニュージャージー）	0495−22−6818
江黒　茂	44M	東武鉄道㈱ 〒360 熊谷市本石1丁目300	0485−22−1847
横山崇雄	44C	倉敷紡績㈱ 〒662 西宮市両度町3−3−403	
小沢達樹	44W	群馬県工業試験所 〒371 前橋市小相木町488−1	0272−51−6524
松田衛次	45L	東京三洋電機K・K自動販売機(事) 〒373 太田市内ヶ島1574	0276−45−5299
草場　彰	45院E	日立製作所㈱戸塚工場 〒244 横浜市戸塚区戸塚1013−5	045−861−4764
中島好司	45S	日本楽器㈱ 不　明	
加藤芳彦	45W	不　明	
山田定男	45M	古河アルミニウム㈱日光工場 不　明	
上山　悟	45K	大気社㈱ 〒156 東京都世田谷区経堂3−25−23	03−426−2789
埋橋文人	45M	日立製作所㈱ 不　明	

根岸秀幸	45M	ソニー㈱ 〒135 東京都江東区東陽4−12−20−1213	03−646−4108
須藤　誠	45E	富士通㈱ 不　明	
中島恒弥	45E	三菱電機㈱ 〒616 京都市右京区嵯峨二尊院門前往生院町6	861−3589
木村隆男	45院C	電々公社 不　明	
岡部宣男	45S	足利学園高等学校 〒326−01 足利市板倉町800−4	0284−63−1164
斎藤勝男	45M	群馬大学工学部 〒376 桐生市相生町5−102−19	
滝野哲司	46C	沖電気㈱本社工場 〒370−31 群馬郡箕郷町生原1745−1	0273−71−2043
高橋撤夫	46D	クラレ㈱ 〒793 愛媛県西条市神拝乙130 クラレ局社宅16号	08975−5−4896
堀江英雄	46L	コペル電子㈱足利工場 〒326−02 足利市月谷町1275−13	0284−41−0502
宮川英雄	46W	不　明 〒280 千葉市高洲2−5−9−302	0472−44−8335
大橋　進	46W	不　明	
鳥居寿一	46P	出光興産㈱ 〒246 横浜市瀬谷区阿久和田3662	
河野政美	46P	昭和ゴム㈱ 〒277 柏市酒井根551−54	0471−75−0989

五十嵐和男	46W	トヨタ自動車工業㈱ 〒441−63 愛知県宝飯郡御津町赤根氷神11−1	
吉野　栄	46C	出光興産㈱ 〒213 川崎市高津区宮前平3−2−4 宮前台マンション101号	
浅見武義	46L	日本ビクター㈱ 不　明	
太田　博	47L	タケダ理研工業㈱大阪営業所 〒663 兵庫県西宮市高須町1−1−6−320	0798−46−1350
斎藤　功	47M	大和設備工事㈱ 〒375 藤岡市東平井1265−3	02742−3−5794
広田雅司	47院W	帝人㈱ 〒565 大阪府吹田市山田東4−18 千里山田コーポラスB504号	06−876−2104
鎌田篤夫	48M	足利工業大学附属高校 〒327−01 佐野市出流原町991	0283−25−0290
山口昌男	48M	日立機電工業㈱ 〒373 太田市矢場2961	0276−45−6327
尾高秀一	48E	三菱電機㈱群馬製作所 〒373 太田市熊野町25−10 三菱電機桃ケ丘社宅	0276−25−6173
海老原孝司	48E	近畿電気工事㈱ 〒281 千葉市稲毛東6−10−2−803	0472−47−1713
長谷健二	48E	フジマル工業㈱ 〒228 座間市入谷2丁目135−24	
川崎喜孝	49M	五洋建設㈱ 〒175 東京都板橋区高島平1−72−20 コーポ寿なが301	03−550−0293

品田忠保	49K	三井三池製作所㈱ 〒328−03 栃木市田村町1080 三井田村寮3−13	0282−27−4976
海老沼義郎	49K	大気社㈱ 〒330 大宮市大和田町2−511	0486−86−1283
熊田武夫	49K	クノール食品㈱長野出張所 不　明	
山口　明	49K	興国化学工業㈱ 〒326 足利市本城2丁目1789	0284−41−7963
柴野真知子 （旧姓加藤）	50C	不　明 〒373 太田市新井町574−14	
大前寛美	50S	不　明 〒079−13 北海道芦別市上芦別542の2	01242−2−4173
渡辺　等	50M	不　明 〒377 群馬県渋川市	0279−24−5825 （呼）
高橋茂雄	50M	高崎製紙㈱ 〒340 草加市青柳町1626	
小林　茂	50M	日産自動車㈱ 〒228 神奈川県座間市四ツ谷318−1	0462−56−0239
大島茂雄	50M	電々公社 〒370 高崎市貝沢町730−1	
須永　守	51M	サンデン㈱ 〒373−01 太田市大字成塚677−1	0276−37−1525
綱川　猛	51P	関東サーモ㈱ 〒376 桐生市新宿通り1丁目432	0277−44−9042

武井　昇	51院W	職業訓練大学校 〒229 相模原市西橋本1−14−32 訓大橋本宿舎1−15	0427−71−6988
島田文夫	52E	日本電気㈱ 〒223 横浜市港北区日吉本町899 SKビル203号	044−62−7414
池上　栄	52E	太陽電気㈱ 〒371 前橋市川原町208	0272−21−8506
小井田　広 （旧姓生出）	52J	三栄測器㈱宇都宮製作所 〒321−33 栃木県芳賀郡芳賀町東水沼362	0286−53−1151 02867−7−3018
浦野克美 （旧姓桜井）	52C	日本抗体研究所㈱ 〒379−01 安中市東上磯部1651	0273−85−4361
網川法子 （旧姓荒川）	52P	栃木精工㈱ 〒376 桐生市新宿1−12−21	0277−44−9042
大塩茂夫	52P	長岡技術科学大学 〒949−54 新潟県三島郡越路町来迎寺甲1641−2	0258−92−2863
河内秀夫	52C	かわち文具㈱ 〒376 桐生市本町5−62	0277−47−2246
馬坂達男	52院P	太陽誘電㈱ 〒370−33 群馬郡榛名町下室田800−3 太陽荘	02737−4−0214
小林一郎	53L	日本メディコ㈱ 〒270−11 我孫子市並木6−4−28 並木荘10号	0471−85−1228
吉野博文	53L	リコー㈱ 〒142 東京都品川区大崎4−5−16	

陳　親博　53院L　〒326 足利市栄町1丁目3360
昭和58年11月ダウラギリ1峰にて逝去

永島孝作　53院P　四国製紙㈱三島工場
〒799−04 愛媛県伊予三島市朝日3−4−30
レジデンス武村303　0896−24−2169

木村博志　54W　平岡織染㈱
〒340 草加市弁天町435−2　0489−31−5879

真鍋忠男　54C　教員志望
〒969−62 福島県大沼郡会津高田町大字杉屋字村廻

滝　裕徳　54S　東海アセチレン㈱
愛知県豊橋市忠興1−1−6
コーポ白鳥204号　0532−63−0966

喜古寿一　55W　市田KK
〒120 東京都足立区綾瀬2−8−1　03−602−0037

大橋　忠　55C　泰栄商工
〒311−02 茨城県那珂郡那珂町向山1279−67　02929−8−5746

土山龍司　55M　不　明
不　明

新里　均　55E　沖縄エアポートサービス㈱
〒904 沖縄県沖縄市字山内672番地　09893−3−0877

野上達哉　56院C　日産化学工業中央研究所
〒274 千葉県船橋市習志野1−5−17−406　0474−68−0714

江川幸和　56S　藤本製薬
〒583 大阪府南河内郡太子町春日84−4 三英ハイツC−201
0721−98−4086

橋本　勇　56L　ビクター㈱
〒426 静岡県藤枝市茶町4丁目　茶町ハイツ201号
0546−44−4076

村田　進　56M　㈱富士電機総合研究所
〒193 八王子散田町3−6−19 第10芙蓉寮　0426−63−0575

太田　稔　56J　凸版印刷㈱
〒136 東京都江東区東砂1−6−15　03−645−1332

井上祐治　56M　日本電装㈱
〒474 愛知県大府市横根町名高1−5
日本電装第1大府寮1033号　0562−47−1191

根岸和美　56L　日本電子機器㈱
〒372 伊勢崎市稲荷町469−2　0270−24−2255

関口満雄　56M　花王石鹸
〒321 栃木県芳賀郡市貝町2606−6 花王赤羽寮 02856−8−1621

古川孝司　56W　オンワード樫山㈱
〒157 世田谷区祖師谷6−25−25 椎山荘105号　03−300−1487

本多偉知朗　57院P　杉村特許事務所
〒176 東京都練馬区氷川台4−49−4−303

浅香多喜夫　57K　コロンビア・マグネプロダクツ
〒321−43 栃木県真岡市台町2753　新明寮　02858−2−1211
(呼)

増田光男　57M　古河電工
〒254 神奈川県平塚市菫平16−10 古河電工菫平寮
0463−34−4465

佐藤正幸　57E　不　明
不　明

北川昌基　58M　イスズ自動車　045−823−2990
〒244 神奈川県横浜市戸塚区平戸　イスズ戸塚南寮B−108

中村雅秋　58P　東洋紡績㈱総合研究所
〒520−02 滋賀県大津市美空町1−3
琵琶湖美空第2団地2号棟301号　0775−73−5277（呼）

飯島宏幸　58W　三菱自工岡崎
〒444 愛知県岡崎市小針町字北畑8−1
三菱自工岡崎第一菱風寮A541号　0564−31−4945（呼）

井ノ瀬　純　58C　富士フイルム
〒250−01 神奈川県南足柄市狩野934
富士フイルム第7アパートA−311　0465−74−1727
自宅　〒370−35　群馬郡群馬町金古1182−3
0273−73−0869

黒沢　浩　58S　教員志望
〒366−01 埼玉県深谷市矢島762　0485−71−0764

斎藤　究　58M　東芝精機
〒242 神奈川県大和市中央5−8−23 東芝精機青雲寮
0462−64−3488

山田　靖　58M　日揮㈱
〒222 神奈川県横浜市港北区太尾町875 日揮大倉山寮
045−543−2875

太田直宏　58K　中部ガス浜松営業所　0534−65−1234
〒430 静岡県浜松市中沢町34−2　0534−71−0055

星野和弘　58W　東村役場
〒376−03 勢多郡東村大字小夜戸491　0277−97−3507

大東浩司　58S　立石電機㈱
〒523 滋賀県近江八幡市野村町748　0748−36−6159

若田部純一　58A　群馬県庁
〒370−26 群馬県甘楽郡下仁田町吉崎153
道平川ダム建設事務所　02748−2−4284

増子　隆	58M	日立工機	
		〒311−42 茨城県水戸市岩根町990	0292−29−7271
芦沢徴之	59C	不　明	
		〒367 埼玉県本庄市銀座3−6−3	0495−21−8550
水上　徹	59S	パイロット・プレシジョン	
		〒254 平塚市四ノ宮542 清風荘1F西舎川	0463−54−4370
		自宅 〒177 東京都練馬区石神井町7−6−11	03−904−5532
堀尾直史	60S	スタンレー電気㈱	
		〒227 横浜市緑区荏田南2−17−8	
		志村マンション502号	045−941−7629
		自宅 〒446 愛知県安城市大岡町前畑22−1	0566−76−8343
田村博之	60M	日本ラヂェーター	
		〒326 栃木県足利市助戸東山町1714	0284−42−1868
清水浩彰	60A	静岡県庁	
		〒436−04 静岡県小笠郡大東町中方1717	05377−4−3425
小潟利己	60院C	三井東圧化学	
		〒297 千葉県茂原市六野2785−1 六野寮	0475−22−2282
		自宅 〒370−01 佐波郡境町保泉277−4	0270−74−3300
木津和久	61院S	イビ電気	
		〒503 岐阜県大垣市青柳町	0584−91−6346
		自宅 〒462 名古屋市北区辻本通2−18	052−912−6304
豊島吉章	61L	東京重機	
		〒151 東京都渋谷区幡ヶ谷2−14−5−702	03−377−8068
		自宅 〒794 愛媛県今治市通町1丁目5−6	0898−22−3321

飯塚宣男　61J　カシオ計算機㈱

〒190−11 東京都西多摩郡羽村町栄町2−14−2

カシオ計算機㈱羽村寮306号室　0425−55−6987

自宅　〒370−04 新田郡尾島町前小屋1818−1　02765−2−2607

高橋好幸　61A　㈱本間組

本間組社員寮　0252−22−2668（呼）

自宅　〒946−02 新潟県北魚沼郡守門村大字大倉1643−5

025797−2061

橋本英一　61C　星電器製造㈱

〒370−01 伊勢崎市下道寺町85−2　0270−32−0869

部　員　住　所　録

1986年6月現在		現住所・帰省先	TEL
坂本　敦	院2C	〒376 桐生市西久方町1−6−8 正田荘	0277−47−4162
		〒368 埼玉県秩父市中村町2−5−17	0494−23−0811
越沼　敦	院2K	〒376 桐生市天神町3−14−45 啓真寮	0277−43−8076
		〒327 栃木県佐野市堀込町307−1	0283−23−0991
新井通明	院2L	〒376 桐生市境野町6丁目1576	0277−44−1523
山中　卓	4M	〒376 桐生市天神町1−1−32 北村方	0277−43−8279
		〒407−03 山梨県北巨摩郡高根町清里3545	0551−48−2403
伊藤信吉	4M	〒361 埼玉県行田市佐間2−16−16	0485−56−2564
小池寛喜	4K	〒376 桐生市天神町1−1−32 北村方	0277−43−8279
		〒377−11 群馬県吾妻郡吾妻町大字松谷582	0279−67−3471
伊藤大介	4S	〒376 桐生市天神町1−1−32 北村方	0277−43−8279
		〒239 神奈川県横須賀市ハイランド2−16−2	0468−48−7337
志村　亨	4K	〒376 桐生市本町2−2−17 岡田方	
		〒188 東京都田無市谷戸町3−11−38	0424−22−0699
藤井修一	4M	〒376 桐生市菱町黒川2359 藤崎荘	0277−45−2989
		〒371 前橋市下小出町2丁目20−16	0272−33−3865
松井一吉	4K	〒376 桐生市菱町黒川2359 藤崎荘	0277−45−2989
		〒370−13 多野郡新町2619	0274−42−2413
田村健次	4P	〒376 桐生市西久方町1−8−23 品川荘	0277−22−5142
		〒370−23 富岡市野上290−3	02746−3−5929

長谷川淳一	4W	〒376 桐生市東久方町1−2−12 津久井コーポ	0277−22−9540
		〒377 渋川市石原1231−8	0279−24−5298
赤塚　靖	3M	〒376 桐生市菱町黒川2359 藤崎荘	0277−45−2989
		〒371 前橋市前箱田町2−4−5	0272−51−5993
古庄勝己	3W	〒376 桐生市天神町1−1−32 北村方	0277−43−8279
		〒840 佐賀県佐賀市巨勢町高尾159−7	0952−26−3014
市原　敦	3M	〒376 桐生市菱町黒川2359 藤崎荘	0277−45−2989
		〒069−01 北海道江別市大麻高町16−1	011−386−6878
浅見高志	2C	〒360−02 埼玉県大里郡妻沼町男沼574−1	0485−88−1838
嘉村肇晃	2W	〒376 桐生市本町1−8−22	0277−47−1339
新藤洋一	2E	〒376 桐生市広沢町5−1413	0277−53−3372
糸井伸雄	2L	〒371 前橋市小坂子町710	0272−69−4410
土佐融児	2M	〒376 桐生市菱町黒川2359 藤崎荘	0277−45−2989
		〒184 東京都小金井市前原町4−13−21	0423−83−3484
木村幸夫	2K	〒376−03 勢多郡東村神戸528	0277−97−2270
生形泰久	2S	〒376 桐生市浜松町1丁目4−1	0277−47−1423
平井智則	2L	〒369−01 埼玉県北足立郡吹上町富士見4−8−17−1	0485−49−0859

福島徳明	2L	〒370−05 邑楽郡千代田町赤岩180−4	0276−86−2561
井上俊一	工短1	〒376 桐生市梅田町1−63 星野方	0277−32−1900
		〒338 埼玉県浦和市上木崎4−3−3	0488−32−5330

顧問

斎藤勝男	機械科（材料加工講座）		
		〒376 桐生市相生町5−102−19	0277−52−0437

群馬大学仙ノ倉山荘　管理人

剣持義治	新潟県南魚沼郡湯沢町土樽	02578−7−3080

編　集　後　記

「皇海」１１号を、ようやく皆さんにお届けすることができました。　１０号の発刊から３年もの年月が経ってしまい、今号を待ち望んでいた方々には大変申し訳ありませんでした。　ともかく、今年度卒業される先輩方には直接渡すことができて、ひと安心です。

今回の「皇海」には、昭和５７～６０年度と６１年度の一部の記録が収まり、その丸々４年間のさまざまな山行記録は、読みごたえのあるものと思います。　なお６１年度の残りの記録は次号に載せる予定です。

最後に、記録を書いていただいた部員の皆さん、そして費用の面でご協力いただいたＯＢの方々に、お礼を申し上げたいと思います。

皇海 11 号（昭和57年~昭和60年）

発行日　１９８７年３月

発　行　群馬大学工学部
ワンダーフォーゲル部

〒376 桐生市天神町１－５－１

印刷所　桐生タイプライター有限会社

ＯＢ住所録正誤表

ページ　行	誤	正
６０－６	川越市東田町４－１１	不明
６０－１６	大宮市三橋市３－１４２－１５	不明
６１－５	前橋市古市町　東芝電機器具寮	不明
６４－２３	栃木県田村町１０８０ 三井田村寮３－１３	不明
６０－１０	群馬郡榛名町下室田８００－３ 太陽荘	不明
６７－１９	愛知県大府市横根町名高１－５ 日本電装第１大府寮１０３３号	〒470-21　愛知県知多郡東浦町 生路浜起２２　グリーンハイツ 生路Ａ１０５
６８－１４	滋賀県大津市美空町１－３ 琵琶湖美空第２団地２号棟 ３０１号	不明
６８－２１	井ノ瀬　純	井瀬　純
６８－２２	南足柄市狩野９３４	南足柄市狩野９３２
６９－１４	平塚市四ノ宮５４２　清風荘 １Ｆ西舎川	不明
６９－１７	横浜市緑区荏田南２－１７－８ 志村マンション５０２号	不明
６７－１３	静岡県藤枝市茶町４丁目 茶町ハイツ２０１号	不明

桜の花が、あちこちで見られるようになった今日この頃、先輩方にはますます御健勝のことと思います。

さて、部誌「皇海」１２号もようやく２年ぶりに発刊できました。今回は、昭和６１～６３年の合宿及びＰワンの記録が収められております。

「皇海」発刊にあたり、誠に勝手ながら今回も先輩方に費用の面の御協力をいただきたいと思います。つきましては同封の振込用紙に必要事項を御記載のうえ３５００円以上のお金を添えて、お近くの郵便局に振り込んでください。

よろしくお願いします。

口座番号：宇都宮　２－４２７２１
名称：群大ワンダーフォーゲル部

群馬大学工学部ワンダーフォーゲル部

平成元年度　部長　　神保　裕紀

追伸　ＯＢ住所録中の変更、又は不明になっている方の連絡先等わかりましたら、お手数ですが同封のはがきで、お知らせください。近況報告も楽しみにお待ちしております。